

反返る途端に傷を蒙りて布圍押以上の災難に出會した。

(三)

◎家計固より貧しかつたので、屢々山に入り薪を採り之を市に售つた時として探薪の途を外れて山中の廢寺に坐り込み、飲まず食はずで三日三夜も思を冥々の裡に凝らしたこともあつた。

◎或時近隣の下駄屋から彼に留守番を頼まれた。彼は其日限の番公となつて、店頭に坐つてゐると、那摩な時には不思議に客の來るもので、ヤレ駒下駄の、ヤレ雪駄の煩い程飛んで行く。シテ其値段はと聞けば、唯い何れでも一足が天保十枚ぢやと中には貴いのもあらうが、概して箆棒に廉いと云ふので、晩方迄には畧賣れ切つて了つた。然るに店主は用を濟して歸つて見ると驚いた。僅に一日の内に品物拂底といふ景氣だから、先づ彼に對して繰返し「お禮を述べてサテ其れから賣揚高を勘定すると、何でも一足天保十枚の見當だから、算盤の合ふ譯がない。ソコデ店主は二度吃驚りして、開いたる口の塞からざること七日七夜であつたとサ。

◎彼は一たび薩州に往き、西郷桐野の面々に會見せんと思立つたが、旅費がない。其處で一升飯を掻込み、熊本迄行つたが空腹で一步も動けなくなつた。友人を叩き、飯二升計り焚かせて、饑腹喰ひ、ヤツトの事で鹿兒島に著いた彼の剛情はまあ這んなものであつた。

◎或年の夏郷友の爲に祖道の宴を張つた會するもの何れも、詩歌俳句などをヌタ繰るので、彼も其聲に倣つて七言絶句を作つた。其結句に曰く、七月炎天焦面行とは、頭山式で振つてるぢやないか。

◎曾て西郷従道や品川彌二郎等の國民協會を起さんとするに臨み、先づ彼を羅致せんとして、人を以て誘説せしめた時に、彼は酒樓にあつて、流連數日敢て阿矯の傍を離れ様ともしない。其れから兩三度の懸望のため、ヤオラ身を起して、西郷邸に赴いた。坐にあるものは、松方西郷、樺山品川等を始め、時の勢力者のみで、彼を待つこと久しと云ふのである。彼れ乃ち徐に口を開いて曰ふには、凡そ世の中には爲さんと欲して爲さざるものがある。爲すも遂になし得ざるものがある。又始めから爲さうともしないものがある。僕は爲して遂に爲し得ざ

らんよりは寧ろ爲さずして爲さるのを喜ぶものである。諸公は今や國家の爲に大に爲さんとせらるゝのであるから、僕は謹んで諸公の爲す所を拜見し様と思ふのである。と一座之を聴いて呆然たる光景であつたが、後西郷人に語つて曰く、頭山は己よりも餘程上手ぢや。

◎愛國社を再興せんとするに方り、其主盟たる板垣伯が頻に逡巡するので、頭山は卒然起つて、勝間の一物を握りて、伯の横面を撲付けた。勢恰も稻妻の如く、面を避くるの餘裕もなかつたが、伯は之が爲に頓悟し、直に議を決したと云ふことである。

(三)

◎佐久間町の信濃屋は、一時彼が籠城の本據であつたが、彼の負債は山の如く、或時債鬼等大舉して責め來り、督促頗る嚴重である。節偶々夏の盛りであつたが、彼は素つ裸となり、一物をづら下げた儘、債鬼の前に立ち、乃公は此通りである。と云つて、一座を睨んだ。眼光異彩を放ち、何となく薄氣味が悪いので、彼等は何れも平伏して、ご都合の時までお待ちませうと云つて、這々遁げ去つた。

◎玄洋社の健兒と云へば、一時數百名を算し、上京してゐるものも随分多かつた。是等が今猶絶えず、酒料だの小使錢を貰ひに來る、什麼な健兒輩も、自分の懐中物を持つて行く様な譯には行かぬから、諄々として虚實搗き混せて、錢に窮する所以と恩借を乞ふの止むを得ざる理由を述べると、彼は黙々として聴いて居るが、聴て袂を探り、何程かを攫出してやる。

◎之は彼が上京の當初であつたと思ふ、一日床屋に入つて顔を剃らしてると、其前を素的滅法な優物が通るので、彼は其何物たるかを剃手に問ふた處が、其は其頃の流行兒の藝者小妻であつたので、彼は遊意頓生、忽ち剃手の爺々を案内さして、某旗亭に上り、小妻を招んだ。之が抑小妻と濡事の皮切りで、而も又東京の花柳界に浮名を流した搖籃である。

◎濱の家は旗亭として、東都の第一流に位するものである。客あり案内に連れ直に室に通じ、傲然として床柱に據つて坐り、忽ち酒肴を命じ、妓を招かしめた。が、初客で、姐株も何ものとも一向に見當が付かぬので、女將に其旨を通ずると、女將は來つて挨拶をなし、種々探りかけて見ても、石地藏と語るが如く、何等要

領を得ない。山師の様にも見え、壯士の親分らしくもある。海千山千の女將の目にもこれであるから、女中等のまごつくのも無理はない。任意に倒さるゝ迄も、この風變りの客を遊ばしてやらんと、御意に應じて、盛饌處狭き程に列べ、牡丹芍薬一時に咲き亂れた。其より彼は流連數日、飄然と去り、飄然と來ると云ふ有様であつた。

◎或時例に由つて濱の家に巢籠つてゐると、誰であつたか彼に對して、お禮の積りで一封の金を持つて來たが、彼は之を手にも取らず、無論開けても見えず、卒然其は女共に與ると云つて、空嘯いてゐる。女將開き見れば、折目もつかぬ手の切れ相な百圓札が三十枚、即ち三千圓あつた。

◎數年前彼が唯一の米櫃であつた夕張炭山が百數十萬圓で、井上角五郎等の肝入で、炭礦汽船會社に賣れた。彼は永年の借金を悉く利倍して返却し、且つ國元の玄洋社に五萬圓を寄附した。で豪傑連も之をムザ／＼散らして了ふのは、惜しいと云ふので、嚴重なる保管法を設けて、長く彼の厚意を感謝することにしたとのことである。

(四)

◎往年彼れ歸國して、辻車に乗り下車すると共に、例に由つて幾何とも知らず、懐錢をつかみ出して與へた。正直なる車夫は眼を圓くし、這は近頃この邊を徘徊する大泥棒に違ひあるまい。然らざれば二三十錢位の賃金の處にかく數圓を貰へる譯がないと、走つて其旨を警察に訴へた。係員も驚いて、非常線を張り大に物色すると、豈圖らんや、其は彼れ頭山であつたので、一同顔見合せてオヤオヤ。

◎松方内閣の成るや、候一日彼を招いて、縷々千萬言を費して、財政の急務を説き、且つ現今の急務を問ふた。彼即ち言下に答へて曰く、乃公に金儲をさせるのが、何よりも急務じやと、之れには松方も二の句が續けなかつた。

◎同じく松方の内閣總理大臣時代のことだ。何用かあつて、彼は首相官邸に松方を訪ふたが、折悪しく差問があつて、直に會へぬから、暫時待つて呉れと云ふので、彼は應接所に控へてゐたものゝ、待遠しさの爲事なしに、ソーフターの上に大の字形に寝轉んで、義太夫を迂鳴り、時々大きな屁を放つてゐる。此時たま

たま三井の大番頭の益田孝が又首相を訪ねて同じき應接室に入つて来た處が彼れ頭山は益々傍若無人の體で、行り續けてゐるので、孝も驚いた。聽て午砲が聞ゆる、彼は手を鳴らして給仕を呼び、晝飯を命じた。暫時すると晝飯が来た、但し一人前だ。彼之を見て叱して曰く、其處に今一人客が居るぢやないか、一人前ちや仕方がないよと、孝益々驚いた。是では總理大臣其處除けだ。  
◎其夜孝は時の貴顯富豪の徒數輩と、濱の家で會飲した。其席上今日は首相官邸で恐しい人物に逢つたとの話をなし、中座して便所に通ふ。出合頭に晝間の例の豪傑に會つた。女中に其何人なるやを聞くと、ハ、彼のお方ですか、彼は頭さんですよと、頭さんとは頭山の事で、其頃粹界の通名であつた。孝曰くナ、ル程く！

(五)

◎今は左程でもないが、彼が盛なりし頃は毎時も晩膳六十人前位は列べたもので、大小豪傑乃至豪傑の卵が食つては出で、出でゝは来る、純然たる帝都の梁山伯であつた。

◎條約改正で來島恒喜が大隈伯の一脚を折つた時に、來島は頭山の帷幄に參してゐたと云ふので、彼は法廷に喚問されたが、彼は平然として曰く、乃公の家には毎日幾十人となく、色々の人物が來るが、乃公は一々名も覚えねば、面を知らぬものが多い。來島も來たことはあるだらうが、其は何事に來たか、一向に覺へがないと計り、些の捉へ所もないには、判官も閉口したとのことである。  
◎矢張其頃の事で、三島通庸が警視總監で、嚴に保安條例を厲行し、所謂志士浪人を容赦なく、東京市外數里の地に退去せしむる時であつたと思ふ。警視廳では、是非彼を檢舉して、了はねばならぬと云ふので、彼が本據の濱の家を角袖刑事連が付視つた處が、彼の乾兒等亦た之を知り、彼を護衛のために、處々に歩哨を配置し、卒と云は、爆彈一呼の下に破裂せんとする光景であつた。で、刑事等は、彼が陣取れる下座敷にあり、彼が便所に下るのを待つて、警察に同行を求めたが、彼は唯一言、乃公は那麼な所に行くのは否だと云つた限り、ズン、階上に去つて了つた。當時彼は狎妓の緋縮緬の長縹絆をダラシなく纏ふてゐたが、刑事等も其上強ゆれば、何事が起るか譯らぬと云ふので、惜しい幕を見通し

たこのことである。  
◎彼が何だか一個平生非常に大切に人に見せぬものがある。處が例の來島騷の際で家宅搜索の結果之を得て鬼の首でも獲た積りで、匆匆持歸り。一同立合の上中を極めて見ると、這は什も如何巫山雨を喚ぶ歌磨式の彩畫又は情人より贈れる戀しゝの色文計りで、何一つ役に立つものはないので、之には鹿爪らしき法官連も開いた口が塞がらなかつた。

(六)

◎豪傑は酒を嗜み英雄は色を好むものだが彼は一滴の酒をも口にしない。又數年前迄は随分熾に漁色をやり、就中新柳兩界の蕾の花は大抵銅山王の古河市兵衛爺々と彼とでた手折り盡くしたと云ふ位だが、頃者は此方の噂も頓と聞へぬ様になつた。彼も亦た老いたのか、抑他に因縁のあることか。  
◎彼は基を圍み、刀劍を愛し、今亦閑に乗じて字を習つてゐる。習字の師匠時々來つて筆法を授くる。其教授法が頗る奇抜で、彼が筆を執つて紙に臨むと、師匠は此方より聲を張上げ、グル〜ピンと云ふ風に長短抑揚して音節を付くれ

ば、彼は其に随つて書初むる當初は、旨く行かなかつたが、只今では餘程馴れて來て、筆勢も頗る雄勁で、大抵の書家も裸足で通出す位に進歩して來た。  
◎立雲とは彼の雅號である。今でも旅館信濃屋を訪ぬると、或室には猶彼の書いた額がかゝつてゐる。其は小兒の書いた様な文字で、署名の肩書にある鎮西の豪傑も泣き相な格好だが、此頃の彼の書を見ると、眞に夏雲飛動の勢があつて、其立雲の鎔號に背かない。

◎此次清國革命に付彼の幕下も大分乗込んで行つたが、到頭舊臘廿三日に、彼も犬養木堂と相前後して渡清した。人あり、其何の爲に然るやを問ふ。彼答へて曰く、チーニ小供の始末に行くのさと、是より先き彼地に我が喰詰者が澤山に混入して面汚しをやつてゐたので、彼の着後直に命を下だして、是等は容赦なく撲り返すことにしたので、大に人氣を恢復したとのことだ。

◎昨春大原義剛が九州日報の社長に推され、是迄の太平洋通信を辭して福岡に下つた。他の野心連竊に之を猜んで、悪言を放つた。彼之を聞いて曰く、鳥の餌を鳶に撒はれたのだ。誰か鳶鳥の是非を知らんやとでも云ふべしだ。

野心老いて猶休まず 陸軍中將 高島鞆之助

◎彼は薩人中では最も野心多く、機略に富める男である。嘗てメツケル將軍が我が陸軍に招聘されて来るや、當時の將佐連は片つ端から其鼻梁を折られたものだが、獨り彼は豫め之に備へ、反對にギヤフンと云はした話柄もある位だ。

◎彼は第四次の松方内閣に陸軍大臣となり、第五次の伊藤内閣に拓殖務總裁となり、第六次の松隈内閣に再び陸軍大臣となり、其後退隠して、竊て風雲の變を窺ひ、徐に兵糧彈藥の調達方に腐心してゐる様だ。

◎由來薩州出身の元老連、一見疎豪朴訥で、頗る金錢に縁なきが如くにして、其内甚だ財實に吝で、意外の長者が多い。例之は侯松方伯樺山伯山本の如き、何れも數百萬の産を有して、特に不思議な様に感せらるゝは、茫々漠々のおん大將公大山にして、猶數十萬の長者たるのである。此點より見れば、利慾一天張の長者連が却て三舍を避くる位なものだ。想ふに南州甲東の意氣襟懷は既に薩人の血管中に跡を絶ちしものにや、何ぞ猶太式の熾なるやだ。

◎彼れ高島は、矢張拜金宗の一人で、之を得るの捷徑として、鐵山に手を着けた。而して毫も中らない。今では其が爲に負債の山を成し、首も廻らぬ様になつたとの噂があるが、彼の金穴を覗ふは、他の芋連の蓄積主義と異にして、唯其野心を伸ばすが爲の兵糧彈藥の必要から起つたものである。彼の性格傾向より推斷すれば、或は之が其真相らしい。而して革丙將軍の老いて猶生命あるは、此處である。

◎彼は頭山滿には親しい様だか、全體克く相似た處がある。但彼は頭山より更に野心と銳氣が際立つて見ゆる。彼が從來何れの内閣にも用ゐられ、相々敬遠されたのは、之があるが爲で、今でも山縣桂の一派には薄氣味悪く思はれてゐる。如く何時彼が暗中より出來つて、何を演ずるや、知れたものでない。極東の將來は益々多事だ、將軍其れ自重加餐せよ。

天下の浪人 元和歌山藩士 岡本柳之助

( 一 )

わに  
か  
し

◎軍人出身で維新の際に勳功を立て且つ膽氣もあり才略もあつた男だつたから、一直線に軍人で押通したら、彼が棺を蓋ふの時は、無論陸軍大將何爵位には漕付けたらうに持つて生れた卓犖奇矯の彼にはソナ辛氣臭い梯子上りの藝當が出来ない何でも一か八か天下を驚動さして見やうと云ふ様な遣口だつたから、遂に一生數奇を以て終り、奇人の仲間人をする様になつたのだ。

◎彼は和歌山藩士諏訪新右衛門の次男で、嘉永五年江戸赤坂の藩邸に生れ、後出で、岡本家を繼いだのである。慶應三年十六歳で幕府の砲兵練習所に入り、明治元年には砲隊を率ゐて紀州領の伊勢の松坂に屯せしが、次で藩政改革の際津田出に拔擢せられ、紀藩の歩兵大隊長となつた。彼れ時に年二十歳と云ふのだから、開が才略の一斑をも知らるゝ。既にして砲兵聯隊長に昇進し、明治四年の廢藩置縣に方つて、東京に出で、東京鎮臺砲兵隊編制の任に當りたる後、一旦故山に歸臥し、後再び召されて、今の公爵桂太郎と共に砲兵大尉に任せられた。

◎彼は元來、叛骨逞しとや云はむ。當時少年の身を以て、和歌山藩江戸隊の一隊

長でありながら、其國元では頻りに勤王論を唱へてゐるに拘はらず、彼は竊に彰義隊に通じ、上野の戦争には夜間我部下を提げて應戦する筈なりしに、上野は脆くも晝間の一戦に陥落した爲に、彼が密計も晝餅となつた。

(三)

◎此事ありし爲に、紀州藩にては大に公議の疑を蒙り、且つ彼を其儘本國に入れば、勤王論者との折合つかざるを以て、伊勢に預くることとなつた。が、借この伊勢には津に藤堂藩あり、松坂に紀州藩の領分があつた。然るに藤堂家は徳川氏譜代の寵臣なるにも拘はらず、伏見戦争にも官軍に内應し、上野でも官軍の手先となつたので、彼れ岡本等は、太く其情誼に薄きを嫌らずに居たので、偶伊勢預となりしを幸に口實を設けて、藤堂藩と争を醸し、態と大砲を曳いて津に亂入し、之を脅かしたるが如きは、随分痛快な悪戯だ。

◎西南の役には、黒川通軌の第四旅團別働隊參謀として、宇土に上陸し、山川浩と協力して、重圍突破の熊本軍との連絡を通じ、又人吉の追撃戦には山路に代りて一大隊を指揮し、其神出鬼没の戦術は、敵の膽を寒からしめた。當時彼が

肥佐士原等の歸順兵を率ゐて戦ひたる大膽には他の舌を巻した相である。◎竹橋暴動は明治十一年六月恰も西南役後に爆發し其起因は論功行賞の不平にあつたのだが其が近衛隊と云ふので大變な騒となつたものゝ元來不平の結果に過ぎなかつたので忽ちに鎮定し彼は其首魁と目せられて本官褫奪と同時に終身官公職に就くを禁せられた蓋し此時は其首級の喪はれん計りなりしも從來の動功に差引かれて其計は取止めたものらしい之が即ち彼の天下の浪人としての金看板の上げ始めである。

◎征韓論は西郷南州等と共に彼の大に主張せし所で爾後深く韓國に注目し、明治八年江華島事件起り其翌年大使黒田清隆に隨行して渡韓し謂ゆる濟物補條約を締結して外交的手腕を揮ひ十六七年頃には金玉均を助けて政治の改革を企て次で二十四年現露國皇帝が皇太子として來遊せる際東洋政策てふ一書を著して日韓關係を痛論し征清の必要を唱へて時の當局者を動した◎當時我國は伊藤内閣で陸奥宗光外務大臣として剃刀的辣腕を揮ひ朝鮮では閔氏一派と大院君一派とあり陸奥は此兩派に向つて手を入れた竹内

網林有造等は閔氏懷柔係で岡本は大院君に差向けられたが閔氏方の懷柔は姑息にして功を奏しなかつたが岡本は大院君の信用を得て遂に大院君を擁し大島公使の京城入迄漕付けた。

◎彼等は我政府の態度緩漫なるを慨し參謀本部でやらねば我輩の亂暴本部で引受けると豪語せる程にて彼の氣焰は凄じいものであつた兎も角も對韓問題に付ては是より先き三浦梧樓等と廣島の牢獄に迄下されて大分辛酸を嘗めたものだが日韓合併の今日より見れば彼の努力に對して國民は感謝して宜らうと思はるゝ。

(三)

◎新井日薩は日宗近代の傑僧だが彼は什麼な動機に由れるか偶然この和尙と議論を闘はして降服せしめられ爾來深く之に歸依し其腕白仲間の岡崎邦輔鈴木天眼中野次郎等と二本板の日宗學林に通ひて讀經を學び或は相伴ひて甲州身延山に參籠して丹田の耕耘に力めたものだ而して其意は宗教の勢力と妙諦を政策に利用し人心の收斂を謀るべしと云ふのであるから穴賢々



なだ。  
 ◎彼は軍人たり、志士たり、俄道心たり、舞臺は種々に變化するが、其變化は死に至る迄休まなかつた。其次には金でも欲しくなつたと見へ、軍隊用運搬炊車を發明して、專賣特許を得、頻に金の生る木に攀上ることゝなつた。  
 ◎朝鮮問題の落着と共に、彼は直に視線を支那問題に回轉し、殊に今回の革命騒動に對しては、六十一歳の老軀を擁して渡航し、語つて曰く、眞の革命は是れからで、造は皮切と云ふものだから、故に己は緩り腰を据ゑて、其成行を觀る積りだと、竊に雄飛する所あらんとした。命なる哉、彼は突然腸出血に係りて、上海の客舎に仆れた。此老骨が床の上に住生を遂げずして、而も壯志を抱いて、客途に逝けるは、實に悲壯哀痛の極だが、天下の浪人として宜しく斯くあるべきものだ。

麒麟も老いては駑馬に若かず

馬城將軍 大井憲太郎

◎一時彼は星亨と相駢んで自由黨の二明星と目せられ、關東派の旗頭として有名なものであつた。彼の衆議院全院委員長に兼ねるに、東京辯護士會長であつた時、蓋し其盛名の絶頂であつたらう。爾來年と共に段々下り坂となり、今では生きてる否や、殆んど知るものもなく、全然過去帳の中に葬られて了つた。人間の榮枯盛衰は眞に夢幻より果ないものではないか。  
 ◎彼れ生得謀叛氣多く、殆んど其一代を擧げて計劃より計劃に送り、未だ其成功談を聞かないのは、蓋し謀密ならざる乎、實行の力伴はざる乎、將た天彼に幸せざる乎、何れにしても不運と云ふ外はなからう。彼は曾て明治の新知識で、自由民權の爲には、家をも身をも遺れて狂奔したものである。而して亦た韓國問題には、夙に注目してゐたが、夫の金朴兩士の相談を受け、故後藤象次郎が韓國革命を企て中途にして挫折するや、彼れ大井等の熱血漢は、頗る之を遺憾として、小林樺雄、新井章吾、影山英等の同人と共に密策を凝らし、爆彈利刃を擁して、將に渡韓せんとするに臨み、同志の反覆の爲に發覺し、皆縛せられて處刑を受けた。謂ゆる大阪事件は、即ち之である。

◎後彼は暹羅貿易を企て、一攫萬金を試みしも、時亦た利あらずして蹉跎し、爾來一起一仆其活動は休まざりしも、遂に時代の發展に伴ふ能はず、三十七八年の役に際し、彼は營口にて小新聞を起し、或は大連にあり、労働組合の看板を掲げて名利を争ひしも、強弩の末魯縞をだも貫き難く、形貌亦た索然として老い、彼が往昔の盛時を懐へば、聊か同情の念に耐えざるものがある、而して今は牛込區役所前に浪居し、其門前に法政研究云々の掲示をなしてゐるが、之れ即ち彼が最後の命を託する所以のものであらう。

天馬空を行くの健筆 前代議士 福本 誠

◎福本日南は筆を執れば日本第一流で、徳富蘇峯三宅雪嶺と相匹敵し、老來殊に洗鍊を重ねて、秋山に奇松亂立の圖を見る様な感がある、彼の文品は天稟で容易に模せられない處があるので、若し當初より専ら之を以て世に立たば、雄篇大作の必ず世耳を驚し、後昆に傳ふる程の産物もあつたらうに、惜哉野心甚だ多くして、寧ろ時間の大半は此方に潰して了ふ、而して一向に成功しない、白

雪滿頭を没するも、猶之を改めず、二十年前の日南其儘だ。

◎彼れ曾て平戸の管沼貞風と比立、實貿易を企て、竊に爲すあらんとして成らず、北海道に移住部落を作らんとして敗れ、ボンセ、アギナルド、孫逸仙等と相應じて雄飛せんとして、飛び損ね支那問題を標榜して、曰く東邦協會曰く支那調査會彼れ皆主なる肝煎をなせしが、是亦何時の間にか立消の姿となり、近く九州日報に社長として四五年間を費せしも、其成績面白からず、代議士として一度は出陣せしも、二度の戦で、早川鐵冶に對州で敗られた、彼が失脚の跡を此處まで辿り來つて、著者は覺へず長嘆して曰く、あゝ彼の學と才に加ふるに、勇敢を以てして、何ぞ爾く失脚の甚だしきや、曰く之には因縁がある、其は彼の甚だ短氣で、執着力と寛容の度に乏しく、又圭角多くして、容易に人を許さず、熱烈なる感情の爲に、偶常規を逸することがある、聖人でない限り、誰にも多少の批難はあらうが、彼に指摘すべき點は、マー這麼なものだらう。

◎園基が嗜好で、會心の友と相對して、打始めると、日が暮れても、初夜の鐘が響いても、曉の鳥が阿呆の聲を浴せても、容易に休めない、と云ふ、疑性な男である。

碁友で大石巖だの山田烈盛だの幾多の策連があるが、彼は就中大策で三十餘年來進境も見ず下境も見ず依然として初段に數子の名譽(?)を保持してゐる。彼はこの道樂の爲には文債をも遣れ米櫃の填補をも忘れ煙草で新衣に穴を開け夜半に夢を驚かして蕎麥を呼ぶと云ふ始末だ盤上に家をも我をも抛去つて唯白子黒子の點綴に夢中となる程の樂は他になからうがサテ之を傍觀し否然らざるも其妻たるものゝ辛氣臭さと阿呆らしさは察せらるゝ此に於て細君憤然として彼の他出に乗じ石と盤とを友人の家に運び去る彼れ歸來忽ち策友と黒白を闘はさんとして盤を求むれどもあらず細君を呼んで之を詰る妻君乃ち妮々數千言碁毒の説法を浴せかく而も其言一々肯綮に中る彼れ策友と共に頭を掻いてナール程く。

◎昨夏南極探檢費募集のために各所に知名の士の演說會を聞く就中神田錦輝館にて彼れ一場の長廣舌を揮ひ且つ壇を下り大柄杓を廻はして曰く順禮にご報謝々々々須臾にして約二十金を得た満場其頓才と滑稽とに拍手す。◎彼も種々な野心をやるの傍隨分著作の數をも殖して來た様だ先づ海軍を

皮切として日南子筑前志直江山城守黒田如水元祿快舉録國體の本義日南集日南草蘆集英雄論太閤とカイゼル等が其主なるもので最も能く賣出したのは元祿快舉録で之は啓成社の出版だが其迄は啓成社など一向世間では知らなかつた只此一書で彼の文名と共に社名を轟かした該書は實に萬を以て數ふる程に賣行き永年貧乏の日南もお蔭で一息ホット吐いたとのことだ。

風采だけは伯爵の殿様 同仁會理事 山田烈盛

◎肥肉長幹で顔容温雅何方から見ても立派な華族のご前だ大抵な人は貧すれば何處にか寂さの表現さるゝものだが彼に限り微塵そんな點がない彼を誰となす曰く獨知居士山田烈盛其人である。

◎彼は上總の住人で豪農の家に生れ父は徳望家で學者であつた。特別に學校經歷はないが幼より讀書が嗜好で成年の頃には一見地を有するに至つた所謂志士肌で天下國家は寸時も彼の腦底を去らないで草深き田舎に父の業を守る能はず一時日本新聞に入り大に獨知的論說を振廻はしたものである。

◎朝鮮の閔妃暗殺時代に彼は日本新聞特派員として三浦公使に隨行してゐたが、閔妃の兇刃に仆るゝに及び、彼亦た嫌疑を受けて廣島の獄に投せられた。當時彼が單純なる特派員ならざりしことは、其で知らるゝ。

◎彼は衆議院議員たらんと欲して、幾たびか郷里で戦つたが、毎戦毎敗で、誠に氣の毒千萬である。従來の千葉縣代議士てふものゝ顔觸を見るに、僅に鵜澤總明、板倉中關、和知長島、鷲太郎等を稍可なるものとし、他は碌々語るに足らない。然るに彼の門閥人物兩つながら、彼等に譲るものにあらざるに、未だ一回だも選良の數に入らざるは、蓋し兵糧給らざるが爲か、謀密ならざるが爲か、將た大に努力せざるが爲か、聊か彼が爲に之を惜しまざるを得ない。

◎彼は同仁會として伯大隈を會頭に戴き、清鮮方面に醫の仁術を施さんとする團體の理事として活動してゐる様だが、彼の性格なり、行逕上よりすれば、代議士が最も適してゐるものゝ、時の廻合せで醫者の世話も亦た一興でがなあらう。

◎彼産を治むるの拙なるに反して、詩文は旨い。試に其一二を摘録すれば

暑殘大火又西流、涼入郊墟萬象幽、海内虛名歸一夢、胸中眞諦足千秋、青天有月湧高興、金殿無人解隱憂、從是聖源堪可討、欲凝冥想上書樓。

函嶺を越ゆる時

函嶺山夕越え來れば、入日さす、

相摸の海は見ても飽かぬかも、

◎彼は此の如き風流才子で、加之にお殿様式の容貌だから、彼も惚れ易い方が女の方からも随分ヤイノノを極められたものだ。相だ夫には一二艷種もあるが、餘り藥にもならぬから、茲に擱筆する。

### 大學教授の末路 寺尾 亨

前中華民國顧問 法學博士

◎國際法學者としては随分古いものだが、昨年清國革命騒動が始ると、應て彼は副島博士と共に顧問として中華民國政府に招聘せられ、同時に久しく其頭に冠してゐた大學教授は擲つて了つた。

◎彼れ顧問として半歳ならざるに、亦た突如として之を辭して歸朝した。ソコ

デ彼と同郷の筑前人で在京せるもの數十名相謀つて彼及頭山満山座圓次郎の三名の新歸朝者に對して慰勞と歡迎の意を兼ねて一夕宴を上野公園常盤花壇に張つた席上彼は頭山及自家を併せて挨拶演説をやつた彼に次で山座が英國土産話をなし後は絃聲高談ワイ／＼ムニヤ／＼で解散となつたが當時彼はアルコー焼のした頬を撫で胡麻鹽髯を拈つて支那革命の成行を説き自家の進退を告白してゐたが彼は猶重ねて顧問として再任するやも知れぬ様であつた然るに此話中毫も快然たる意氣を認めず燦然たる靈彩に接せず什麼にも老耄衰殘の感を衆に抱かしめた様に思はるゝ彼の將來も最早知るべきのみだ後聞く所にては彼は大原武慶に欺かれて行たのだ相だ可哀相に

◎彼の兄弟は皆才人だ兄壽は東京天文臺長として長く學界に雄視し弟小野隆太郎は辯護士として令聞ありしが之は夭折した而して彼は極めて健康で淡泊で學者らしい男だが彼れの學問も既に午後三四時に傾けるやの評がある加之に篤學の方ぢやないから彼もズン／＼と葬られて了ふ譯さ。

◎酒は大の好物で又甚だ強いウント飲ましたら山座圓次郎に匹敵する位だ

らうで今度支那でも飲み續け歸朝後亦た之を缺がしたことなく時々其別墅の鶴沼に竹林七賢の活圖を観るは彼が其友と共に小宴を開くのである。

◎彼は其郷友たる頭山の膽氣なく金堅の俗才なく井の哲の迎合なきも淡々蕩々些の邪氣なく自づから鳶飛魚躍の態あるは彼が從來學究として一頭地を抜ける所以だらう。

鐵砲玉 支那浪人 中野二郎

(一)

◎鐵砲玉とは打放した儘で何も後に残らぬと云ふ意味である。天門道人の中野次郎は會津の男で容貌も壯快やる事も壯快だが何をやつても成功した事を聞かない恰も鐵砲玉の様である。

◎曾て北海道で露語學校を起し新聞をも發行したが忽ち煙の如くに消えて爾後朝鮮より露領浴海州方面に或は清國に就中滿洲には最も力を注いたが何時も音ばかりの空砲射撃に終つた。

◎日露戦争では、鳴鶴江軍の輸送に關し、幾萬金を攫み、續いて間島に入り、天寶銀山の採掘權を握り、三菱か何處かの巾着金を引出して、銀掘に着手し、今にも銀造りの家を建連ねん様に吹立てたものゝ、未だ其序の口にも至らずして、清國政府の故障出で、彼は奉天に北京に百度詣の空足を踏み、到頭何にも奈良坂盤若坂の逆落し、流石天狗の間島王も、又々靈砲の打損で、尾を付けた様だ。

◎由來彼は動的の男で、静臥とか閑居とか云ふことの出來ぬ質で、又失敗を失敗と思はぬ、失敗は成功の階段としてゐる、故に百歳迄戦つて百歳迄敗れ續ける、而して彼は猶之を以て成功の道行とするに至つては、恰も死は生の始りと云ふに同じである、彼に果して這般の覺悟あれば、大に語るに足るが、彼れ或は物の大小多寡の數を以て成と敗とを謂ふにあらざるなきか。

◎形勢を揣摩し、利害を説き、強弱を論せしむれば、彼は戰國策士の風がある、が畢竟するに根柢ある學問のあるでなく、又其に伴ふだけの手腕を見ざれば、彼の爛舌も遂に全く法螺に終ることが多い、此點は、杉山茂夫に酷似してゐる様だが、茂丸は辯舌手腕何れも彼に數等の上級である、未だく修業が足りないよ

(三)

◎聞く所に依れば、昨年は瓜哇亞刺比亞間に汽船の往來を企て、以て回教徒の亞刺比亞内地にある、教祖の靈墓禮拜に行く、數十萬の船客を一手に收めて、所謂南洋の遺利を拾はむとのことであつたが、其後寂として之が消息に接しない所を見れば、多分清國革命の騒に奇利を射んが爲に、忙殺されてたものらしい。

◎彼は能く飲む、一度に強烈なるウキスキの二三本に、ピールの一打位は平氣で倒して、了ふ、其れから盛に漁色もやる、以て其體力の強壯なるを知るべしである。

◎東洋的豪傑の餘弊として、彼には嚴に約を守るの風なし、即ち大行は細瑾を顧みずと云ふのであるから、二十世紀の此文明時代には、ちと不恰好千萬であるが、目下風雲蓬勃の對岸の大陸で活動するには、最も適材かも知れぬ。

◎彼は餘りに克く飲み、克く吹くが爲めか、満頭殆んど寸木を留めず、偶飛來れる蒼蠅も、滑り落ちん計りである、故に山高帽を冠するには、先づハンカチーフの

鉢巻をして、帽止めの必要がある。

### 山氣の多い男

東亞同文會幹事 步兵少佐 大原武慶

◎軍人の古手で、歩兵大尉で退いた男だ。多情多感の才子肌で、曾て第七師團(北海道)にあつた時何かに逆上して、割腹だつたか、短銃往生だか、演損つて、妙な浮名を流したものだ。之は、這樣な男には、能くある習で、今の博士秋山雅之の助も、布哇差遣の時に短銃の厄害になつたことがあると思ふ。

◎素直に勤上げれば、今頃は、將官閣下の位置に立つことが出来たらう。通じて、冷靜堅忍、蠻勇吞氣等の性格を有せずして、才に走るものは、軍人として、格別良い結果を奏せぬ様である。恐く彼も才人としての弊を受けたのだらう。

◎退官後、清國漢口の武備學堂に聘せられ、教鞭を執つてゐた。今回革命の一首領たる黎元洪の如きは、彼の薰陶を受けたものだ。相だ、後、日露砲火を交ゆるに及びて、從軍し、軍政官として、安東縣昌圖等に歴任し、官亦た少佐に陞任した。彼が軍政上の計劃は、何時も規模宏大に過ぎ、奇變之を行ふと云ふ風で、徒に上級

幹部の注意を大ならしめた。彼が安東縣在任の際に、施したる功績は、今猶賞讃に値するものありて、彼が他の小過を償ふて餘りありと云ふ可しだ。

◎彼は詩も作れば、歌も詠む。而も其が品格よく、節調も面白い。又酒を飲む。飲むと云ふよりも、寧ろ浴る方だ。而して、偶會心の友でも得やうものならば、三日三晩でも飲み續けると云ふ方だ。つたが、今も猶當年の勇ありや否や。

◎今回の革命戦争で、武漢の間に砲火頻りなりし頃、革命軍の砲列は、日本將校に由つて號令され、而して其號令官の面貌は、甚だ彼に肖てゐたとの風評がある。が、兎も角、彼は其頃、慥に日本には居なかつた様だ。

◎乾坤一擲の快擧を演せんとして、か否か、大養頭山以下幾十の大小豪傑は、長江一帶の地に集屯し、彼亦た其地にあつた。然るに其後、何れも煙の如くに消へて、忽復内地の人たるに見れば、中々註文通にはゆかなかつたものらしい。

◎東亞同文會幹事として、彼は、大概東京にあつて、事務を執つて居る様だが、這いふことには、彼も大に適役かも知れぬ。唯だ、彼に一の不可思議な様な工夫細思の頭腦がある。开は、彼の數學に長じ、發明の天才あることにて、曾て陸地測量

器の最も輕便なるものを案出し、日露戰役に或方面では之を用ゐて意外の功を奏したことがある。此他彼は人を欺き、耻を知らぬ様な事をもやりかねぬが、之も病的心狀の爲だらう。現に寺尾や飯田某等は欺かれた仲間だテ。

◎若し資本家あり、彼に衣食の患なく、其工夫に専らなることを得せしめば、或は彼の爲さんとする何物よりもより多くの効を奏するかも知れぬ。兎も角も、軍人たり、學校監督者たり、野心家たり、發明者たり、酒豪たり、小詩人たり、彼が頭腦の組織も、亦た甚だ多岐復雜なものだ大成の質ぢやない。

### 熱狂家 田中舍身

東亞女學校長 佛教宣傳者

◎徹頭徹尾活動的な男で、宗教問題に慈善事業に教育事業に其身を捧げてゐるが、何事でも國家に關する大きい問題の起る時は、黙視する能はず必ず熱狂呼號するのである。

◎岐阜縣大垣在より二十二歳の時に上京し、身を役して食を求めつゝ、大に苦學をやつたものだ。佛書が好きで遂に熱心なる佛教宣傳者となり、其爲めには

非常の奮闘もやつた。

◎彼が佛門に眞如の月を觀んが爲めには、坐禪もやれば、三ヶ年も托鉢をやつたと云ふから、相應の悟入もしてゐたらう。が彼は香を焚き經を讀む枯僧の爲は大嫌で、死に至る迄活潑々地の新天地を擴めんとしてゐる。

◎往年佛耶兩教徒の會合あり、其議題として如何なる宗教を日本に選擇せば可なるかの提出さるゝや、彼大に憤慨して曰く、基督も菩薩なり、左れど佛教は耶蘇の子分にあらず……比較するなら親分にするがよい、佛法の僧にして基督教に哀を乞ふとは何事ぞと絶叫し、大内青巒や村上專精等に眞額より喰つて掛り、且つ二十餘箇所に演說會を開き、又新聞雜誌にも意見を發表して、筆と舌との續かん限りの攻撃をやつた。其間彼は有ゆる妨害をも加へられたが、意氣益々激して遂に凡くら坊主等を庇込して了つた。

◎次で公認教問題では、惡命の反對をして例の如く熱辯を揮ひ、一週間錦輝館で獨演説をやり、偶家に歸りて卒倒し、人事不省に陥つた位だ而して忽ち又飛出しては演壇の人となると云ふ風で、全然死を決して其主張を一貫せんとし



たものだ。  
◎彼は酒精に點火せる如き性格を持つてただけに、其辯舌も特に悪罵攻撃に長じてゐるが由來恬淡寡慾な男だけに中々に人氣がある。  
◎彼は東亞女學校を起し、自から校長として理想的女子教育に任じ、又雜誌東亞の光を發刊し、宗教上の見地を發表してゐる。兎も角も彼は一種毛色の變つた快漢である。

### 蒙古王

六連報主幹  
前代議士

### 佐々木安五郎

(一)  
◎蒙古王又の名彌次り隊長としての人氣男を、前代議士佐々木安五郎とする。彼が議會に於ける彌次り工合は巧妙痛切で、何人も其巨砲を二三發喰ふと狼狽する。彼は國民黨に屬し、藏原惟廓と好一對の彌次り仲間であるが、藏原は到底この道にかけては彼に及ばない。  
◎昨年の議會には藏原對寺内のさう原問題で波瀾を捲き、佐々木も、政友會代

議士某に對して何か罵倒したので、其語の取消紙々で、議場に花を咲かしたことがある。這麼な光景で大に活氣があつたが、本春は彼れ清國に遊んで在らず。且つ總選舉前で、首領も陣笠も争鹿の準備に腐心し、議會は其處除けの態なれば、其寂寥さは一通でなかつた。斯ういふ時には、彌次り屋の彼の如きは、最も必要の道具である。

◎彼は山口縣の出で、才氣煥發し、膽氣又之に伴ひ、特に表面は粗放磊落な様で、細心の點あるは、儘に山口人の特質を有してゐるが、他の同縣人の先輩後輩の資縁攀引して地をなし、功を遂ぐるの擧に倣はず。飽くまで獨立孤往して、蒙古王一流の旗を翻さんとする所が取るべき處だ。

◎蒙古王とは、彼が日露戰役の終末頃、蒙古特爾巴士の王子を携へて、東都に留學せしめ、大に沙漠的氣焰を揚げたので、遂に世人は彼を目するに、蒙古王を以てする様になつたのである。

◎彼れ初め熊本に清語を學ぶ。日清戰爭に際して、年僅に二十の身を以て進んで、人夫の千人長となり、最も馭し難き浮浪の徒を、手足の如くに驅使して、他の

耳目を驚かしたのを見ると、彼は元來常倫の徒でないのみならず、早く既に清國に着眼し清語を學び、其地を實査して他年雄飛の階梯を作つて居た所は、大に先見の明ありと云つて宜しい。

(三)

◎大將乃木が臺灣總督たりし頃、彼は乃木の知遇を得て臺灣に暫時官遊したが、乃木の罷むると共に、彼亦た官を罷めて新高山てふ爆裂彈式の新聞紙を發行し、盛に兒玉總督の臺灣統治を攻撃し、今の彼が議院に於ける彌次り以上の喝采を受けたことがある。

◎大和の素封家土倉庄三郎が曾て清國事業に従事し、南清には石炭の採掘をなし、北清には熱河に金鑛經營を企てたことがあつた。當時彼は北方の探題として、金掘に浮身を窺し、熱河乘込の際の如きは身を鎧冑に固めて、三河萬歲をやりながら練行きて、其地方人に神異の感を起さしめたことである。この狂言じみた所が、亦た彼の一特色で、この特色は始終彼の行路を色彩つてゐる。◎彼は身長殆んど六尺もあらむ、直立すれば頭が鴨居に支ゆるといふ大男で

ある。而して鬚髯々々として黒く長く、隆準で眉目清秀であるから、恰も書中の關羽然たる所がある。支那人には最も詭向で、巨つ清語にも其事情にも精通してゐるから、鬼に金棒である。

◎彼は獨り支那人向のみでなく、日本婦人にも好かるゝ。現在の細君即ち北京警務學堂の總教習たる河島浪速の妹は、彼に惚れ彼の妻となつた人であるが、彼は細君思と見えて、此道には一向浮名を聞かない。

◎日露戰爭の際、彼は秘命を含んで戦地に到り、牛買となつた。其買方も賣方も實に底抜の奇抜なものであつた。こゝに天機は洩す譯には行かぬが、兎も角敵を苦しめ、味方を援くる巧妙な手段を取り、其間に立ちて金儲をやり、歸る時には數萬圓を齎らし、之で衆議院議員の月桂冠を買ひ、又現在の田端の邸宅を作り、剩す所は浪人仲間、大盤振舞をやつたとの噂。

◎這麼な風で奇抜てふことは、彼の生命だ。之が維新の際なれば、慥に高杉晋作の小型で奇兵隊の仲間である。故に彼は泰平の世よりも寧ろ亂世に適してゐる。今や日本よりも支那が最も彼の得意場である。彼亦た之を知り、酒より好き

な今期議會を留守にして、渡清したのは即ち其故ではないか。

(三)

◎酒といへば彼は頗る豪酒家で、昨年某友と新橋停車場樓上のピーヤホールで發車時間を待合せながら、且つ語り且つ飲んだが、中々談も盡きねば酒も休めない。ヤットの事で、醉顏朦朧となる頃には、西行汽車は既に二回も發車した後であつた。而して彼が呑干した大コップの數は、八十四杯と註された。

◎南極探検は彼が伯大隈を擔ぎ、大分苦心をした藝當であつたが、首尾能く一行の極地向つたのは、目出度い譯だ。彼は之が爲に九州の陸迄も、長廣舌を弄して狂奔し、其脛の毛も摺切らして了つた位である。お蔭で蒙古王の看板は、層一層賣出したものゝ、此探検一條に就いては、彼が肝膽も大に碎けたらうと思はるゝ。

◎彼が九州に往つて、先づ成金黨の親玉たる安川を説いたが、安川は學校經營に餘力を剩さぬからとの口實で、彼を刎ね付けた。彼は怒つて探検の擧の決して私利の名利の爲めならず、富豪の徒の進んで之を援くべきの理由を説いた。而

も安川は馬耳東風であつた。益々怒つて例の彌次的惡罵を浴せて、其場を去つたが、其衷心の苦も察せらるゝ。

◎彼が逐鹿場は、山口縣下でも最も難戰地で、敵は名たるゝ下院議長の大岡育造である。然るに前選舉の際の如き、彼は別段之と云ふ程の後援もなく、金力もなく、全く孤軍奮闘して、奇勝を博し得たのである。其奮闘振が面白い。彼は自家の選舉區内は、何時も鞋がけで驅廻り、或は學校に寺院に、有象無象の徒を集めて、快辯を揮ふ。彼の辯は、定評もあるが、田舎向には最も適してゐるので、彼等は不知不識の間に、彼に酔されて了ふ。其れから選舉區内の事に關しては、熱心に世話もし、特に在京青年の面倒をも見てやつてゐるから、中々評判が宜いだ。が本年の總選舉に敗を取つたのは、不思議な様だ。

◎西域探見記てふ一書を著はしたが、之が彼の處女作であらう。内容を見ると、全く彌次的に四角八面に書きなぐつて居る。一向に系統も秩序も捉へ難いが、其が即ち彼たる所以で、罪のない面白い點も、其處にある。彼を見るに、學究を以てするのは、大間違である。

◎ 總選舉には種々の事情で敗戦したが今や六連報を發行し舌を筆に代へて大矢尻に矢尻つてゐるだが之では例の二百三高地の武者振が惜しいネ。

### 鐵火迸出

東洋日の出新聞社長  
前代 議員 鈴木 力

◎ 天眼鈴木力は言論文章の雄で從來之を以て其志を行き將來亦た然らんとするものであるが固是れ感情強烈にして一たび其激するや疾風迅雷の襲來するが如き處がある是則天眼式の名を成す所以にして亦た能く敗るゝ所以であらう。

◎ 彼は會津男子だ中野次郎井深彦三郎等とは同郷で同じ様な浪的境遇を蹈んで來たものである彼の大學豫備門時代には亂暴黨の一人だつたが獨り文章には細心で又親切であつたで學業の方は中途で廢し其處女作として獨尊子を發表した小著ではあつたが一種奇警の文字を以て奇想を行つたのだから意外に學生間に歡迎された。

◎ 彼は獨尊子の小成の爲に遂に軌道を逸して學士號を得る迄の學究たる克

はず全く放浪生活の人となり駿河臺に蒼龍窟を設け其處より雜誌活世界を發行し盛に經國の怪焰を揚げた此雜誌は更に歩を進めて日刊經世新報となつたが其仲間には佃信夫北村紫山の徒があつて何れも鐵火熱烈の文字を列べたものだ然るに元來青年粗豪の集團だから新聞經濟の術に暗く久しからずして此新聞は倒れて了つた次で彼は秋山定輔と提携して二六新聞を起し其主筆となつたが是亦た痼疾の妨ぐる所となつて其繁務に堪へず遂に全く操觚界を脱したるものゝ彼が胸底の悶々は何れの處にか爆裂せすんば休まないのである。

◎ 恰も好し一葦帯水の韓國に東學黨の亂あり彼が刎頸の諸友は天祐俠を組織して將に大に飛躍せんとするの秋で彼れ亦た頻に其蹶起を懲懲さるゝので遂に決然之に投じて目凄しき活動をやつたものだ。

◎ 日清戦後彼は九州にあり頭山滿の主宰せる玄洋社を本據として暫く風雲の歸趣を見てゐたが遂に地を長崎に卜して此處に長崎日の出新聞を起したが社員は悉く浪人界の虎狼犀豹の徒で宛然たる小梁山泊であつた然るに幾

何もなく内部に波瀾を生じ彼は一旦之を退きて別に東洋日の出新聞を起した。これは彼が今猶嬰守して鎮西に雄視せる金城湯池である。

◎彼は今回の逐鹿戦には敗を取つたが其前には月桂冠を得て日比谷蛙の一に加はり大に奇鳴を以て其名を成したものである。想ふに彼れ猶春秋に富むことなれば今の時更に深く藏め精しく研いて機の熟するを待ち最後の飛鳴を試みたが宜い。

◎彼れ先年倫敦に到り何かの會場で婦人室に入らんとし大使加藤高明の遮れるを憤つて大に熱罵し且つ鐵拳を加へんとした話があるが彼の行動の一斑は凡べて此流儀であつて眼中唯己あるのみだから痛快此上もないか大人たるには未だく大分の工夫鍛錬が必要である。然はいへ面白い元氣一天張の男だ哩。

### 理想選舉の産物 伊東知也

日本及日本人記者 衆議院議員 伊東知也

◎維新の際、莊内は薩長軍と惡戦し、驍名を轟した地だが、郷人の意氣未だ衰へ

す正義人道の最も貴ぶべきを知る。即ち黄白の腐化を許さざるの處である。

◎伊東知也は此地の産で候補者として、縣下第一の赤貧でありながら、第一位を以て當選した男だ。彼の人格も古武士風の壯烈な處があり、且つ東京より黒岩三宅等諸先輩の援助ありしたため、頗る氣勢も揚つたに相違ないが。

◎主なる原因は選舉民の意志堅實で、彼が父翁の餘澤を遺れず、又克く彼の主張に聽いた爲である。

◎理想選舉を標榜し、貧乏看板の藏原古島の輩で、猶一萬内外を散じたのに、彼は眞に車代辨當代の若干金を要したのみで、懸下第一の月桂冠を上げたのは偉い。

◎然れども彼の檜舞臺に上るのは、今回を嚆矢とする。政界の駆引は机上の兵法では通らぬ。此後の奮闘が最も必要だ。

### 裸踊 中西正樹

(一)

支那派人の古物

◎支那浪人としての彼は實に古いもので何でも一今頃は五十の坂を六七は越して居やうが其始めて支那に飛出したのは十八歳だと謂ふから殆んど四十年の支那生活を續けたものだ。是では随分古い上に微が生えて、好い加減の骨董化して了つたと云つても宜い。

◎岐阜縣の産だが其人と爲りは濃尾人通有の伶俐輕薄な處を些も稟けてゐないで恰も青竹を割つた様な薩張した男だ。大慾も無慾も慾てふものは微塵もないと云つて宜い位なものだ。

◎一時藥屋の岸田吟香が上海に開店して藥も賣れば出版もやる支那内地の探究サテハ對清問題をも捏廻し謂ふ所の政商と學商を兼ね且つ梁山伯の頭梁を以て任じてゐた頃彼れ亦た往いて相投じ大に悲歌慷慨したものだ。而して今の古參支那通連を養成せる日清貿易研究所の親玉たる東方齋荒尾精とは最も深交あり荒尾の爲には彼も大に其力を盡くしたとのことである。

◎彼が壯時の功能書は是位に止めて先づ其裸踊の本能の發揮に移ることにしよう。某歳彼は某領事館の囑託を受けて某地の調査に出掛けたが約三四十

日内には歸る筈なのが其後半歳經つても一年過ぎて梨の礫の音沙汰がない。到頭其儘三年になつたが矢張踪跡が分らぬので多分何處かで屁太張つたのだらう。ヤレ／＼可愛相なことをしたと同人舉つて悼んでると。一日何處からともなく飄然として汚醜しき支那乞食が來て領事館を叩いた。

◎領事館の門衛も驚きながら仔細を聴いて見ると。日本語で卒然領事はるか中西が歸つたと謂つて呉れいといひながらズン／＼館内に這入つて行つたが恰も彼の噂をしてゐた時だつた者だから一同のものヤ／＼と計り彼を取圍んで驚喜した。彼の語る所を聴くに彼は當初目的地に向ふ途端に某處に暴動起りて大騒をやつてるとの報を聞き好奇心簇々と持上り忽ち其方向に電馳して行つたが驛路迢々數百里の僻地であつて彼がテク／＼歩行で到着した頃には既に後の祭となつて暴動は鎮定してゐたので其より彼は何か珍奇な發見もかなと彼處此處と雲水を追ふて廻つてゐる間に早くも二三年を潰し且つ路銀を使果し襤褸衣一枚に半風子の合宿といふ様な此體たらくだが存外丈夫で三年前よりも更に用ゆるに足る様になつたから此點は喜ん

で貰ひたいとの口上だ。

(二)

◎彼は久しく支那生活をなし、殊に思ふ儘に振舞ひ種々な事を營んで来た爲に支那語としては南北に通じ、且つ俗語なども巧ものだ。又之と共に支那各省の人情風俗にも精通してゐる。

◎彼は常に志士の群に投じ、又東方問題の得失を研究してゐる様だから、其が則ち彼の生命とする所ならむも、彼は柄にもない商賣上の野心を起し、幾度も幾度も之を始めたが、未だ一度も成功した例がない。而して其敗亡毎に友人知己を引倒す計であるから、凡そ儲からぬとを中西の商賣と云ふて、同人間の禁物とする所である。

◎故小村壽太郎は、彼が最も昵懇の間柄で、彼が内地にあつて窮乏せる時は、屹度往つて小村の懐を絞取つたものである。小村以外にも猶幾人の仁者もあつた様だが、其等も皆毎度の彼が強請に懲りて、遂に一致して彼を支那に永く封じ込んとした。彼亦た此意を了して、一大奉加帳を作り、幾多の餞別を掻集めて

満洲に乗込み、知友中島眞雄の經營せる盛京時報に投じて、其主筆と云ふ觸込で高等食客となつた。

◎昨秋の事だと思ふ彼は、視察のため露領チ、ハル方面に旅行し、豚尾公に襲撃せられて瘡痕を受け、久しく病床に呻吟し、ヤツト一命は取留めたものゝ、爾來頭腦舊の如くならず、嗜める酒も呑めぬ様になつた相だ。

◎彼の酒と來たら有名なもので、飲むよりは寧ろ浴ると云ひたい位であつた。で飲めば必ず酔ふ、酔へば必ず素つ裸となつて角力甚句を踊る。其踊工合が亦振つたもので、人をして抱腹絶倒せしめたものだ。が彼も酒が飲めぬ様では此藝當も見られぬだらう。

◎今春來歸京して、牛込清風亭を宿坊としてゐる。本年の衆議院議員の選舉には、鹿を争ふとの評判であつたが、彈藥缺乏の爲めか、將た老來意氣振はざる爲めか、遂に沙汰止みとなつた。

◎彼の爲す事は、何時も着眼は悪くないが、什麼も結末が付かぬ。其ために失敗をする。失敗すれば、友人の厄害となる處が、友人でも、彼に厄害掛けらるゝを別

に厄害とも思はず、往々先々に依頼状を付けてやるのだから、別段非常な困難もせず、思ふ存分四百州を踏破し、来り、兎も角も老支那通として、生命を支へて来たものだ。

◎彼に一子あり、何でも陸軍少佐位だらうが、彼が何年経つても舊態依然たるので、時々苦言を喰はせらるゝとのことだ。彼は別段改め様ともせず、白髪童顔相變らず、無邪氣な笑を堪へて、天下國家を説いてゐる。彼の經歷を彩筆もて綴らば、面白き活小説が出来様が、此處には僅に其一端を洩すに過ぎない。

鐵腕石腸 黒龍會主 内田良平

◎故平岡浩太郎の甥で、福岡生の男である。少時より角力を好み、後上京して講道館に入り、柔道を學んだが、ズン／＼上達し、今では五段位だと思ふ。其れから傍ら書史を讀み、露語及び六韜三略などを研究したものだ。單に之だけ見ても、彼が什麼な方面に活動すべき人物かを推知さるゝだらう。

◎先づ東方問題に着眼し、去る二十七年の朝鮮東學黨事件には、鈴木天眼田中

次郎、大原義剛、大崎正吉等と、天佑俠を起して、朝鮮乗取策を講じた。彼れ血氣正に旺盛で、腕には嘉納流の秘術を鍛え、膽は麤よりも大なりと云ふのだから、堪つたものでない。先づ昌原金山の爆發物掠奪係となり、片端からヨポーを抛出し、大に猛威を振つたが、其れから同志の面々と、鷄籠山の新元寺に據れる際、彼は危険を冒して、敬天まで兵糧の買入に出掛けた。處が途中多數の韓人に圍まれ、什麼することも出来ない。卒然一韓人の襟首を掴んで、手許に引寄せると、脆くも其韓人は絶命して了つたので、サー群れる彼等は、ワイ／＼騒ぎ出して、一度に堂々と打つて掛つて来た。彼は此處ぞと計、秘術を盡して闘つたものゝ多勢に無勢だ、到頭高手小手に縛られて、今や其町外に引出されて、將に素ツ首を刎ねられんとする一刹那、天未だ彼を亡さざるものと見え、彼の籠城せる隣の寺の坊主が偶然通り掛つて、這は大變だと、群集の中に飛込み、種々賺し慰めて、ヤット其縛を解いて呉れた。這々の體で遁返る途上に、同志の面々は彼の歸山の遅きは、必定ヨポーに殺れたのだらうと、各爆彈を携へ、武装甲斐甲斐しく、弔合戦に出掛けた。處だつたから、彼の無事なるを見て、一同萬歳を稱



へて引上げた。當時彼を救つた坊主は彼の命を群衆より三十貫文で買取つて、彼はヤット助つたのだ相だから、一時三十貫文の内田の生命として評判されたものだ。

◎日清戦後彼は長崎より浦鹽へ渡航したが、偶、檢疫のために浦港へ一週間上陸禁止を命ぜられた船中徒然の餘日露人の強弱問題が闘はされ終に論より證據兩方より各一人を出して問題を解決することとなり我方よりは彼が飛出し、露人の方よりは雲つく計りの巨漢が現はれたが一二合する間に彼は巨漢を手玉に取り、甲板上にエイヤツと見事に投付けたので、喝采の聲は遽に海波を湧した程であつた。

◎彼れ浦鹽にあること兩三月在留同胞の求に應じて道場を開き、柔道教授を始めた之を聞いて己れ一番取控いで呉れんとす、或は馬賊の強のもの、或は力自慢の露人等續々來つて勝負を挑む、彼は待つて居ましたと云はん計り、來る奴も／＼も、目にも止まらぬ早業で、投飛ばして了ふので、一時は非常な評判であつた。

◎浦鹽を切上げて、露國內地に旅行を企て、竊に露人經營の秘を探つたが、其間行路上の辛酸は言はずもかなだ、幾たびか亂暴露人を取控きて、日本男子の勇武を示したものだ。

◎露國旅行より歸來彼は露西亞亡國論を著はし、先づ世耳を聳て、次で黑龍會を起し、雜誌黑龍を發行して露國の極東經營に對する邦人の覺悟を絶叫した其頃同會より發行せる最も有力なるものは、極東(西伯利亞及滿蒙)一帯地圖で之は從來絶無の精細確實のものであつた、爲に後日露戰爭に於ける準備として、邦人に貢獻したる功果は決して尠少でなかつたらう。

◎日露戦後彼は公伊藤の知遇を得て、統監府の一員となり、大に朝鮮通としての彼の知識を發揮した、而して其産物の見るべきものは、一進會である、一進會が合邦の機を促したのは、天下の齋しく認むる處である、即ち彼の邦家に酬ゆるもの亦至れりと云ふべした、彼が他の泛々たる浪人と、科を異にせるは此點だ。

◎彼れ曾て孫逸仙等と、南清に旗を擧げんとしたが、之は時機未だ到らずして

敗れしも當年の志は今や孫等の手に由つて一貫せられんとし彼れ亦た將に此方面に雄飛を試みつゝあることと思はるゝ。

◎此他猶一事の傳ふべきものがある、開は全部六冊、數千頁に亙る西南紀傳の述作だ、之には幾年かの星霜を抛つて材料の精選に力め、且つ前後五萬圓を費消したと云ふから、其苦辛の程も察せらるゝ、爲に賊軍方の真相は充分に發揚せられ、後世の一大史料を遺したものである、曩の極東地圖といひ、此の紀傳と云ひ、個人的事業としては眞に天下に誇るに足るものである、彼が從來頻に蠻骨を振廻すを見て、この細心の努力あり、不朽の大作あるを等閑視するは、未だ彼を知らないものである。

馬賊の親分 江浦波と號す 邊見勇彦

(一)

◎西南の役に邊見十郎太と云へば、勇悍無双を以て官賊兩軍の間に聞えたものであつた、彼れ某地の要害に嬰守大に力めたが、敵鋒鋭くして部下の意氣沮

喪せんとするを見るや、忽ち砲壘に上り、臂を叩いて曰く、汝等の彈丸は屁の如きものだ、之でも喰へと飽くまで敵を罵つたので、敵兵大に怒つたが、我が部下は頓に勇氣百倍した、彼は雷に勇猛なるのみならず、頓智即妙の點があつた。

◎十郎太の遺子に勇彦あり、頼少き母の手で育てられ、學業も意に任せず、幼より世味の辛酸を嘗めさせられたが、亡父の面貌氣象、其儘に稟け得て、豪宕瀟達の裡に、穎脱の才を包んでゐる。

◎内地で齷齪した處で、別段金の蔓があるでもなく、學士博士の肩書があるでもないのだから、到底快心の事は出来ない、任意に對岸の大陸に押渡り、成敗を一舉に決して呉れんとす、十數年前に脊骨兩個のご持參で、彼地に乘込んだ。

◎支那は流石に大陸だけあつて、這麼な豪傑が随分混入して、るだらうが、餘程奇抜でなければ、何處にゐるか譯らない、彼も先づ數年間を食の群に入つて、四百餘州を踏破した内地視察と云へば、素直に聞えるが、實は何か事あれかしと、謀叛の種搜しの巡禮だから、物騒千萬なものである。

◎こんな境遇のために、彼の利したるものは、俗語の熟達と、風俗人情に精通せ

ることである。且つ彼は六尺に垂々とする大男で、骨格殊に逞しく、巨眠巨口で、辯説は流水の如く、機才頓生といふのだから、度し難い支那人を能く度するの呼吸をも會得した。

(三)

◎日露戦役には薩摩出身の軍人で、特別任務に服してゐたものが多かつた。中にも花田橋口の兩者は彼が如き幾多の支那浪人を糾合して巧に之を指揮し、戦闘線以外に奏功した。而して彼は始終橋口と脈絡を通じ、彼の橋口に於けるは、猶亡父十郎太が南洲翁に於ける様であつた。

◎橋口は今の重箱式の虚名に拘々たる軍人仲間には得難い快男子で、維新の際寺田屋騒動に横死したる橋口某の甥で、又大將樺山資紀の甥に當る。薩摩生粹の武士の種だ。士官學校を出で、久しく鎌倉の禪窟に丹田を養ひ、後大佐守田利遠等と相前後して、清國に駐劄し、支那通としては錚々たるものゝ一人である。

◎邊見は當時三十の坂を少しく上つた位な、血氣眞ッ盛りであつた。其頃東三

省で馬賊の大親分て、杜立山憑隣閣の徒が最も跋扈してゐた。憑は後歸順して我が陸軍少將位な位置に据ゑられた程の豪のものである。而して彼れ邊見は自から江崙波と稱し、憑の帷幕に參して、隱然參謀長を以て許されてゐた。彼が支那内地に十年間練磨の術策は、此時十二分に發揮されたらうと思はるゝ、其得意や知るべしである。

◎彼は能く喋べり能く飲む。快心の友と意中の佳人だにあれば、七日七夜でも飲み續ける。酒量は日本酒なれば一夜に五六升、ビールなれば三四十本は平氣で倒して了ふ。之には日清人共に、其前に抗するものなく、義軍以上の勇名を轟かしたものだ。

◎戦役後、奉天將軍の軍事顧問として、暫時面白き役割でゐた。浪人本位で歩兵操典一つ見たことのない男が、此の役廻だ。其内容の如何は云ふ迄もなく、馬印の操縦にあつたものと思はるゝ。

◎吞氣至極なお役目であつたから、彼は常に二三の獵犬を伴れ銃を肩にして、鳥獸征伐のために、摩天嶺、本溪湖方面の深山を漁り歩行いた。就中壯快であつ

たのは一冬營口の外人ブツシユ、サミユール兩商會主人其他彼と同じき將軍府顧問の井深彦三郎等と、長白山に一大狩獵を試みたのであつた。

◎名にし負ふ滿洲第一の名山にて清朝發祥の靈跡に狩獵をやるといふので、當時は大評判であつたが、何れ劣らぬ冒險好奇の連中のことゝて、積雪を踏み氷點下四十度の烈寒と戦ひ見上ぐる計りの峻嶺を攀ちつゝ陣列を布きて、無暗矢鱈に打放したので、隨分獲ものもあつたが、彼等が豫期せる様な珍妙の鳥獸もゐなかつた。蓋し山神の告に由つて、其等のものは既に何處かに身を匿したもののちらうが銃獵としての壯舉は、之が彼地での破天荒である。

(三)

◎十年踪跡を晦して四百州を放浪し、偶頭を突ン出せば馬印の參謀將軍の相談役、山狩の隊長とは實に最も能く彼の性行に適したものであつたが、次に來る藝當は、又其以上に振つてる。

◎明治四十二年より前後三ケ年に互り、安東縣大連長春に華日公同と云ふ看板をブラ下げて大々的賭博場を開始し、其テラ錢即ち賭博税を徵取すること

にした、勿論世間を誤魔化す看板には、曰く文廻曰く吹矢曰く何く品こそ變れ皆な一種の賭博だ。

◎賭博本位の支那人間而も萬人熱鬧の巷に之を公開したものであるから、來るは其第一箇所の賭場で儲かる所の金額は、日々數千圓に上つた。滿韓廣しと雖も、當時這麼な旨い儲かる仕事は外に無かつた。

◎之が表面の名義人が王某で、總後見役なり支配人が江崙波の彼れ邊見であつた。彼等が之を開始するに付ては、日清官憲間にも、特許せねばならぬ事情もあつたらしい。だが平和の滿洲で那麼な旨いことはいないので、他の破落漢等も幾度か之が破壊にかゝつたものゝ對手が馬印の旗頭で、之に付隨せる命知らずの連中が雲の如しと云ふのだから、到底三文ゴロには齒が立たなかつた。

◎華日公同は、この獨占の商法で、巨額の資力を作つたが、久しからずして、内部の紛擾外國新聞の素ッ破抜が始まり、又本國の物議をも引起さんとする形勢になつたので、彼地官憲は直に之を差留めた。

◎滿粟の儲とは這麼なとを云ふのだから、彼等一團は、由來水滸式の寄合だ。

から集るに随つて之を散すること亦た煙の如しだ即ち一夕の豪快を得れば、百年の命を擲つこと敵履を捨つるに異ならざる徒なれば、公司解體の時は彼等も復た元の木阿彌に返るの時である而して昨冬來革命騒動勃發して忽ち亦た彼及彼等を要することとなつた近況は審にせぬが大々的活躍をやつてることだらう。

### 熱狂火の如し 支那浪人 本庄安太郎

◎本庄安太郎は玄洋社派の一人で支那通である春の高い瘦形の目のギョロリとした痲癖の強い男だが其心の素直な飾氣のない虚言の吐き切れぬ程の美點もある様だ。  
◎宴會などで他の卓上演説が若しも我が宿論に異なれる時の如きは、何の會釋もなく、口角泡を飛ばして激論を始め遂に鐵拳を振舞ふ様になり折角の歡樂場をも臺なしにして丁ふの憂があるので、近時は皆彼を敬遠して案内を控ゆる様になつた相だ。

◎東亞大局の成行には常に眼を放たず之が爲に前後幾たび支那行をやつたか譯らぬ位だが畢竟頭腦粗大にして且つ感情に逸り過ぎる方だから、偶好機を捉ふるも忽ち之を取通して了ふのである。  
◎子爵青木周藏には什麼いふ譯か大に愛せられ其縁故とかを以て、東北地方に數百町歩の山林を獲取したが之も何かの下落で訴訟沙汰となり數年間繫争してゐたが遂に彼の敗訴に歸したとのことだ。  
◎彼は對清策を振廻すかと思へば内政論もやる又さうかと思れば米屋を始めめる炭屋を開くと云ふ様に轉々定まる所を知らぬが何をやつても一向に成功したことを聞かない。  
◎頃者亦た支那行を企て此後の風雲を捉へて大に爲さんとしてゐる蓋し彼の如き人物は却て支那には適するだらう支那人には一種の迷信が強いから彼等と同型の唯射利的人よりも寧ろ彼等と正反對の突飛なものを受けられるかも知れぬ。  
◎由來彼が郷里の筑前には頭山式と金堅式と兩様の模型がある而して彼は

前者に屬し、猶十分の鍛鍊琢磨を経ざるものである。故に其工夫を新にし、大に鍛鍊せば、或は晩成するかも知れぬテ。

### 又の名牛右衛門 支那浪人 宮崎滔天

◎宮崎八郎と云へば熊本民権派の開山として、誰知らぬものなき迄に賣出した男だ。而して其同胞は十一人あると聞くが、牛右衛門の宮崎滔天は最も末の弟である。六尺近くの巨漢で、總髪を束ね、茫乎として夏山の雲を望むが如く、チヨット得體の知れぬ男である。

◎生來刼廻ることが好きで、風變りのことが又大好きと來てゐるから、彼が四十幾年の徑路には随分變化が多い。初は徳富猪一郎、ワシヤ、小崎弘道、海老名、正等につき、基督の説法を聽きて、其信者となつたが、這様な眞面目なことの到底永續する譯がない。

◎先づ縁故を求めて、韓國亡命客の故金玉均を知り、竊に支那に於て爲すあらんとしたが、金の刺客の手に斃るゝと共に、彼は又清國革命黨の首領孫逸仙

の知を得た。其より彼は、大に革命運動に興味を加へ、幾たびか南清に往復し、之が實行を企てたが、腦味噌の粗なる彼の手には、未だ一度も成功の緒だに捉へ得なかつた。蓋し彼の如きは、事の成と不成とを問はず、我行かんと欲する所に、行けば即ち足るので、之が恐らくは彼の本領だらう。

◎中村背水等の醜聲を洩した非立憲事件にも、其他新嘉坡での入獄等、彼は皆干與してゐたが、今回の清國大革命に、彼は孫逸仙の幕賓として、最も得意の境にある様だつた。

◎先年彼れ、桃中軒雲右衛門の門に浪花節を學び、牛右衛門と稱して各地を興行して廻つたが、藝未だ堂に上らず、唯其巨大にして、風變りの相貌が、聊か客を呼ぶの具たるに過ぎなかつた。

◎彼の如きは、支那浪客として、時代後れの大言壯語をなし、斗酒以て怪焰を吐くのが、最も適當だらう。彼に取る可き點は、其無邪氣なるにあり、彼が孫に愛せらるゝも、人に惡まれぬのも、之が爲めである。併し一生浪々の境遇は、遂に免れまいよ。

### 狼嘯月

支那浪人

### 末永節

○瘦せたる狼の月に嘯いてるのは凄いものだが彼れ末永節が四十未だ志を得ず東西萬里常に何物かを覘つて怒號してゐる所は宛然たる狼嘯月の活畫幅である(狼嘯月は其雅號だ)

○彼の父は末永茂世といひ福岡市畔の住吉に隠棲し其地の國歌の宗匠である兄鐵巖は滿洲にあつて遼東新報を経営し弟感來は青年畫家として地方に賣出してゐる此間に稟けたる彼の心靈には多量の文學素を有するは疑もなきことである。

○彼の兄弟は皆な天授の文才を有し殊に彼の漢詩を作るの神速にして而も飄逸跌宕なることは尋常詩人の企及する所でない元來彼の言議行動は悉く詩的である故に詩に於て今少し造詣する所あらば優に當世に雄視するに足るのだが彼の志はそこにあらずして常に風雲を叱咤せんとして常に窮する所が亦た自から活詩人の面影を寫してゐる。

○第何回目の衆議院議員選舉だか忘れたが彼は自稱候補者として福岡より打て出たものゝ同縣は全然政友國民兩黨の勢力範圍で兩黨以外の飛入は如何に運動するも成功の見込はない其にも拘はらず彼は堂々と自家の主義政見を發表して舌の續く限り饒舌りつけ足の動く限り走り通し彌々選舉當日となりて開票の結果は驚くなかれ唯の三票であつた之には自稱候補の狼嘯月も浦島太郎以上の夢を見たのだがこゝらは詩人としての本色を十二分に發揮してゐるではないか。

○彼は詩を作ることも速くて達者だが其饒舌の力は更に驚くべく一旦喋り出したら、のべつ幕なしで何人をも閉口させねば休まぬ而して唯喋べる計りでない其間に吟詩もやれば鼻琵琶もやる劍舞もやると云ふので大抵のものは吃驚仰天する。

○東京に居ると思へば九州に九州と思へば朝鮮に清國に殆んど定所なく刻ね廻つてゐるが支那問題には頗る趣味を有して二十年來之を研究もし又實行をも企てゝゐた様だが今回の革命騒動では真先に驅出し盛に例の舌と足

とに鞭つて戦ひ、藍天蔚の参謀などになり大得意だ。  
◎彼の如きは徹頭徹尾静なる能はず、一日黙居すれば癪が起ると云ふ質だから、何でも角でも四角八面に飛廻はりある丈の氣焰を吐けば其で宜いので、誠に罪のない多感多情の詩人ぢやないか。

◎這麼な男の細君となつたら百年目、とても三日と一所に居ることは出来な  
いで、始終空間を守つてゐなければならぬ彼も男だ、殊に多感多情と來てゐる  
から、浮氣の種の蒔き續けた聞く其細君は兩親の家にあるとのことだが、何ば  
う辛氣臭いことだらうだが、詩人の妻たるもの古來大抵この筆法だから唯出  
雲の神を怨むの外はあるまい。

辮髮を斬る 支那浪人 萱野長知

◎萱野長知は土佐の男で可なり文學の素養もあり快濶な質だが本來土佐系  
統を帯びて山氣と謀叛氣澤山な處がある。

◎支那問題には夙に力瘤を入れ支那語も操れば辮髮も垂れると云ふ凝方で、

又幾回渡清したか知れぬ程である而して革命軍の首領株たる黃興などには、  
久しき前より餘程昵近にしてゐたと見え、昨冬革命戦の爆發するや、蒼皇彼地  
に到り、竊に革軍の帷幄に參して、知己の情に酬ひたとの事である。

◎日露戦役には、彼は花田中佐に屬し、特別任務に服して、勳功を立てた様に思  
ふ、戦後も遠く湖北の野を横行して、對大陸的研究を持續してゐた。

◎彼れ緒顔にし痘瘡あるが故に、自から鳳梨と號してゐる、鳳梨とはバインナ  
ツブルの支那稱呼である、身體頗る強健で能く飲み能く遊ぶ、一たび會心の妓  
を得れば、之を擁して旬日歸らずと云ふ方である、而して千金萬金有るに任し  
て、之を蕩盡すること猶土塊を擲つに異ならぬ。

◎福岡浪人の御定宿と云へば、三十年來、佐久間町の信濃屋と極つてゐる、浪人  
は固より不規律なものだ、懷暖なれば請求額よりも多分に拂ふが、懷寂しけれ  
ば一錢の支拂も六かしい、此呼吸に通せざれば、浪人宿は營む能はずだ、然るに  
信濃屋の主人は、永年の營業柄とて能く之を心得、例之無一物の客と知るも、平  
氣で之を待遇し、甚だしきに至つては半歳乃至一ヶ年の宿料停滯の連中があ



る往年頭山満の如きは、一時宿屋の世帯骨もヒン曲る程の停滞をやつたことがある。而も主人は決して之を責める様なことはしない宿る客も客だが、主人とても並の宿屋の奴等よりは、水際立つて垢抜のしてる處があるぢやないか。彼れ鳳梨居士も此例に洩れず、昨年は此宿に籠城して、大分宿の米櫃をガタ付かしてゐた様だつたが、相變らず宿六先生は、平氣の平左だつた。

◎革命戦では、彼も廢銃賣込のため、四五萬圓の儲をしたとのことだが、之れは浪人にとつては、十年に一度の豐作とも云ふべきもので、之なくては、浪人とも食はずに居れないから、天偶彼等に向つて、黄金の雨を降らす様なものだ。先年頭山なども、随分窮乏して居たことがある。其時夕張炭山を、百萬圓前後で賣放ち、彼自身は云ふ迄もなく、一家九族よりして、鶏鳴狗盜の雄に至るまで、均しく其恩恵にて浮上つたことがある様に、其人の大小高下に準じて、雨の降り正合にも差等がある。

◎彼れ信濃屋籠城中は、京都市より叡山に登る遊覽電鐵の布設計劃に奔走してゐたが、之は其後話を聞かぬから、多分立消となつたものだらうが、這麼なと

は豪傑運の肌には合はないものだ。

◎武田範之は近頃傑出の僧で、朝鮮併合には、餘程功勞があつたものだ。相だ夫の頑迷不靈の評ある寺内總督も、彼には大に許してゐたとのことだ。然るに彼鳳梨は従來頗る昵近の間柄なので、一日宮崎滔天と共に例の豚尾を垂れて、彼を某山に訪れた、欺語數遍の後、彼は諄々として極東の大勢を説き、且つ兩者の辨髪の無意義なるを諷し、遂に數行の弔文を草し、聽て鉄を持來つて、彼等兩者が十幾年の風霜を閱して、貯へ來れる辨髪を、根元よりブツリ断切つて了つた。其弔文と云ふのが頗る飄逸迭宕で、三者の心事歴々として觀るべきものがある。之を聞くもの皆其奇に驚いたものだ。

◎彼は文筆に巧で、曾て東京日々特派員として滿洲に在つたこともある。而して其頃同紙の大町桂月とは、郷友且つ詞友といふので、時々詩酒追隨したものだ。だが、遊ぶ方には何れ劣らぬ豪なものだから、日夜流連荒亡して、其踪跡だも譯らなかつたことが多い。

◎彼は豚の如くに肥り、何時もニコ／＼してゐるが、一雙の曙光自から人の肺腑

を射るものあり機來れば蹶然起つて之を捉ふるの手腕をも具してゐる彼の將來はマダ中々に多望だが末派に不平連が多い少々氣を注たが宜いせ。

### 一 寒洗ふが如し 國民黨志士 高橋秀臣

◎高橋秀臣は演説遣として優に一方の雄たることが出来る。本年の總選舉には郷里の伊豫で大に彼を擔ぐものがあつたので懸命の舌戰をやつたが何分にも兵糧彈藥相續かすして遂に敗戦をした。

◎彼は曾て二松學舎にあり法學院を卒業したものだ。其頃より非常の苦學生で何時も筆耕をして學資を獲た位だ。其れより政黨屋となり鈴木重遠だの工藤行幹阿陪井盤根だのを大に崇拜してゐたが今では小型ながら前三者に彷彿たる人物となつた。三者が何時も富裕ならざりしが如く彼亦た常に一寒洗ふが如しである。

◎彼は舌も達者だが筆も可なりに利く方だ。嘗て青年興奮的一小冊子を著し、次で日本の富力てふ統計書を出したことがある。又京都日の出新聞にあり

大に氣焰を揚げたこともある。

◎拜金熱の熾なる伊豫邊の産物としては彼は誠に異彩ある男と稱して宜しからう。但一度なりとも日比谷蛙の仲間入をさして遣りたいものだ。

### 大謀叛人 活版屋の監督 岡崎恭助

(一)

◎神田の明神下に、葆光社と云ふ活版工場がある。其處の金庫番に六七十歳位な爺々がある。金庫の出納の外時々書類の檢閲などをして、暇さへあれば柱に凭れてコクリ／＼睡つてゐる模様を見ると誠に娑婆つ氣離れた隠居に見ゆるが、彼が纏へる緋色の羽織乃至赤地の下着、其他身邊にありと有ゆるものが皆燃え立つ計りの山躑躅の眩ゆき迄に裝はるゝには、何か謂れ因縁のなくて叶はぬことである。

◎彼も今こそ寄る年浪には敵しかねて活版屋の金庫番迄落込めるも、四十年前の其昔に立返れば、彼は實に潑刺たる壯妓で有名なる大村益次郎の襲撃に

も長州奇兵隊の暴動にも加担人として謳はれたが彼が謀叛人として最も振へるのは丸山作樂等の朝鮮事件に連坐して入獄し前後數十回の拷問に接した時である。

◎當時の幹部連たる川上玄齋初岡敬治古賀十郎等は速に状を陳して斬に處せられたが獨り彼は八年の長日月に互り凡ゆる獄中の苦楚を嘗めたが到頭緘黙で押通し未決の儘で免されて再び活社會に飛出した。

◎此度は豹變して丸山福地等と提携し曩に轉覆せんとした政府のお味方黨となり大阪に大東日報を起して反對派の古澤滋等(民權派)と戦つた。

◎今の政友會首領株として又西園寺内閣の内相として幅を利せてゐる原敬は實に當時の大東日報社長岡崎恭助の幕下として専ら筆陣を張つたものであるが變れば變るもので兩者窮達の差は雷に天地雲泥のみでない。

(三)

◎帝政黨の組織成るや彼は山田顯義井上馨等の内意を受けて隨分努力したが其努力の効は水泡に歸し彼は轉じて實業界に入り藤田傳三郎等と提携の

秋もあつたが是亦た志を得なかつた。

◎彼が六十の今に至る迄赤裝束の派手姿に浮身を窶すに就いては頗る奇抜な歴史がある并は彼が國事犯として吉原の金瓶大黒から傳馬町の牢獄に引かれた時で彼は花魁の襦袢を着たまゝ八年の獄舎生活を續けて同囚の兇漢等にアツト驚嘆せしめたことである。

◎係りの判官は名垂るゝ玉乃世履で其押收されし書類の中に這麼なのがあらる其は秋田の初岡敬治より受取つた五百圓の受取書に今村佐吉と云ふ彼の假名の用ゐてあることである當時三條公は竊に奥にあつて裁判の模様を伺はれてゐた今村佐吉の恭助は玉乃判官の詰問に隨つて答へて曰ふやう

◎今紫と云へば當時に鳴響きし美人である這は判官閣下にも御承知のことならむか現に顯官にあらせらるゝ某公も此美人の許には時々駕を枉げさせられたと聞いてゐる某も折角男子と生れしからには一番某公の艶福にあやからんと思ひ戯に今紫の名に因みて今村佐吉と稱したのであると大口開いて惚け散らしたので謹嚴なる判官は赫と怒りて其慢言を咎めたが彼は平然

として之が、柳某が今村佐吉の名を用いた理由で唯お尋に答へた迄である。

### 西郷南洲の片腕

公園の番人

### 有馬純雄

(一)

◎今の老人達にも有馬純雄では譯るまいが有馬藤太といへば、彼か、アノ  
戊辰東征の時に西郷隆盛の幕下で、其副参謀として勇名赫々たる男のことだ  
らうと、猶其記憶に留めてる人もあらう。當時有馬藤太の名は、桐野半助と並び  
稱せられ、西郷の左右の腕と頼まれたものだ。當時彼は今の大将、大山野津等の  
上位であつた。戦後擢んでられて、彈正臺の長となり、一時は随分威張つたもの  
であつた。

◎西南の役に彼は大阪にあつて、賊軍に策應したので、永く獄裡の人となつた。  
次で再び彼が世に出づる時には時勢は既に彼を葬り去つて、彼の智勇は用ゆ  
るの場所もなくなつた。なれども傲岸不屈の彼のことゝ、種々劃策もし、藝當  
も行つて見たが悉く挫敗し、遂に彼は世を捨て、大和の國某寺の株を買受け

て身を墨染の大和尚となり、澄し傍ら子女を聚めて古流生花の教授をなしつ  
つ、浮世の月を他處に見てゐたのである。

◎日露開戦と共に彼は忽ち蹶起して曰く、故南洲翁以下、久しく九泉の底に眠  
する能はざりし、同志の宿望初めて晴るゝ様になつた。我れ老たりと雖も、往い  
て虎伏す唐土の野邊に屍を曝し、聊か同人に酬ひねばならぬ。と、飄然寺を出で  
て上京し、明治卅八年二月、いの一、番に陸軍省より大連渡航の許可を得て、彼地  
に渡つた。

◎サテ渡滿はしたものの、當時七十六歳の老骨には之とて適當の事もない。且  
つ猶奉天戦前後であるから、軍隊の出入で、大連の雜闘は非常なものであつた。  
が彼は唯其中で昔馴染の老將軍等を訪ね、戦況を聞き且つ其勞苦を謝し、戦功  
を激賞するのが日課の様であつた。

◎彼の郷人で昔馴染の軍人は、大山黒木野津西等で、何れも大將株であつた。是  
等の將軍に彼は時々祕書を贈り、好笑の種を蒔き、陣中の孤寂を慰めた奇談も  
ある。

◎戦は終つたが彼は歸らない固より屍を埋むる積りで來たのである。だが從來寒寺の一和尚のことゝて、別段糊口の貯蓄もない、ソコデ某々等の斡旋で、大連公園の監督となつた彼の財産としては唯彼が出發の際友人徳久恒絶が、別に呉れた金時計位なものであつた。

◎齡は取つても昔把つた杵柄とやらで、中々達者なものだ。毎日鹿爪らしく、番人の服装をして、棒を小脇に掻い込み園内を巡視した。斯く彼は壯者を凌ぐの元氣あるだけに、其陽徳の盛なることは、又古今無類だ。たとへ一夜たりとも女なくては夜が明かされぬ。だが顔の好醜はお構なしで、肉付の豊で美なるのが、何よりの好物である。

◎妻としても妾としても随分引張込んだが皆永持ちしない。で大連では僅計りの小使錢の中から、毎夜三平二滿の大道白を償ひ來つて、お伽としたが、流石の彼等にも、三晩と續く勇者はなかつたと云ふに至つては實に驚くの外はない。

(三)

◎彼が六十何歳かの時に、生れた男の兒がある。最早尋常小學に登校してゐるので、彼は毎朝曾孫の如き我兒と共に門を出で、勤務の途に上るのである。が時々兒の頭を撫で、お前が二十五歳になれば、乃爺は百歳になる。其迄は是非生延びねばならぬ。

◎彼れ今や旅順にあり、何か官衙の隠居仕事に餘命を送つてると云ふことだが、昭代には亦た珍奇い老翁である。たゞ其昔を偲べば、豪傑の末路も、憐れ果敢なきものぢやないか。

◎本稿を了りし後、たま／＼旅順の一友來り、彼の既に二年前に物故りしを告ぐ。嗚呼、彼は終に唐土原の土となり、東都出發の際の志に酬ひたるか、白髮慷慨の俛今猶昭々として眼にあり、筆者は切に彼が伏櫪の晩年を、悲み竊に其冥福を祈るものである。

### 怒鳴組の亡者 辯護士 立川雲平

◎彼の郷貫は淡路島で、通ふ千鳥の聲に狎らされて、飛出したゞけ喋べること

が飯より好きで、上京後少々法律を嗜り、免許代言人となつた。  
◎昔者蘇秦張儀は、一枚の舌で六國の相印を帯びたと云ふ因縁からし、彼も儀秦を氣取り、吞六居士と號し、字を雲平と稱した。  
◎既にして籍を信州上田に移し、政友會の陣笠として、同地より起つて衆議院議員となつた。信州でも辯舌に於ては、少なからず其地の有志家を煙に巻いたものだ。

◎議會では國民の藏原惟廓位に常に怒鳴上げて、満場の眠氣を覺まし、又笑はせもしたものだ。一たび彼の葬られしより、何となく寂寞を感ぜらるゝ。  
◎日糖事件と前後して、彼は吞六ならぬ吞牛事件で、獄裡の人となり、今猶婆の風に吹かれぬと見へる。五頭か十頭の牛の丸吞で、寂滅往生とは、雲平先生にも似合はぬことであつた哩。  
◎均しく政友會員で巧に狂言を演じて、十萬二十萬の猫糞を極めてる連中も澤山ある様だが、彼の吞牛事件で過去帳に上つたのを見ると、彼は單に喚出奴の様な男で、惡黨にも善人にもなり切れない、真に中ぶらの亡者であつた哩。

一天雲なくして研き澄したる如き月を觀るのは、薩張して  
好い心持なものだが、其趣味は寧ろ朧な月が、老松の影を洩  
るゝの幽且つ婉なるに及ばない。人も餘り要領を得過ぎた  
のは面白くないもので、却て盆鞍や馬鹿太郎の割合に持離  
さるる所以だ。

### 七 有 耶 無 耶

#### 大 屑 籠

衆議院議員 松田正久

◎茫洋として捉ふる所あるが如く、なきが如く、不得要領の極意に入れるもの。  
◎然るに政友會に彼なくしては、二百頭顧の纏がつかぬ。彼は恰も屑籠の様なもの、汚いのも綺麗なものも、糶吞にして、兎も角も室内に散らばつたものを納めるの徳がある。  
◎彼と對立する原敬は、全然性格を異にして、譬へば塵はたきの様で、彼處此處

をはたき落して綺麗にするの働はあつても塵の收がつかぬ故に兩者相待つて初めて政友屋のお掃除の埒が明くと云ふものだ。  
◎彼に對する須叟彼れ多を語らざるも何となく春日煦々の感が起る。禪房に大徳の和尚を叩く様だ宜なり有象無象の大叫喊の際にも彼の羅漢頭をニユツト差出せば大抵鎮つて了ふ。

◎要するは彼の茫洋たるは智の極彼の衰切らざるは勇の秘とも云ふべく。若し其類を求めば故西郷從道侯の様なものだ。

### 國民黨の三役 代議士河野廣中

◎河野廣中は一時東北の五人男と持囃され實際其等五人者は東北民論の代表者であつたが就中工藤行幹佐藤里治は鬼籍に上り阿部井盤根菊池九郎は頽然たる老齡を重ねて政界を退き唯僅に彼れ河野の其名殘を留むるのみである。

◎由來彼は智謀材幹の衆に勝るものあるにあらず學問辯舌の敬仰すべきも

のあるにあらず獨創の識見取捨の明亦た稱するに足るものなし斯く詮議して見れば彼は一文錢の價値もない様だが彼が沈黙には他の萬言に勝るの雄辯を有し彼が微笑には水火猶辭せざるの勇猛心を包んでゐる。

◎彼れ壯にして福島縣下の衆望を聚め同縣會の議長となり有名なる壓制知事の三島通庸に反抗し其陥るゝ所となりて多數の同志と共に獄裡に投せられ又對露同志會を起して日露開戦を促し同時に彼れ衆議院議長として開院式の勅語奉答文に換ゆるに彈劾的上奏文を以てして巧に一場の政治的手品を使ひ次でポーツマウス講和條約不平のため國民大會を日比谷公園に開くや彼れ會長として起てるが如きお神輿として擔がるゝには最も適役である。

◎四十二年進歩黨同派戊申俱樂部等の策士に依つて新政黨の組織せられんとするや彼は又新會にあつて靜に時運の變を觀次で政友會と桂内閣の野合なるに及び其副産物として中央俱樂部と國民黨とが飛出した而して久し

く疑はれてゐた彼は國民黨に入り其首領株の一に据ゑられた。  
◎彼は去就進退につき快速の行動は望み難いが一旦決して起つた以上は檀

の浦迄ヤツッ付ける勇氣と操守がある且つ從容逼らざる所の雅量もあり名前に恬淡な禪的胸地もある此點は犬養や大石よりも一頭地を抜いてる様だ。

◎彼當年六十三意氣漸く耗し半ば過去の人となつて了つた彼の花と謳はれしは自由民権を絶叫せる福島事件の前後で最も得意なりしは下院議長時代だつたらう而して其間大臣たるべき機會なきにしもあらざりしに彼と並んで關東に雄視せし星の爲に其運命を妨げられたのであつた。

◎彼が郷里の菩提寺に一禪僧がある彼は妙な動機から此禪僧と懇意になり一部の無關門を貰受け爾來坐臥行住の間常に之を研究し特に入獄中の辛辣なる工夫は彼が心をして真に無關門の境地に進めた故に彼は政客の衣を脱すれば即ち洒然たる一禪僧である彼の近來一向に事物に執着せず黨争に齟齬たらず一見全く其面目を磨盡した様であるが其實禪的修養の益々發揮するの相だ彼と相並んで大石正巳の時々禪に隠るゝ又其茫冥として不得要領なるの相似たる誠に好一對だが之に對して要領を得過ぎたる犬養毅の配合は亦最も妙である。

老たる哉

前衆議院議長 貴族院議員 杉田定一

◎政友會にありて終始一貫其黨に盡くしたる元老としては松田に亞いでは彼だ今や頽然として老い鉛天神を以て冷遇せらるゝも昔を忍ばゞソ一蔑視したものでなからう。

◎智術も識見もないが正直と熱烈なことは無類だ其壯なりし頃は北陸八州の士が彼の一號令に蹶起したもので曾て海軍大臣を以て擬せられたこともあつた。

◎彼の議長振は拙であつた又大岡との議長争も見苦しかつたが其人格よりすれば彼は大岡よりズット上品だ大岡の佞姦邪智ときては到底鼻摘だ。

◎彼も時としては内閣の一椅子位は欲しからうが四圍の情勢がモ一許さぬ隠居場として貴族院は最も適當だ彼れ如何に元老風を吹かしても梓の緩んだ桶は水が洩れる大抵な處で諦めたが宜からう。

◎何しろ辛抱と年功は偉いもので彼の器量じや從來の境遇は過分な位だテ



天下の色男 衆議院書記官長 林田龜太郎

◎ 粹翰長林田龜太郎といへば、書生時代から酒と女にかけては随分豪もので、曾て帝大在學中、ある夏の休暇に、吉原か何處かに豪遊を試み、其彈藥補給のため、寄宿舎諸生の夜具を大八車に山積して、之を七ツ屋にヒン曲げたと云ふ様な話も残つてゐる。

◎ 精力強盛で、五十何歳の今日とても、終宵酒を喚び、妓を擁しながら翌日衆議院の事務を一々處理し、部下を指揮し、三百の議員をして、文句を捏ね廻はさぬ迄に行つて除ける固より老熟の爲には相違ないが、其精力驚く計である。

◎ 彼は上院の太田翰長と同じく、下院の翰長としては實に久しいもののだが、到底内閣の伴食にもなれ相にもないから、一翰長を以て甘心し、暇あれば則ち情海に舟を棹すと云ふのが殆ど常習となつてゐる様である。

◎ 彼の細君は、曾て其通の豪のものとして聞えたる、富貴樓のお倉婆さんの養女だ、矢張り道の蛇で、是でなくては痒い處に手が届くまい。

英國型紳士 宮中顧問官 菊池大麓

◎ 彼が意馬の之く處に隨つて浮れ出すや、獨り新柳赤坂などの小天地に跼踏せず、快車夢を載せて、東海名邑の花を折り、又忽ち鴨河の水に浴し、東山の月に酔ひ、更に浪華の水に泛び、寧樂の都に鹿聲を聴くといふ風に、無限の興趣を遣り而も到る處に牡丹櫻とりくの美人が、珠數の如くに彼の腰にブラ下るに至つては、彼亦た天下の色男である。

◎ 故會禰荒助は、克く俗謠を作つて、之を愛妓の絃に上せ、屢鼻毛を延したものだ、彼亦た其技に拙からず、時として其餘音の新聞紙上に洩れることもある。

◎ 選挙法改正に就ては、彼れ幾年か丹誠を罩めて立案調査せしに、偶其實行難を見るや、憤然として其一切の書類を火中にし、亦た顧みなかつた、彼が男らしき胸襟否、疍癩玉の飛出し、工合も察せらるゝぢやないか。

◎ 彼れ十二歳で英國に留學し、在ること十年、深く英國流の感化を受け、殊に英語の如きは、發音の正確にして流暢なること、多く類を見ない位である。

◎津山藩士箕作秋坪の子で、博士佳吉は彼の兄弟である。温良圓滿の君子で、男  
 濱尾の茫洋捉ふべき所なきが如くならず、又山川の如き峭險の氣なく、而も事  
 毎に可なり要領を得て、又衆を率ゆるの度量もある。

◎東大總長文部大臣學士院長等を経て、今や京大總長の位置にゐるが、別段の  
 波瀾もなく治つて行く様だ。然れども一旦變動突發の曉には、自我本位の彼に  
 は、少々手古摺ることが多からう。(此稿を畢つた後、彼は宮中顧問官)

◎現に部下の一教授岡村某が、何處かの講演で、當局を罵倒したとがで、大騒を  
 やり、遂に彼に謝罪せしめたと云ふ不見識な事もある。

◎英國式に彼は何處迄も自我に強い故に、人の爲に或は事の爲に、自我を忘る  
 るてふ俠的行爲がない。是れ即ち彼の長短併有する所以だ。

### 禪大使

澳洪國駐劄全權大使 秋月左都夫

◎彼は宮崎縣舊高鍋藩士で、住友家總理事鈴木馬左也は彼の實弟で、又故小村  
 侯も彼と同郷の誼あり、彼の爲には一肌抜いで膽煎をしたものだ。

◎彼は門閥としては藩主の支族で、一方に郷閥の援護あり、且つ閥閥としては、  
 現日本銀行總裁三島子の姉を妻とし、牧野伸顯夫人は彼の妻妹である。然るに  
 彼は其等の閥勢に依らず、單に己の力に籍つて現地位を贏得たと云つて宜い  
 位だ。

◎彼は在大學時代に禪に凝り、爾來半官半僧で押通し、次で白耳義留學中大隈  
 伯の條約改正に憤慨して歸朝し、大に其非を鳴し爲に免職された。

◎彼は外相内田などより、三年も前に外交官となつてゐるから、少しく游泳を  
 巧にせば、遠の昔に親任になれたらう。

◎平生緘黙誰にも無愛相だが、部下は中々心服もし、評判も宜い而して一朝國  
 の大事に莅めば、身命を忘れて絶叫狂奔の概がある。

### 兆民式

貴族院議員 加藤恒忠

◎加藤恒忠は役人氣質を離れた一寸面白き男と云ふから、先づ難と其經歷を  
 調べて見ると、四五年前迄は官海に游泳してゐたもので、白耳義駐劄の公使と

なつたのが、其最後の幕である。其迄は頓々拍子に進んだのだから、辛抱したら大使にも大臣にも漕ぎ付けられ相なものに、其處が即ち儘ならぬ浮世なりけり、何か外務當局と意見を異にせる爲に、半生辛酸の歴史を擲つて官を辭し民間に下り、聽て聘せられて、北濱銀行取締役、大阪新報社長となり、又郷里松山より選ばれて衆議院議員となつた。

◎彼は從來何も世耳を驚す様なことはしたことがないが、今茲五十幾歳の長年月の間に官吏としても私人としても、相當の地位を失はざるに見れば、多少處世の妙諦を心得てる様だが、彼は少時岡鹿門に就き漢文を修め、次で一世の奇人中江兆民に佛語を學び、其後司法省法學校に或は巴里の法科大學に専ら法政學を研鑽したと云ふから、東洋流の治國平天下の頭に、權利自由の熱を吹込んだものだ、而して少壯時代に鍛上げられた腦味噌は、容易に變せぬものであるが、其鍛手が鹿門と兆民であるから、面白く彼が永く官海に鰻上の術を講ずる能はず、又會社の重役として、新聞の社長として、將た下院の議員として、孜屹々たらず、時として之を擲つこと、弊履の様に見ゆるは、一に其餘音と認め

らるゝが、彼の相應の位置を保持して、舉措綽々たるものあるは、曾て大に物質的秩序的學究たりしお蔭である之を見ると、坊主臭い言條だが、人間は何處迄も、因果應報の理を免かれぬものである。

◎彼には之ぞと取上げて言ふ程の奇行もないが、其でも少しは兆民式な處もある。例へば銀行重役として行務を見ず、新聞社長として其新聞を讀まず、衆議院議員として傍聽券を出せること、單だ三枚なるのみならず、彼が議員となるには一錢を用ゐず、別段難有とも言はず、是等は多少俗輩と趣を異にしてゐるが、未だ兆民の様に心のドン底から頭の天ツ邊まで俗を離れてはをらない。

◎彼が郷里の松山からは子規だの鳴雪だの、俳家の宗匠を出して、ただに彼も幾分の俳味を帯び、又漢詩も拈れば書も巧で、中々風流漢である。

◎彼の妻は、山龍堂病院の娘で、石井菊次郎の後妻の姉で、石井とは義兄弟だが、彼が外務省に對する反抗は頗る猛烈な相だ。

◎今年大阪新報の關係から、原内相(報社社長)の推選で、貴族院議員に勅選されたが、由來上院には根深き弊習あり、且つ憲政の施行上圓滑を缺くの點もあれば、

早晩改革を要せざる可からざるに偶彼が如き新議員を得たるは之が爲に幾分の楔子を得た様なものだ。と江湖の望を囑する所である。彼たるもの宜しく手に唾して、一代の元氣を振ふべしである。

### 昭代の李青蓮

前司法次官  
辯護士

山田奠南

○奠南居士山田喜之助は、隈板聯合内閣を組織せる頃は司法次官として才名を一世に馳せたものだが、今は東都の九尺二間の浪宅に傲骨を横へ、獨り浮世の自在ならぬを啣つてる様である。

○彼は赤門出の秀才で私魂漢才に兼ねるに泰西の學殖がある。本職は辯護士であるから、力めて休まずんば、優に法曹界の大立物たるべきに、天稟の才氣と自憎落の習慣が其人を妨げ、遂に陋巷に老いんとしてゐるのである。

○彼は能く飲み能く花を折る。之が體力拔群で、金力充溢のものならむには、左程の影響もあるまいが、彼は丹次郎式の優男で、元來金と力はなかりけりの方だ。加之ならず、酒色に祟られ、既に活動の元氣を消耗し盡くしてゐるから、其才と

學との發揮の仕様が、ない況や何人も一たび勢に乗損ねると容易に回復の出来るものではない。

○彼には乾燥なる法學の外に、頗る漢籍に通じ、漢詩にも妙技を有してゐる。且つ猶春秋に富んでゐるから、自今嚴に欲を節して、自強鞭撻せば、再び往年の奠南たることが出来様が、彼は依然舊態を更めない而して、之が即ち彼の彼たる所以だらう。

○頃者聞く所に、由れば、舊門生等屢々來つて、彼に薪水酒肉の費を送る。就中博士花井卓藏最も懇慫に彼の爲に盡くすとは、亦師弟間の一美談である。

### 殘生を育英に託す

宮中顧問官法學博士  
中央大學々長

奥田義人

○明治十七年の法大出身で、其より約二十年間官界に游泳し、農商務文部拓殖務等の次官迄成上つたが、遂に大臣の冠を戴くに至らずして、野に下つたものだ。

○野に下ると同時に、郷里鳥取市より、兩度迄撰ばれて代議士となつた。空々寂

寂何等聞ゆる所なくして終つたのを見ると彼は議院政治屋には適しなかつたと思ゆる。

◎一時は彼も評判男で、豪放磊落で、官海游泳に妙を得たものとされてゐたが、事實は然らずして、彼は在外廉潔白な質で、次官迄なつたのは、全く年功の致す所であつた。

◎愕堂の東京市長を辭するや、彼も候補者として擔出された所を見ると、未だ全く忘却されてはゐないと思ゆるが、モ一彼の時代は過ぎた。

◎頃者菊地武夫の物故すると共に、彼は其後を襲ぎて、中央大學の校長となつた從來能く郷青年の面倒を見てゐた美點よりすれば、隱居役として最も適切だらう。

### 百姓の恩師 農科大學教授 横井時敬

◎彼は熊本出身で、明治十六年の駒場卒業である。濃厚篤實の君子人で、些の野心銜氣もない。

◎今の所謂博士てふものには、或は運動に由り、或は年功其他の理由に依り、随分如何はしき連中も少くないが、彼は農政學を一意専心に研鑽し、其深さに於ては到底新渡戸稻造等の及ぶ所でない。而して後生を導くに諄々として、倦まず、片田舎の百姓にも耕作肥料の便法を教へて、其餘澤を誦はしむる等、其德行の稱すべきもの少くない。

◎熊本の儒者に會つて、元田東野あり、侍講として先帝陛下に仕へ、大に王者の道を傳へて、宏業に参翼せしことあり、其人品高邁にして、温厚玉の如くなりしが、彼は則ち此郷先輩に頗る酷似した處がある。

◎新渡戸の臺灣總督府顧問たるや、總督佐久間は、曰く「博士などは何事も知らぬものぢや、新渡戸の如きは博士でありながら、肥料のやり様も解らぬ」と、之を彼の學に忠實にして、實際に老功なるに比すれば、管に月釐の差のみでない。

### 愕堂に勝る萬々 前大阪市長 植村俊平

◎彼は十九年の赤門出で、日本銀行では鶴原等に加擔し、山本達雄に楯突きて

勇退し、九鐵管理局長として、至極佳良の成績を挙げ、一昨年中橋徳五郎等の熱心なる推選に由つて、大阪市長となつたのである。

◎快刀亂麻を斫るの智略はないが、熱誠正直の英國型の紳士である。此頃同市に蟠踞せる片岡直輝等が監督官廳を瞞着して、彼に壓迫を加へ、以て電鐵事業に爲にせんと計つたので、彼は憤然起つて之を争ひ、其主張の徹せざるの故を以て、其職を辭した。

◎東京前市長の愕堂などに較ぶれば、彼の行動は實に同情に値する。有繁の贅六等も嘿しかねて、大に反抗の氣勢を上げ、監督官廳に肉薄してゐる様だ。

◎無論中橋等も躍起となつて奔走してゐるだらうから、一埒明かば重ねて彼は再選の榮を擔ふかも知れぬ。浪華市長として、彼は蓋し掘出物だよ。

### 塚中の枯骨 前代議士 柴 四朗

◎彼の最も盛名を博せるは、米國留學より歸り、佳人の奇遇を著はせる東海散史時代で、其後世上の期待に反して、左程の活躍をなさずして終つた殊に、此

日下義雄と若松城下に決戦して、跪くも敗を取り、愈々塚中の枯骨同様に葬られた。

◎朝露の如き人生、一たび出處進退の機を過れば、天賦の俊才も、貴ぶべき歴史も、忽ち泡沫に歸して了ふ。彼の如き、天下を敵として、苦節を勵みし、會津武士でありながら、推されて一郷の代議員となれば、意氣地なく、閥族に降り、其走狗となつて、中村背水等と共に馳驅するに至つては、實に面汚とも、何とも沙汰の限りである。

◎家弟五郎は砲兵科出身の少將として、殊に義和團事件で、令名を博したものであるが、同じ兄弟でも、霄壤の差がある。

◎會津武士の典型として、故山川浩及健二郎兄弟の如きものがあるが、彼の如きは當初同じ典型より出でしも、後權勢に酔ふて、覺むることの出来ないものだらう。

### 好學究 朝鮮總督府 取調局長 石塚英藏

◎彼は明治廿三年の法大出身で、白仁武橋本圭三郎床次竹次郎佃一等等同窓である。奇骨もなければ辣腕もないが、思慮周密で事務練達の能吏である。

◎曩に臺灣總督府參事官長、關東州民政長官等に歴任し、後朝鮮總督府に廻つたのだが、關東州では、後藤と意見の衝突をなして勇退したものだ。當時の彼には頗る同情すべきものが多かつた。

◎彼は會津出身で、柴四朗等は其先輩であるが、四朗の意氣も既に衰へ、老驥伏櫪の歎ある今日、彼の獨り新領土の重位にあるは、聊が會人の氣を吐くに足らむか。

◎要するに彼は行政官としてよりも、寧ろ法官たるか、或は學究たる方が其性格に適してゐる様に思はるゝ。

### 老驥伏櫪

毛斯綸紡績會社社長 松本重太郎

◎榮枯盛衰は眞に掌を返すよりも速なり、彼も一時は關西財界の雄と嘔はれしが、一朝其牙城たる百三十銀行の破綻より、延びて其關係せる四十餘の諸會

社に影響し、忽ちにして暮雲落日の人となつた。

◎彼が會て既倒の會社を起し、衰殘の事業を救ひしこと、枚擧に暇あらず、然れ共一旦彼の虞淵の底に沈むや、贅六連の輕薄なる亦一人の之を顧るものもない。

◎此間に立ち、唯僅に毛斯綸紡績會社の瀧村竹男のみ舊恩を記して、彼を社長に推し、毫も他の非難排撃を省せず。瀧村は眞の江戸ッ兒にして、聊か其骨頭を發露せるものだ。

◎松本の曩に破産するや、一切の私財を投出して、債鬼の分取に任じ、亦た微塵隱蔽の跡なし、而して徐に曰く、我は丹後の寒村より出で、事をなせるもの、其敗れて復び昔の無一物に歸るも、亦た何をか恨みんと、以て其磊々たる襟懐が見ゆるぢやないか。

### 長髮の名殘

前代議士 辯護士 高梨哲四郎

◎沼間守一は彼の實兄だ、沼間は徳川旗下の士で、田口島田藤田等と共に一時

は盛名都下を動かしたものだ。而して彼亦た夙に辯護士たり代議士たり大に賢弟あるを知らしめたものだ。

◎彼が雲の如き鬢髪を垂れて、日比谷の議場に臨むや、雄辯の時に衆耳を傾倒せしむることもあつたが、其長髪は特に人目を牽いた。

◎然るに近年著しく衰毫して亦往年の英氣は見る影もなく、既に逐鹿場裡にも立つ能はぬ様になつた。盛者必衰の哀音何ぞ爾く速に來れる。

◎彼の遣口は餘りに直線的で露骨で、且つ我慢増長が過ぎたからだ。成程或時代の俊才ではあつたが、俊才も修養を怠れば鈍才となる。而して時代は容赦なく進歩して行くものだ。

◎彼が曾て吉原泉虎の娘を嬖妾とし、連年遊蕩の結果負債山積し遂に臺灣總督府の一書記官となり、泉虎の嬖妾は爲に浴衣地一千反を送つて其行を壯にしたことがあるが、色男も其迄の命なりしと見え、今や既に死せるか生けるか亦一人の之を口にするものもない。あゝ慎しむべきは、遊惰放慢だ哩。

當年の意氣なし 前二六新聞 秋山定輔

◎前二六新聞社長秋山定輔は、今や雌伏静養し、何事をか爲さんとしつゝある様だが、兎も角も意思の強い奇抜な男である。

◎彼は大學を出てから、二十六歳の時に新聞を創刊した。由つて二六と命名したのだ。相だ處が其理想高遠で、記事が高尙過ぎたので、一向に賣行かず、遂に一時休刊の止むなきに至つた。時の記者は福田佃鈴木等の豪傑揃であつた。

◎次で三十二年に至り、再刊する様になつたが、此度は大に調子を低めて、時好に投ずる様にし、彼亦た自から車を廻し、配達もやると云ふ風に、一社大車輪の活動をしたので、紙數十八萬も出る迄になつた。有名なる三井攻撃も、其間に行はれたもので、其火の手の熾なりし時は、滿都の讀者をして、火事以上に血を湧さしたものだ。

◎懸て彼は神田區より選ばれて、下院議員となり、大に言論壇上に雄飛したが、恐く其時が彼の空前絶後の得意時代であつたらう。盛者必衰の運命は彼の頭



上にも宿りて、一時社員十六名其筋に拘引せられ續いて彼は露探として不測の嫌疑を蒙り爾來社運頓に衰へ彼亦た失意沈淪の人となつた。

◎元來蒲柳の資で肺疾もあり且つこの大々の跌蹠のため彼も衷心大に觀する所ありしものと見え飄然として妻を携へ西伯利亞より瑞典方面へ旅行を試みた。

◎歸來稍健康は復したるも亦た社務を見ず遂に社を擧げて其股肱の俊秀たる秋田清に譲つて了つた同時に元老福田佃の徒も去つた其間に隨分面白からざる消息も傳へらるゝが茲に序説する必要もない。

◎彼は一方からは非常に冷酷漢の様に評さるゝも從來の行運に見るに強ちさう許でもない要するに感情にも随分強く事理にも明かだが今や儘に不幸の極に沈んでゐるのだ何人も此に至つては藻掻く程妙に思はれ誤解さるゝものだ。

◎二六萬朝は其惡辣なる點に於て一時東都に竝べ稱せられたものである然るに其主宰者の人格の相違だけ其運命の歸する所も異なつて來た様だ黒岩

は新聞には最も適當なる模型に作られた男で蓋し其以外には適所を見出さない位だ而して彼亦た之を以て天の使命と觀じ何事にも手を着けない然るに秋山は野心満々彼をも此をも一時に握取し機乗すべくんば天下亦た取つて我掌にすべしと云ふ様な行方で其根柢薄弱で作戦が餘りに大膽過ぎたるため急劇の頓挫をしたものである結局思慮周密ならず勢に乗つて功名を急つたからだ。

◎然れども彼の猛氣や愛すべきものがある今や彼の同伴なる萬朝は次第に老成の君子人となり彼の後身たる二六は遂に當年の元氣を見る能はず都下の言論界大に寂寥を感じるの折柄何となく捲土重來の彼の武者振が見たくなる。

一 寒三十年の古官史 内務書記官 大谷 靖

◎内務省のエンサイクロペチャとして二十幾回の議會政府委員席に何時も顔を出せる老吏に大谷靖がある彼は大久保内務卿時代より依然として内務

にありと云ふからには其古さ加減も亦た知るべしである。  
◎他の俗輩の輩に倣つて上長の髻塵を拂はゞ彼も今頃は業に既に次官以上に漕付けてゐただらうが其處が即ち彼の特色で彼は官人でありながら毫も功名利達を念とせず唯其職に忠なるのみで勤績三十幾年一寒奮の如しである。

◎曾て山縣の寵を得其後の長官亦皆彼を重寶がれり而して彼は永く官海に揉まれたる餘徳として何人に接するも決して其暗礁に觸るゝ様なことはない。

◎豫算に頗る精通してゐるので時々新聞記者等の襲撃を喰ふも巧に之を避けて彼等をして究問する克はざる様にする兎も角も淵明風の肌合で亦た甚だ風流韻事にも富んでゐる。這麼な男を鰥瓢とて云ふべきか。

### 五斗米生涯

外務省人事課長 田付七太

◎彼は曾て佛國公使館にあること十二年其間曾根栗野本野の三公使を送迎

したものだ。勤績此の如く長し故に巴里の事は隅から隅まで知悉し本邦知名の士の彼地に遊べるものは大抵其東道を煩はしたものだ。  
◎彼れ能く飲む而して飲めば必ず大に氣焰を昂ぐ義太夫端唄亦た口に應じて出るが柄に似合はぬ美音である。  
◎彼の器量骨柄は第二第三流の部だが其行動心事の如何にも豪放快豁で役人振らぬ處に男らしさが見ゆる。  
◎這麼な風だが巴里在任中の如き一般居留同胞就中軍人仲間には非常に評判が宜く時としては大公使以上に持囃されたものである。

### 盛者必衰

前藤本ビルプロカー主 藤本清兵衛

◎一時藤本ビルプロカーと云へば關西の財界で旭日隆々の勢あり同業者間の嫉視を受けた位であつた。  
◎然るに白糖破錠の影響と彼が投機の累を受けて脆くも一敗地に塗れて了つたが彼は何處迄も男らしく自家の全財産を債主の前に提供し今や商業會

議所議員たるの外一切の事業より足を洗つて徐に風雲の成行を觀望してゐる。

◎和歌山出の男で、幼少より大阪なる藤本商店の小僧となり、見込まれて同家の贅婿とされ、爾來投機で成功し、或時は中橋岩下等に次ぎ、第二の松本重太郎を以て期待さるゝ迄になつた。

◎沙上の樓閣は成るも早い、崩れるのも亦速だ、彼も奈落の底に沈めば、凡々たる一漢子に過ぎないが、猶春秋に富む此際宜しく臥薪嘗膽が肝要だ、敗れたものでなくては、成功の事は話せない。

### 不得要領東奔西走居士 代議士の野半助

(一)

◎福岡出身で、故平岡浩太郎の妹を妻とし、立洋社派の錚々たるものである、彼が一國の選良として、衆議院の一員たらんことを熱望して、鹿を争ふたことも幾回か其數を記憶せぬ位である、而して齡耳順に近く初めて議員たるの月桂

冠を得た、彼の得意や想ふべしである。

◎野心の多いこと、彼程のものも澤山はあるまいが、其野心の的に中つたことは、滅多に無い様だ、人々を稱して其が即ち的半たる所以だと、彼も亦た名詮自稱を免かれぬ徒である。

◎彼が奇行を一々叙し來れば、僕を換ゆるも能はぬ所である、彼は靜に家にあることが大嫌で、年中大概汽車中に、其姿を見る、何かしる暗中に計劃をなし、又種々雑多の人と關係して、何時見ても忙し相である。

◎彼は能く眠る客と對談中は勿論のこと、汽車中では最も甚だしい故に屢々目的驛を乗過して、逆戻の厄に會ひ、又客の歸去りしを知らずして、其何の爲に何事を對談せるやを知らざることがある。

◎日露戰役中、彼は南滿の軍用鐵道に便乗して、北方より大連驛に到つて下車せんとしたが、大切の乗車券がない、但其は途中で紛失したものらしい處が戦時だから、憲兵の調方が頗る嚴重で、彼は怪しきものと認定され、到頭拘留の身となつた、が之を聞ききたる、甲乙某々の辯明に由つて、ヤット事なきを得たので

ある。  
 ◎彼は議員競争の度ことに熱心に奔走し、又能く演壇にも立つた某年某地の選挙区民より彼の聲望を渴仰して、一席の政談を要求して来た彼れ即ち欣々として往いて其懷抱を稠人衆坐の前にて述べた。選挙区民等は定めて風采堂堂議論風發の人と思ひきや、言々吃の又平式のみならず、音調低くして、何が何やら薩張り譯らぬので、流石の聴衆も落膽して、其結果は彼に投票をせぬことになつた相だ。

(三)

◎政治道楽には金が要るので、彼は凡ゆる手段を講じて金作をする。鑛山でござれ、貿易でござれ、製造業でござれ、何でも角でも眼の付次第手の觸り次第にやつてのけるだが、元來事業家でもなく、商估でもないから、未だ曾て終始一貫した金儲をしたことがない。彼は其團栗大の目を時々開いて、油揚を攫ふのである。が其平生の不得要領に似ず、此道にかけては、一種不思議の怪腕を持つてゐる。

◎彼が今日迄に攫ひし油揚の代金は、少くも三四十萬圓を下るまいとのことである。先づ枝光製鐵所より、續て九州鐵道會社より、敷地問題等で巨額の黃白を握り、最近には大連灣の埋立權利の紆々にて、滿鐵及都督府より五六萬圓を占め、其他幾件となく、機宜を制して其懷を溜めた。

◎斯く彼は攫ふことには妙を得てゐるが、之を散することは、恰も小兒の花を撈るが如く、何時の間にか煙散霧消して、復た元の素殼寒となつて了ふ之が彼の罪のない處で、亦た彼が郷黨に於ても、常に一道の光明を保つてゐる所以である。

◎彼の錢を散するは、別段華奢でもないが、其懷の温なる時は、親戚舊友乃至書生職工何でも面識あるもの、彼に同情を求むれば、惜氣もなく何程か恵むを常とするのである。偶々妾を圍ひ、又花街に春を買ふこともあるが、今や齡と共にこの情熱は大に褪せた様だ。

◎曾て頭山平岡等と相携へて、民權論を唱へ、又大隈伯の條約改正には、反對黨の先鋒であつた。夫の大隈伯に爆彈を投じた、來島恒喜の如きは、實に彼の兄弟

分であつた。

◎彼は政熱の昂進すると共に、益々金力の必要を感じ、日露戦争中は、降旗元太郎(前代議士等)と結んで、遼河の運送業を営み、或は軍隊上納をなし、多少の錢を獲、一兩年前には、親しく佛領柴根に航して、石炭を佛人に賣込運動をなし、同時に大に南洋貿易の有望を鼓吹したこともある。

◎昨年の議會には、故江藤新平の偉勳に對して、敍爵運動に奔走したが、之は成功しなかつた。兎も角も彼の行運は、變幻を極めてゐるが、マ一頭山型の小なるもので、モット俗化したものだ。

◎學問識見何等見る所のない男だが、之を叩けば何時でも一ダース位な問題を有せぬことはない。而して彼は之が爲に常に東奔西走してゐるが、其問題が既に不得要領なるだけに、結果は更にヨリ以上の不得要領である。

◎但人間萬事深く詮じ詰むれば、大概は不得要領に歸して了ふが、彼のは、劈頭から不得要領でかゝるから、面白く而して、彼が其等の問題を振廻すに、代議士は最も詭向の好看板である。

### 八 附 燒 刃

平生大言をなすも、事に臨んで狼狽し。一朝變に會して、聲名を馳するも、久しからずして聞えざるものがある。是等の徒を稱して附燒刃といふ、法螺や僥倖のみで、世間は瞞着し切れるものでない、地金が立派でなくては駄目だ。

#### 學問は人を小さくする 東京府知事 阿部 浩

◎盛岡出身で原敬とは同郷でもあり、且つ深き因縁を有し、原の内相となると共に、彼も東京府知事に拔擢されたものである。

◎彼は自から阿部貞任の末裔と稱する程あつて、軀幹長大で、膂力衆に超え、人と争ひ言論に窮せんとする時は、此天與の膂力に訴へて、脊骨を振舞ふことがある。

◎少時より學問厭ひで、又出来ない方で、唯膽力と腕力を以て、其出世の資本としたものだが、彼は此兩力の外に、幫間的迎合の才あり、又思切つた英斷もあり、

多少の創見もある。

◎先づ郷關を出で、日光神官の下廻となり、月俸八圓の身となつたことがある。友人等も其柄にない役付に驚いた。彼は莞爾として曰く、日光は貴顯紳士の集る處だ。男子志を成さんと欲せば、先づ此地に構へて、彼等を生擒るに限ると、彼が出身の秘訣は、遂に此法に由つて一貫されたものだ。

◎日光神官では面白くもかゝらなかつたので、縁を齧つて岡山縣屬となり、月俸二十圓を給せらるゝことゝなつた。當時原敬は賄征伐のため、大學を放逐され、忽ち浪々の身となり、大に窮迫した。此に於て彼は俸給の半を割いて原を救ふた。は宜つたが、此金は吉原蓬萊樓の花魁に注入せらるゝ。獨り原の男振を上げたのであつた。

◎彼は縣廳の覺目出度して、暫時にして勸業課長迄昇つた。恰も好し、時の總理伊藤博文は縣の視察に來た處が、縣では何かの失錯で、大に伊藤の機嫌を損し、宴會の席上でも伊藤は一言を發せず、知事以下一同冷汗背を濕した。時に彼は席末にあつたが、忽ち割箸を鼻孔に挿み、素つ裸となつて飛出し、節面白く甚句

を唄ひ且つ踊つた。之には苦蟲を嚙んだ様な伊藤も吹出して、了ひ、其より一座大揚氣に浮れ、彼は伊藤の間に應じ、其經歷、抱負を仔細に述べた。之が彼の伊藤の知遇を得た權輿だ。

◎次で鐵道廳の小吏より理事に進み、其間公伊藤とのセメントを益々堅ふせんが爲に、伊藤巳代治にも結んだものだが、鐵道屋では大臣にはなれないと云ふので、遂に官を擲つて、郷里より代議士を争つた。當時の策戰として、先づ厨川の舊城址を買込み、我は阿部貞任何代の末裔と云ふ名乗を上げ、大に選舉區民の耳目を驚かし、マンマト當選したものだ。

◎政黨掛引は彼の熟れざる所で、一向運達の上る見込もつかぬので、又た運動して、社寺局長となり、知事となつた。而して知事として千葉に在勤中有名なる印旛沼開鑿を企て、成らず、次で教科書事件に連坐して官を罷めた。

◎次で再び知事となり、後西園寺内閣成り、原が内相たるに及び、彼は自づから警視總監を望んだが、之には原も首を括り、君が總監は危険だよと、遂に彼を東京府尹に任命した。

◎先年西園寺の内閣を桂に引繼ぐに及び、人みな彼の勇退を豫想せしに、彼は更に桂に取り入り、平田に結び、到頭今日迄嚙付き通した、其圖々しさには舌を巻かせぬ。

◎兎も角も彼は豪快な男だ。志を遂ぐるに手段を撰ばない方だ。彼の眼に學問も門閥もあつたものでない。糞度胸と機才で押通したものだ。赤門出身の灰殻知事などが愚圖く云つても、一騎打せば、恐く彼に敵するものはあるまい。

◎豪膽は故河島醇に似向見ずに切捲くる處は、武田千代三郎の如く、而して其圖々しく己を愚にし、人を愚にして野翫間を學ぶ所は、誰に類するや。

◎無學にして大臣たるものに、長谷場純孝あり、大臣たるに生半可の學問は、却て人を小にするものだ。大臣たるもの、要は能く大勢を察し、人を取するの術を知れば、澤山だ。此點よりすれば、彼亦た今の伴食大臣の働位は、何時でも演つてのけるだらう。

廣くして淺い

東京帝國文科大學長文學博士 井上哲次郎

◎彼の學は廣くして淺い、而して何の科に就いても、専門の學士以上の知見を有すると云ふ位である。

◎福岡の産で、明治四年長崎の廣運館で英語を學び、後大學に入り、獨逸にも數年留學して哲學を研究したものである。

◎少時より頗る學才に富み、殊に文藻に秀で、ゝゝた、巽軒詩集の如きは、最も誦するに足るのである。

◎學者として學田に新機軸を出し、創見を立て、或は百世不磨の大著をなすが如きは、望む能はずだが、蓄音機的に克く蓄へ、克く鳴すことは、彼が長所である。

◎人物としては、薄ッべらで何等威重もなく、雅懷もない世に彼を稱して、迎合博士と云ふ位で、マ一調法な活字引にしか過ぎない。

◎彼の生地太宰府には、吉岡拜山、宮小路浩潮の如き片々たる文人は出るが、一向士的人物の出ない所である。彼も附焼及では品の宜い方だらう。

評判倒れ

前衆議院議員 工學博士 仙石 貢

◎片岡直温と共に國民黨總立委員として、一時は評判男であつたが、扱愈々政黨屋となり澄すと薩張り働がない、全然巾着を絞らるゝ爲に引出された様なものだ。

◎彼は九鐵社長時代が最も全盛で、中橋早川等と併稱され、其將來には多量の希望を囁かれたものだ。元々技師上りの人物だから、之に政界の雄を望んだのは望んだ方が見當違だ。

◎技師としては、滿鐵の國澤程のことも出来まいが、併し實業の方が政黨屋よりも適任だ。亦た彼の希望も、現在企劃中の猪苗代水電の完成位にあるだらう。

◎本年の總選舉には、我も人も當選疑なしとせしに、二十二票の差を以て、光森徳治てふ無名の小僧の爲に敗られた高知市民既に彼の無能に厭ける乎、抑彼が自棄の爲なる乎、何れにしても、見込なき政界に足を洗つて、大に實業界に奮闘した方が、おん身の爲めだんべい。

常識が時々萎れる  
代議院理事 小林源藏

◎小林源藏は、羊質虎皮の評ある男で、彼の未來は餘り良い買手もない様だが、兎も角も鐵道院の勅任理事で、本年の選舉には郷里米澤に於て強敵山下千代雄、二村忠誠を仆して、見事に衆議院の一席を占むるに至つた。

◎彼の大學にあるや、學績は常に中位にあつたが、體育は中々熱心で、講道館の柔道初段免狀迄取つた位である。其頃一夜本郷の若竹亭に落語を聞いた偶、四名連の暴漢あり、彼に喧嘩を挑んだ。彼れ何條躊躇すべきや、直に鐵拳を以て之に酬ひ、双方阿修羅の如く格闘の末、遂に交綏して引揚げた。願れば彼の着衣は悉く破れ、滿身鮮血淋漓であつた。爾來彼も大に喧嘩の味を覺へて、時々蠻力を揮ふが未だ曾て己より強きものには之を試みない。又衆寡の勢可ならざる時も然りだ。是等が恐くは、彼が柔道の秘訣で、謂ゆる羊質虎皮たる所以で、がならう。

◎彼は出世の當初、文官試験に失脚し、以來専ら鐵道を本據として、鰻上りに現位置に泳ぎ付いたものだ。相だ下院議員たることは、久しい彼の希望だつた相だが、彼に什麼な主義抱負があるか、今次の議場で、其相場も極ることだらう。



◎彼が蠻骨を現はした一例を擧げて見よう。去る四十一年十二月木挽町の待合花谷に於て鐵道院連の忘年会を催ふした。酒酣にして、長谷川謹介が何かの言ひかゝりて、二三言彼を罵つたが、彼は忽ち青筋を立て、何を小癪な計り、鐵拳を謹介の頭上に見舞つたものだ。ソコで一總立となり、朔風將に大に荒れんとしたが、仲裁の某々あり、其幕は無事に納つたものゝ心あるもの竊に彼を感笑する様になつた。

◎今一つ彼の身上談を試みむ。三十七八年の役、常陸丸が玄海洋上にて、敵艦の爲に撃沈され、乗組職員は一同船上に集り、東方を拜して、陛下の萬歳を唱へ、潔く腹掻き切つて失せける際に、彼は止むに止まれぬ日本魂も痺れてゐたものと見へて、匆卒短艇に投じて遁出したが、忽ち露兵に生擒れて、遂に遠く露都送となつた彼の彼地にあるや、露兵の待遇暴慢を憤つて、亦た例の鐵拳を喰はし、爲に待遇を一變せしめたことがある。後彼の本國に歸るや、頻に是等の事を擧げて高熱を吐くを聞くが、彼の常識も時々軌を逸して、變挺古になることがあると見ゆる。日本の勇者てふものは、同胞が壯烈なる夫の如き最後を見て、決

して遁げられるものでない哩。  
◎彼も永く官海に遊泳してゐるだけあつて、上長の心を攪り、操觚者に提燈持をさせる位は心得てゐるらしいが、未だ大人たるの素質が出来てゐない様だ、之れ其種々に批判せられる次第である。

### 今様陶淵明

大使館参事官 山座圓次郎

◎筑前出身で、頭山平岡等に引立てられ、且つ兩者に私淑して、一見如何にも豪宕な風がある、加之に飲むこと長鯨の百川を吸ふが如し、先年英國大使館参事官として赴任の際には、正宗の菰被を山程積んで行つたとの話も、殘つてゐる程だから、尋常一様の酒徒でないことが知れる。又酒徒の癖として、酔へば暴れる、彼も外務省門前に小便して、門衛に叱られ癪に觸る奴の頭を擲つて、醒

ての後に詫をする位なことは、毎時も演じ來つたものだ。  
◎彼が一番腕を揮つたのは、外相小村の下に、政務局長をやつてゐた頃だ。小村は太く彼を信じて、萬事打任せ、彼も思ふことが行はるゝので、小村の爲には、

命迄とも投出して奮闘したものだ。で小村が英國大使となる彼亦た巾着となつて行つたが、生憎須臾にして加藤小村の入換となり彼は止むなく蟲の厭な加藤の下に参事官を勤め、ヤット先般歸朝する様になつた。

◎彼の容貌言行を一寸見れば居然たる豪傑様だが仔細に其腹裡に潜つて見ると、羊質虎皮だ、付焼及だ、功名富貴の外に超然とし、毀譽褒貶の上に脱然として、一意邦國の爲に何物をも抛去り得る程の代物でない。矢張少々街氣のある、小柄口な、小學問のある男にしか過ぎない。

◎日露戦役では、拔群な功を立てた積で、論功行賞には男爵位を夢想してゐた相だが、其が金盃一組のお拂箱とは情ない。次に同僚の石井などが男爵となり大使となるに、彼は即ち参事官其儘でご隠居とは、是以て辛からうが、彼も什麼廉く踏んでも、今頃の大使位は確に勤まる。

◎彼には多少の蠻勇はあるが、人を容るゝの雅量はない、公僕としては猶多少の進境もあらうが、一朝其官職を剥ぎて野に立たしめば、其價値果して若干だ。◎故神鞭知常は、洋學を修めた陶淵明として、彼に其女を與へた。知常は其頃の

小國士であつた、而して其眼に映せしもの此の如しとすれば、彼亦た少しく誇るに足るのだ。

◎彼は長く外交掛引の間に揉まれ來れる爲に、新聞操縦などは頗る巧妙で、彼が一時大に名を成したのは、其親分小村が、彼を其器量以上に用ゐて呉れたのと、例の操縦の餘響だと評されてゐる。

◎日露戦役後彼は、侯西園寺に隨つて、滿洲視察に行つたことがある。當時彼の地方は秩序未だ全く整はず、誠に混沌たる状態であつたが、彼は到る處で熾に肉波情瀾を揚げ、西園寺の和尚をして閉口せしめたことがある。這麼な武者修行は最も彼に適役だらう。

◎彼れ春秋尙富むも、グヅ／＼してゐては、石井は勿論倉知などに蹴落されて了ふ。此處緊禪一番大に飛躍の準備が肝心／＼。

三ハイカラの一 日本新聞主筆 代議士 竹越與三郎

◎彼は望小太松本君平と併せて、政友三灰殼の隨一人で、越後出身だが、彼は人

に向つて曰く「僕は幼少から上京してゐるから故郷とは名計りで、實は江戸ッ子も同じ事さ」と以て其灰殻振を見るべしだ。

◎大久保に住宅がある、赤煉瓦の二階建て、埃及邊にでもあり相な風をしてゐる。

◎彼は口も達者だが筆を取つては優に一方の重鎮で、今は日本新聞に日々其才氣煥發の文章を載せてゐる。

◎二千五百年史及南國記は彼の著作中で最も盛に賣行のあつたものである。而して其内容も亦甚だ穩健で筆路殊に暢達である。

◎彼は代議士として、本年の選挙にも當選し、又曾て勅任参事官ともなつたことがあるが、彼の最も適所は矢張新聞記者である。官吏たり議員たるは長所でない。而して其空威張と見榮坊は其天性で、舶來のハイカラーたる所以だ。

到頭へミツヌルンドでお了ひ?

衆議院議員 法學博士 戸水寛人

◎日露戰役前七博士組の筆頭で、開戰論を以て當局に肉薄した武者振は、凄じいものだつた。が其掛冠後は聲名年々下落し、今やへみづぬるんど「戸水寛人」の嘲罵を浴せかけらるゝに至つた。

◎且つ一時は羅馬法のオソリチーとして持囃され、又貝加爾限界の分割論は大に青年の血を湧かしたこともあるが、彼の變節して政友會に降りし以來、俄然衆望を失し、尾崎鳩山等の脱奔當時よりも反響が強かつた。

◎一度は全院委員長にもなつて見たが、薩張働がないので、政友會でもチト持餘しの體だ。勢此に至れば、彼も大人しく赤門の奥殿に潜んでゐた方が増してあつたらう。

◎然るに此の死馬の骨を買つて再び議員に當選せしめた、金澤人士の寛仁洪度は亦格別のものぢやないか。

◎附焼刃は剝げ易いが、同じ剝げるなら早い方が、彼も人も兩得だらう。

廻舞臺式

東京市會議員 辯論士 角田眞平

◎彼は静岡出身で明治七年上京して沼間守一の玄關番となり、餘力を以て法律を修め、十三年免許代言人の試験を静岡で受けて合格したが、東京では落第した當時田舎では試験が容易であつた彼が出世の楷梯を攀ぶるの敏捷なる一斑を推知すべしである。

◎少壯時代は意氣軒昂で、鷗鳴社の集會などで、時の名士が喋舌合をなす時は、彼も其一員として、滔々懸河の辯を揮つたものだが、羽織は常に主人沼間の借着であつた。

◎大隈の改進黨を組織するや、彼は小野馬場鳩山犬養等の諸名士と雁行して、翱翔したものだ。

◎二十一年彼が東京組合代言會長となり、次で代議士たりし頃は、其運勢の絶頂であつたが、一朝姦通事件で、非難の聲紛起するや、彼忽ち公職を辭して、熱十年竊に熱の褪むるを待ち、應て又代議士となり、市區改正局長となつて活躍してゐる。健忘性の日本人は、之れだから與みし易いて。

◎斯く彼は廻舞臺的に局面轉廻をする巧智を有して、容易に尻ツ尾を押へら

### 長髪と女優

前代議士 辯護士 森

肇

れない蓋し竹冷宗匠として、彼の浮世を茶化すのも亦た廻舞臺の一趣向だらう。

◎娘律子を俳優として、帝國劇場に出演せしめ、自身は唯一人長髪議員として、日比谷の原に異彩を放つてゐたが、何を感じつたか、昨春頃花々しく斷髮式を擧げたものだ。

◎議員として屢々委員會などで、愚にもつかぬ長談議をして、臍茶の種を蒔きし外、何等吾人の耳底に印する程なことを吐かなかつた。又本職の辯護士としても、杳として聞ゆる所はない様だ。

◎即ち知る彼の長髪は、廣告には簡易輕便で、而も最も効力のありしことを、然るに拘はらず、一朝之を斷つて顧みざるは、既に彼が廣告利用の効を奏せるも、の非か。

◎往年均しく辯護士にして、長髪を垂れた流行ッ兒に、高梨哲四郎があつた彼

は江戸ッ兒で直線的な男だったから、一時は中々の評判だった。同じ長髪でも彼は到底高梨には及ばない、高梨は餘り色男となつた爲に今や淪落して見る影もない。

◎彼は愛媛出身で、財を作ることには其郷風として巧だらうから確り禪を占めて高梨の轍を踏まぬ様にするが肝心だ。

### 醫師の山師

金杉病院長 醫學博士 金杉英五郎

◎彼は多少の膽才あり、醫者よりも寧ろ政治家か事業家に適してゐる様に思はる。併し病院經營者には詭向だらうが刀圭を以て肉や血をホジクリ廻すの技師に當れるか什麼かは考物だ。

◎彼は博士では古顔で、夙に伯林の醫科大學にも學び、其頃同業者の少い耳鼻咽喉科を専攻して來たのだから、一時は非常な評判で、門前市をなす位であつた。が追々箔が落ちて、今ちや拙博士の看板となつてゐる。

◎本來霸氣満々たる彼のことから、時々軌道を外れて種々な事に手を出し

ては、餘り香しからぬ噂を洩すことがある。夫の田中光顯對小林孝子の結婚に付ては、彼が幫間的媒介者となつて、其が成立したと云へる如きは、其例の一つである。又彼は一攫萬金を夢みて、相場をやると云ふが之はどうか。

◎彼は篤實なる學者たる能はず、醇朴の醫者たる能はざるだけ、其行爲には奇抜の點も少くない様だ。今舊聞ながら其一二を拾つて、彼が面目の一斑を窺いて見ようか。

◎彼れ昔伯林大學に在學中、一日大學の助手仲間、懇親會を開いた。聽て演説も濟み愈々飲む喰ふの一段になり、偶隣席の一助手が、麥酒の醜れたるを見て、直に彼の所爲なりとし、大に小言を並べ出した。然るに彼は實際醜れたのである。いからナニ馬鹿な言を吐くな、この筈棒奴と一番日本語で啖呵を切つた。彼も對手も之を侮辱されたものと心得て、ワイ／＼喰つて掛つて來た。ソコで彼も勘忍袋の緒が切れて、卒然皿を投げる。麥酒罎を擲けると云ふ騒で、一座總立となつた。が前席の連中、其は金杉の醜したのでなく、對手の助手の行つたのだと證言して呉れたので、彼は却て面目を施し、對手は居堪らずして、狐鼠／＼

と遁げ歸つた。

◎宴撒して彼は酔歩蹠蹠として歸途に上ると途上十二三名の青年は彼を擁して曰く君はドクトル金杉ならずやと彼れ何の氣も付かず其然るを答ふると彼等は異口同音に先刻の宴席にて彼が主人を侮辱せるを詰り、主人の敵だ覺悟せよと計り棒を打振り拳を固めて彼を擲殺さんする勢だ流石の彼も之には避易して忽ち言を柔げて曰く殺されるものなら立派に殺して貰ふ併し茲に二百馬克あるからドーか之を以て此場合の事を本國に打電して貰ひたいと固より一杯飲まされて彼を擲りに來たので殺に來たのでないから二百馬克の聲を聞くと共に彼等の態度一變し殺す處でなく俄に曩の喧嘩對手の主人を喚來り其金で仲直の宴を開いたとのことだ。

◎之も其時代の事だ一日彼の下宿に荒木寅三郎(士博)が訪問して來た生憎彼は留守なので仕方なしに彼の寢臺に潜込んで寢待をしてゐる間に彼は歸つて來るご馳走も受けたが大分遅くなつたので一つ寢臺で一枚の毛布を引張り合つて翌日は朝寢坊をきめ込んでゐると突然大學教授の某が訪ねて來た彼

は其人とも思はず慌てゝ服をつけ寢惚目を磨りながら内より戸を開けば例の教授だから益々小さくなりて應對してゐると寢床にある荒木は顔を見せまいと思つて毛布に頭を潜らせる其潜らせる度にお尻の方が現はれる而も肉つき佳くして色白だから全然若い婦人の様であるソコデ教授もチロく助兵衛目尻をなして之を偷み見てゐたが聽て教授は別を告げ彼等も亦相別れたが其れからと云ふものは同學生が彼に會ふ毎に皆お樂みの一語を浴せかけた相だが彼の多情にして斯道には一種怪腕を有することゝて荒木は鯉魚節のお役で實際裸美人を擁してゐたかも知れない。

◎近來は金も出来るし名も賣れて來たから逐鹿界にでも飛出し相に云はれもすれば又本人も色氣がないでもなからうが矢張餅屋は餅屋で通したが宜いドー今頃から飛出しても陣笠に少く毛の生えた位なものにしかかなれないせ野翳間と相場の副業で世を茶化すのが一番呑氣だよ。

迎合主義 牧師海老名正

◎筑後柳川の産で同志社出身である。學校教師、教會牧師として各地を轉々し、今は東京本郷教會の牛耳を執り、傍ら雑誌新人及新女界を主宰してゐる。

◎基督教に於ける彼の位置は、兎角の評はあるも第一流で、學問辯論共に人を魅するに足るものがある。

◎彼は曾て基督教は世界的宗教にして國家主義にあらすとし、夫の教育勸語に準據せる國家主義者と盛に論難駁撃せしこともあつたが、其後今日に至るや、豹變して國家魂なる神祕説を振廻はし、諄々として忠君愛國を説き、準國教たらんとしてゐる。

◎彼の時勢に迎合し、人氣取に鋭敏なるの點は、是が最も克く説明してゐるぢやないか、學者宗教家の主張が、時勢に由つて斯く變轉する様では仕方がない。

◎理想に生き、主義に殉する宗教家が、唯自家の利害得失を打算して掛る様では話せない。彼等は何時でも十字架の上に安眠し、何物を敵とするも、屈せない處の大精神がなくてはならん。誰が何をなすも、迎合主義じや、到底大事は遂げられないよ。

赤チヨツキ 代議士藏原惟廓

◎彼は下院に於ける矢尻黨の一人として、其名を知らる彼が賣ものとしては、曰く赤チヨツキ、曰く貧乏、曰くドクトル、オフ、フイロソフイー、曰く怒號的矢尻等であらう。而して此特色ある彼が、今次東京市の逐鹿戰に、第二位の高點を以て當選したるは、聊か不可思議の様だが、其處に彼の面目が十分に見える。

◎彼は熊本出身で、英米に遊學し、歸朝後久しく學校教員となり、且つ教育會の幹事をしてゐたが、畢竟神聖なる育英事業に適する様な柄でない。何處迄も飛上り、勿返ると云ふ方だから、マ一議員などが最も似合つてゐるだらう。

◎彼が議員となつたのは、去る四十一年で、貧乏と拜倒して、江戸つ兒のご機嫌に、適つて當選し、爾來議院の開會毎に、赤チヨツキで苦肉の矢尻をなし、殊に昨年、は對寺内のゾウバラ問題で、怪我の功名をなし、大に人氣を取つたものだから、而して本年彼の候補戰に臨むや、例の貧乏を標榜しながら、巧に黄白を振舞き、一方には盛に舌を鼓して、當局の施政を罵倒しつゝ、能く選舉民の歡心を求め、遂

に大勝を博した工合は遺憾なく熊本式を發揮したものだ。  
 ◎貧乏を標榜しながら彼が今回の選挙費は二萬餘圓を要したと云ふから餘り貧乏でもないじやないか彼の妻は博士北里柴三郎の妹だから其等の彈藥は或はその尻の光で調達されたかも知れぬ見掛によらぬ如才ない男じやて。  
 ◎彼れ議場の高壇に立つや招猫の手振をなして喋り出したら千言萬語出るはく、迷泉の盡きざる如しであるだが何を云つてるやら薩張り要領を得ない恐くば本人も譯るまい彼の演説は自家廣告が九分九厘で正味は残る一分である而も江戸つ兒の善く彼を買つてやる所が面白い廣告の効目は靦面なものだ。

虚榮の塊 前代議士 松本君平

◎彼は望月竹越と併せて灰殻三幅對の一人である其一舉一動誠に氣障な男だが腹の小さい小柄巧な質で一寸筆も達てばお喋舌もする。  
 ◎例に由つて履歷調をすれば彼は静岡縣一平民の子で當年四十三でふ男盛

である曾て米國に遊んで財敗經濟を研究し米國博士號を買つて來たと云ふのが其鼻目鏡と共に彼が唯一の財産である。  
 ◎其妻は男爵岡内重俊の三女で妹は伯爵板垣退助の長男銚太郎の妻であるがハイカラー即ち詳しく説けば虚榮の塊とも云ふべき彼が眼には其伯男の爵位に對して隨喜の涙を溢してゐるかも知れぬ之に反して銚太郎の嚴父退助の頻に一代華族論を唱へてる處を見ると人心も亦た千差萬別である。  
 ◎彼は米國より歸朝後東京新聞主幹東京日々客員大日本雜誌主幹等たりしが去三十年伊藤公に隨行して歐洲に遊び其後東京政治學校を起して校長たりしが久しからずして廢校し二回程衆議院議員に當選し本年の總選挙には僅に六票の差を以て尾崎元次郎に敗られた彼の遺憾は察するに餘りありだ。  
 ◎兩三年來彼はチャイナタイムスに筆を執り大に清國事情を研究してゐる様であるが未だ一向目立つた話も耳にせぬ唯昨年來の革命騒で彼も調子づき北京に乗込んで堂々たる邸宅を構へ込んだで彼を知れる本國よりの新渡清者はみな彼の羽振よきに驚いたものだ而も其實は清國某大官の持ものを無



料拜借といふ譯だつた相だ。

◎彼れ某處に意中の佳人があるで平生の灰殻に走をかけて天晴の色男となり時々見参に及ぶが佳人も其氣障さ加減に中てられて首を横に振る計りでなく、ドシ／＼肱鐵砲を見舞ふとの評判である灰殻も亦た苦しい哉だ。

◎今の下院議員で、彼位に學問あり辯舌あるものは澤山ないのだから、少しく顧みて美人に惚れられる秘訣でも研究したら、獨り女のみならず男にも惚れられる様になるだらう。藏原惟廓は矢張り外國仕込の灰殻だが、能く其等の呼吸を修業したものと見え、大に江戸ッ兒の人氣を集め、目凄しき高點を以て議員に當選したではないか。天下の三ハイカラーとも云はるゝ君平先生だ。今一番の工夫を要せば、藏原輩に劣りはすまい。矧や田舎議員の競争は高の知れたものだ。

◎彼の貧乏は有名なものだが、貧乏だからとて彼は毫も其を意とせない。だが偶には大に困ることもある。而して其灰殻仲間の望小太より屢々兵糧を割愛し來るを聞く之を我利々々亡者連の單に愆との相談上よりするものに見れ

ば亦た柄にない美談ぢやないか。

之でも色男だ

衆議院議員 松田源治

◎一兩年前静岡で演說中、其演說振に見染められて戀婿様となつた。能く能く拜見すると、お顔の造作は北向の鬼瓦式でお喋り工合は破鐘式野次馬流だが、げに世の中は夢喰ふ蟲の好き／＼さ。

◎議會でも天眼蒙古等と竝んで、時々突拍子な饒舌を揮ふが、まだ一向重味もなければ、情味もない。而して彼れ當年三十八と云ふからには、前途も頗る遠

だ。是れから追々稱氣を去つて、大人學に就いたが宜い。◎瘠せても枯れても辯護士だけに、議院で法律問題が出ると何時も出酒張るが、まだ鵜澤や花井の足許にも寄付けないで、始終擲論されてゐるのは氣の毒

だ。◎大分縣出身で、蠻氣は充分にある。後藤寺内等の官僚の親玉連を友人扱にして、天下の豪傑は獨り乃公あるを氣取つてゐる處が可愛らしい。多分新妻も此

邊に參つたものだらうテ

### 五十未だ家を成さず

衆議院議員 添田飛雄太郎

◎北日本の秋田は山多く地瘠せ且つ互寒なる天然の地氣を稟けて陰鬱險惡の氣風がある然るに彼れ添田は齊しく秋田の産ながら襟懷洒落で意氣猛盛政界の鬪士としては格好の材だ。

◎曩に木の謙一派が犬養誠首を企つるや彼等は敵陣に不意の逆襲を試みて奇功を奏したことがあるだが彼の人格には猶大に鍛鍊を要する譬へば彼は薪割斧で柱櫃を削るには今一段と犀利ならねばならぬ。

◎彼は後藤新平とは極めて昵懇で時々薪水の料を絞る故に一部よりは準官僚の噂もあるだが彼の貧は洗ふが如しで五十未だ家を成さざるの境遇だから亦憐むべしである。

◎彼れ曾て歐洲に遊び文明の空氣に厭きしに拘はらず他の望小太や三義と

選を異にし他くまで東洋式の蠻骨を逞しくする所が面白い願はくば好漢死に至る迄其骨法を喪ふ可からずだ。

### 羊皮狼質 支那人松本龜太郎

◎支那通の一人として松本龜太郎は知る人ぞ知る一種の變ものである臺灣占有當時彼は疾くも其將來に囑望し先づ臺北廳の土地係として官吏の眞似をして見たが本來無慾の外貌を有して内容は名利の慾火に填されてゐる男だから在職中地理物産に關しては割合に緻密なる研究をしてゐたで機熟すると共に官を罷めて泡沫錢の攫取を始めたが何ガサテ土人を脅喝して綠林の雄を眞似たとかの嫌疑を受け未決檻の人となつたこともある相だ。

◎其前から北投の温泉に注目してゐたが遂に之を占有し同時に子持の狎妓を山の神に祭込めて温泉營業も漸次繁昌し一時は別に臺北にも店舗を有してゐたが此男の短所として永く同じ業に従事する能はず八方に蛇の手を伸ばしたがるので折角捉へたことも忽ち又取遁がして了ふ様になる。

◎日露戦争の始るや、彼が舊知の少佐大原武慶が安東縣の軍政官となつたので、彼は中野次郎其他支那通の豪傑連と共に、彼が帷幄にも参じ、又犬馬の勞をも取つた。随分突飛な行動をなし、上級幹部をして聊喫驚せしめた事もある。

◎彼は大原少佐が昌圖に轉任するに隨行し、又其幕僚となつたが、依然として水滸傳式の計劃を改めず、先づ其軍政管内を出入する馬車に對して、一種の課税を賦して資本要すの儲をやつたが、之は内外の物議の爲に、瞬時にして中止し、次で資本三十萬元位の株式會社を設立し、主として株を其地方人民に募り、會社の目的は昌圖府及昌圖停車場間のトロツク運送と、大豆賣買其他一般の輸送業であつた。此事業は、少くも二ヶ年位は持續した様だが、何時の間にか消滅して、復亦敗亡の歴史を繰返したのである。

◎何時の頃よりか、禪に志し、屢々京都の妙心寺に參籠して、今では本統の野狐禪になつて了つた様だ。何でも昨年頃、彼が波瀾起伏の心機を本として、一書を公にしたが、之は一寸讀めるものだと、其舊友は取沙汰してゐた。

◎往年攫取したる北投温泉をも、瘤付の女房をも抛去り、閑雲野鶴を氣取れる

### 慾張の親玉

大倉組々頭 從五位勳二等 大倉喜八郎

彼は果して其儘に雲鶴化するか、將た亦た本來の多慾主義に足をかけて、俗海に乗出すか、頃者杳として其消息を聞かざれども、早晚天の一方より奇聞を齎し來るであらう。

◎彼は女郎と米搗男の産地たる越後新發田のもので、十八で飛出し、江戸の商家の小僧となり、段々に仕上げて遂に富豪の仲間入をした。

◎土木建築政府上納銃砲彈藥の販賣で奇利を博し、就中戰役の際、礮ヤ砂利を罐詰にし、又は向島の別荘で美人をして當局者を生擒せた、杯は最も有名な談として傳へられてゐる。

◎財は出来るし、美人には厭が來る。是から華族にでもならうといふので、前年桂の口車に載り、濟生會に百萬圓の寄附が、勳章でおつ拂とは口惜しからう。

◎鶴彦と稱し、時々狂句を拈るが、段々素人離がして來たが、多慾のためか、垢抜はしないせ。

# 九 中 毒 性

如何にマニラや葉巻が旨ひからとて、喫み過ぐればニコチン中毒をする、人間萬事凝つては思案に及ばずだが凝らなければ旨いと云ふ迄に至らず凝れば中毒の仲間となる。サテ今の謂ゆる名家名流の殆んど中毒しないものはないから面黒い。

## 文藝と情死

早稲田大學文科部長 坪内雄藏

- ◎ 彼は森鷗外と對立して文壇東西の兩大關である。鷗外の本職は軍醫だが却て文を以て鳴り彼は本來文士で、一指を教育に染めてゐるのだ。
- ◎ 飄逸洒落で文學上の天才湧くが如しであるが神經は甚だ過敏で門下生等も屢々其霹靂に撃たるゝことがある。此種の人に限り愛憎多くして清濁併呑の量なく事をなすには損を招き易い。(吉原松金樓の女郎を妻とすると聞くが猶健在か否を)
- ◎ 文藝協會は彼の最も熱誠を罩めて經營する所で頃者其名聲頓に揚り其製作は帝國劇場に或は中京大阪等に出演して喝采さるゝ迄になつた。
- ◎ 特に彼が過般文部省より受けたる恩賞金(文藝功勞に對して)の幾分を割い

て、物故せる名流文士の遺族に分ち其他は舉げて協會に寄與せしのみならず其邸宅を賣つて又協會の發展に資せしと云ふに至つては眞に感々服々だ。

◎ 唯惜しむらくは協會長として伯大隈を擔上げしを協會の事實上の根幹は彼だ何ぞ無用の長物を排して彼自づから其長とならざるや而して世間は皆既に協會に彼あるを認めて伯を認めないぢやないか

## 内職の本職

陸軍々醫總監 醫學博士文學博士 森林太郎

- ◎ 醫術に於ける彼は何程の造詣あるか果して博士級に入るの價値ありや否や世人の一向に知らざる處だ然れど其進んで陸軍省醫務局長として小池正直の跡を襲ふに至つて彼は單に刀圭家たるのみならず醫政に於て亦た群を抜けることが知らるゝ。
- ◎ 若夫れ彼の獨逸文學に獨創の機軸を有することは海内獨歩だ彼が劇務の傍に筆を執り時々上梓する處の翻案ものは輕妙老熟で一誦三嘆のみならずである。

◎彼は早稲田の坪内逍遙と相併んで、文壇兩大關の位置にゐるが、其頭腦の秩序的で理論精透なるは、彼れ逍遙に勝り、文藻の飄蕩奇峭で、情致の熱烈なるは、逍遙彼に勝る。是れ彼の醫政に任じて遺算なく逍遙の文藝協會の發展に熱狂する所以であらう。

◎彼れ洪度とはゆかぬも、多少人を容るゝの量あり。故高山樗牛や齋藤綠雨の如き我儘ものをも、克く誘掖し、克く推輓したので、も知れる。兎も角餘人の一生、汲々として一博士ともなり得ざるに、彼は二個の冠冕を得る其れだけでも偉とせねばなるまい。

### 漢學界唯一の老儒

東宮侍講 文學博士 三島中洲

◎近年川田根本、重野等の漢學博士が、相繼いで易簧したので、今は斯道の大家としては、獨り三島中洲を存するのみである。

◎彼は岡山出身で、山田方谷の門人だ。最初陽明を研究し、後自家の工夫を以て折衷説を唱へ、朱洛の學にも精通してゐるが、經學よりも寧ろ文章に練達し、今は

碑銘などを草せんには、海内彼の右に出づるものはなからう。

◎二松學舎は彼が明治の初に創立せる所で、學舎は誠に古くて汚いが、彼は四十年來、此にありて門生に經義文章を講じ、敢て懈るなしと云ふのだから、豪勢なものだ。

◎井上哲二郎、福島安正、其他有名無名の徒を出すこと、幾千人破れ學舎も亦た光榮とするに足る。

◎男三名あるが、皆愚息だ。到底彼に若くものはない。彼は學者で、貨殖の道にも通じ、今や資産十數萬に達し、又學舎の基本金も積んで四五萬に上ると云へば、先づ以て後顧の患なしだ。

◎當年八十有餘、一儒生を以て天子の師となり、且數千の門下を出して、社會百方面に活動しつゝあるを見、此點は漢學者としては、マー大成功の方だ。

### 地理の詩的研究

農學士 志賀重昂

◎彼は古い農學士だが、一向農學のことはやらないで、一時政教社に入り、盛に

政治論などを捏廻はしたものだ。今では地理の研究に腐心し、此方の著作は、少からず世にも歓迎せられ、本人亦た甚だご得意な様だが、彼の地理は詩的研究で、趣味専門な方だ。

◎漢詩は、矧川の號を以て、夙に同人間に持囃されてるが、其格調輕快坦蕩にして、行雲流水に接する様な感がある。蓋し彼は旅行好きで、年の半は旅程にあると云ふ位だから、其よりして一種の格調を練出したものであらう。

◎骨董道樂な方だが、尋常の高價を誇る、書畫陶磁器の類でなくて、彼の蒐集する所は、文明東漸を紀念するに足るもの計である。例之は、葡萄牙、西班牙、和蘭の文明が、什麼いふ感化を日本に與へたかと云ふ様な其證據となるもので、之に關するものなれば、片翰斷墨も百里を遠しとせずして、之を漁るので、今や彼が家は、其等の材料を以て埋められん計だ相だ。

◎此他彼は、世界各地の珍珠を集むるの道樂があつて、時々同人を其邸に招いて宴を張る而して、先づ風變りの古物で目を驚し、次で味變りの珍品で腹の蟲を駭かすのである。

◎頃者中央亞細亞地方の探検を企て、先づ其費用として、少くも二三萬圓を得んが爲に、熱心に世界寫真帖の發刊をやつてる様だが、他の探検者の多くが探検費を公衆より募るか、或は物好の富豪に出資せしむるの常なるに、彼の獨力之を辨せんとする勇氣は、亦た珍とするに足るではないか。

### 博士返還

東京朝日新聞記者 夏目金之助

◎彼れ漱石は、文部省より與へたる文學博士號を返還して受けなかつたと云ふので、時人は頗る奇異の眼を以て彼を見たものだ。

◎是より先彼は、文部留學生として英國に差遣せらる。其目的は、専ら英語英文を研究するにあつたのだが、彼は之を努めず、唯下宿屋にあつて、古今文豪の書を耽讀して歸つたので、文部の氣受甚だ宜しからず、爾來薄給の講師として冷遇されたものだ。

◎我輩は猫であるの一著は、彼が此際に於ける不平を寫せるもので、彼は此著以來、其名顯聞すると共に、大阪朝日は彼を聘するに、年俸三千圓を以てした。

◎彼の赴任に際し、學長坪井博士は之を留めたが、彼の聴かざるを見て怒て曰く、去るは勝手だが、永劫に博士たることは出来ないと。

◎彼の之を含むこと蛇の如く、當年の冷遇、今猶腦裡を去る能はず。故に偶博士號を與へらるゝを突返したのであるが、聞いて見れば愚の骨頂だ。彼は何處迄も、執拗と銜氣とに包擁された男だ哩。

篤學と剛骨  
京都帝國大學文科大學長 狩野亨吉

◎篤學で剛骨なること、京大文科の博士狩野亨吉の如きは、博士中の珍である。彼れ當年四十八だから、ソロ／＼老境に入りかけたのだが、彼にあつては、并は肉體上に現はるゝ皺の數と見るのみで、彼が心の進境は、寸時も休む時なく、殊に其讀書に對する嗜好の強烈なることは、三十前後の壯年の様だ。故に彼が心的壽命は何時迄経つても老いざるものと云ふべし。

◎彼の藏書は數萬卷で、彼は平生斯間に起臥して、友を千古の上に尙び思ひ、天地の外に潜め、亦た富貴利達の何物たるやを知らざるものゝ如しである。這麼

な趣味を有する人は、少しにても意を枉げ又は異趣味のものに調和の出来ないもので、他の鴻儒博雅にも偶々この類の人があるが、彼も其轍を蹈み、今猶獨身生活を續けてる相だ。

◎彼が小學時代より、大學卒業迄譽を並べて進んだる學友に二俊兒がある。一は前文部次官澤柳政太郎、一は博士上田萬年である。是等三俊は、少時より學績優秀で、常に其級の首位を争ふて相進んだが、業卒へて世に立つも、其位置亦た相伯仲して、各學界の一角に雄視してゐる。

◎但篤學の點よりして之を視なば、彼れ狩野は三俊中の唯一人だらう。大學の工科を首席で出ると同時に、又文科の一年級に舞戻つて、屹々と研究を積み、遂に文學博士たる迄に學んで倦む所を知らず、且つ曾て久しく金澤、熊本等の高等學校の平教授たりしが、是等位置の高下などには目も呉れず、彼は其職にあれば、唯其職責に任じて奮闘し、叱咤し鞭撻するの外、何ものをも顧みない。而して、這は彼が一高の長たり、京大文科の長たる現在に至る迄、毫も變らぬ所である。

◎彼に一の痛快談がある、彼は彼が一高の長たりし時だが、博士鳩山和夫の長男一郎が入學して來たので、彼は當時同校が勵行せる自治寮へ寄宿を命じた。處が灰殻黨の女將軍春子夫人は、這は怪からん言條であると、早速狩野校長を叩いて曰く、我家庭は不取締なる學校寄宿舎など、は譯が違ふから、愛兒をして左様な書生仲間、に投せしむる事は、免だと計り、嗚々喋々數千百言懸河の如くに、幕しかけたが、彼は冷に之を聞流しつゝ、ヤオラ其語の了るを待つて、嚴に宣して曰く、學校の規則は一人の爲に、托ぐる譯には行かぬ、否なれば入學せられぬ迄のことであると、鐵の如き一言、流石の春子も二の句が次けず、其儘悄悄として引揚げた相である。少々筋は違ふが、恰も學習院に於ける、乃木將軍と下田歌子、而して彼と春子夫人、又た好箇喜劇の一對ではあるまいか。

◎今の博士連の滔々として、勢に媚び利に殉するの徒多きが、中に彼の獨り巖頭に老松を觀るが如く、卓然挺立の觀あるは、誠に斯道の爲に、痛快を覺ゆる、彼が如き奇行は、續々連發さしたいものだ。

### 雪隠主義 帝國大學教授 松村任三

◎彼は有名な植物研究家で、其研究の爲には家をも我をも忘れる計りで、一種の植物狂と云はれ、云ふべしである。

◎小石川植物園内に、時を構へ、大學に講義に出掛くるの外は、何時も此處にありて、其研究に夢中である。往昔武田信玄は、長雪隠で有名なもので、軍機政略一に雪隠の裡で割出したものだ、故に信玄の爲た事は、綺麗でなかつた、然るに不思議にも、彼れ任三博士、糞の臭いのを臭と思はず、雪隠工夫が大の好で、日々講義の筋道乃至前夜來の研究上の疑問等、皆其裡で解決するのだ、が彼のは一向臭氣がないとのことだ、是れ恐くは四時咲き匂へる、園内の花の香に混化されるのであらう。

◎彼は夏が厭ひだ、暑くて思ふ様に勉強が出来ぬからだ、那麼なだから、一たび研究を始めると、寝ることも食ふことも、其他一切萬事抛却の體だが、是でなくては、大博士にはなれまいよ。



獨學博士 京都帝國大學教授 內藤虎次郎

◎今様の漢學者で、特に明清の事に精通してゐる。曾て萬朝に大阪朝日に記者として筆を執りしが、社會萬般の消息にも通じてゐる。

◎彼れ曾て幾たびか支那大陸を遊歴し、山嶽河川郡邑人物風俗等を明にし、支那問題の起る毎に彼の穩健なる意見は新聞雜誌に争ふて掲げられてゐる。

◎軀幹短小にして顔色黒く、薩張風采の揚らぬ男だ。容貌だけでは印刷屋の校正係位の値しかなない。

◎學校教育は、取立て、何處で受けたと云ふ程の事は、ない。全くの獨學で博士迄漕付けたのだ。此點は恰も幸田露伴に似た處がある。

◎彼が會心の書を讀むや、夜徹し食を忘るゝのが常で、必ず其要を記し、其旨を究盡せねば休まぬ。彼は即ち終生學を廢せぬ篤學者である。

◎當年猶四十四五だ、珍籍を以て其室を填たし、其間に兀座耽讀するのが、無上の樂で、他に何等の趣味もない様だが、今後の造詣は蓋し測る可からざるものありだ。

時是れ金 辯護士 増島六一郎

◎パリストル増島六一郎と云へば、あの一時間何圓の先生かと、世に知らるゝ様になつたものだ。彼も昔は中々の蠻殼書生であつた。帝大卒業後、岩崎彌太郎に援けられて、英國に留學し、明治十六年に歸朝し、辯護士として大に名を成し、又盛に金を溜込んだもので、今では數十萬圓の富を作りながら、猶切々と金を得ることのみ腐心してゐる。

◎彼れ天性剛情我慢の男だが、其大學にあるや、常に餓鬼大將を以て任じ、一時退校處分迄喰つたものだ。彼の在學當時は、猶衣肝に到る蠻殼書生の多い時だつたが、其でも硬軟の二派は、何時の世にもあるもので、彼及福岡孝季千頭清臣、城多毓雄は硬派の隊長であつた。某年の天長節に、硬軟數十名相謀つて、瀧の川に紅葉狩をすることゝなつた。時こそご參なれ、軟派の野良久良野郎共を懲らすは、今なりと、一同野天で濁酒と里芋に腹を膨らし、卒や歸途に上らんとする

時彼等は忽ち喧嘩を吹きかけ、撲つ蹴る盛に軟派を苦しめて凱歌を上げたものだが、此事偶時の校長濱尾の耳に入つたので、這は捨て置かれじと早速教授の菊池大麓、外山正一、山川健次郎、服部一三に命じて事情を取調べさせた。其結果前記の四隊長等は、何れも一時退校處分を喰はされた。

◎彼が「パリストル」となつて歸朝後、辯護士の看板をブラ下ぐるや、一時の流行兒となつた。然るに何人を問はず、何用を論せず、一たび彼の事務所に至り、彼と談するや、其人の歸後、彼より其談話時間の長短に従つて、談話料の請求状が来る。之には皆辟易して、一時評判となつた。友人某、彼が爲に其不利を感じ、一日往いて諄々と其得失を説いた。而して歸後兩三日にして、彼より例の請求書が舞込で来た。之には流石の友も開いた口が塞がらなかつた。蓋し暇潰を何とも思はぬ日本人には、此遣口も面白いぢやないか。

技師の上乗なるもの 法學博士 原嘉 道

◎刻下民事事件に於ては、彼の右に出づるものはないとのことだが、彼が法廷

の辯論は常に判官の謹聽する所で、彼の否と断定せるものは、何處に持廻るも敗訴となる相だ。

- ◎彼の法律的頭腦は明鏡の如きもので、微塵秋毫も猶映出さるゝのである。他の狀師連が千思萬考、其繁に苦しめるものも、彼れ之を一瞥すれば、名醫の腫物を切開するか如く、容易に解決する。其妙技神腕は、眞に天賦の然らしむる所だ。
- ◎信濃出身で、妻は博士岡村輝彦の妹である。彼れ元蒲柳の質だが、其攝生の嚴正なるため、健康の人よりも息災だ。昔は解語の花も折たが、今は聞かない。
- ◎一昨年歐羅巴に遊んで、法曹上の新知識を加へ、歸來東京辯護士會長となり、聲名隆々、満月の如しである。
- ◎温厚篤實の君子人で、其人となりは何處となく、故菊池武夫に彷彿たる所がある。而して年齢猶四十五六だから、其學徳是より益々圓熟するだらう。

語學の恩人 貴族院議員 男爵 神田乃武

◎其品性の高雅にして、學力の優秀なること、蓋し我語學界の第一人である。マ

スター、オブ、アーツなどの肩書を有する學者には碌々日本語、日本文の出來ないのが多い。好し亦た其が出來ても、人格劣汚で、お話にならぬものがある。此點に於て彼は完璧である。

◎江戸ッ兒で、故男神田孝平の嗣となり、幼より米國に留學したものである。彼の歸朝せし頃は、我が英語熱の漸く奔騰せんとする頃であつたが、當時の英語は不規則無鐵砲で、當方で喋つても、肝心の對手の方で譯らなかつた。

◎然るを彼は讀方譯解の正法を開き、且つ特に自家獨創のリーダーグラマ―を編述して之を公にし、非常の貢獻をしたのである。

◎先年彼は高等商業學校及外國語學校の校長と教授を兼ねたことがあるが、彼は常に語學の大家たるのみならず、學校經營にも多少の手腕を有してゐる。

### 學海の一和尚 廣島高等師範學校長 北條時敬

◎彼は教育界の名物界で、金澤出身である。二三の學校長を経今や廣島高等師範學校長として頗る令聞がある。

◎現内務省神社局長井上友一、外務次官倉知鐵吉、博士清水澄等は、彼が提擧せる徒輩中の俊才である。往年金澤に於て雪門和尚に禪を學び、後鎌倉にて今北洪川に就き更に妙境に入り、禪臭くない様になつた釋宗演の如きは彼の相弟子だ相だ。

◎廣島は風俗類敗の傾ある處だが、彼の赴任以來校風振肅し、殊に教授學生間の情誼亦た極めて圓熟し、彼の人格は年々和光同塵の徳化を反映せしむる様になつた。

◎平生極めて嚴格で、借家を求むるにも、着袴せざれば出掛けぬと云ふ風だが、其一面は頗る風流洒落で、園基、謠曲、書畫、骨董を愛し、且つ手に巻を捨てぬと云ふ讀書家である。

### 奇骨稜々 京都高等工藝學校長 中澤岩太

◎彼は京都帝國大學創業の功勞者中、木下廣次に亞ぐもので、當時理工科の長と教授を兼ねて、其勢力は總長を凌いだものだ。

◎後諸種の事情の下に京大を退いて京都高等工藝學校長に轉じた彼は一見羅漢然として木強な風だが、案外に能く捌けて、一校を悦服せしむるの手腕と徳を備へてゐる。

◎壯時より故品川彌二郎の崇拜家であつただけ、萬事彌二式に頗る熱誠で、又任侠な處がある。曾て部下の一教授其婢と通じ、醜聲を洩らしたが、彼は青春の熱情止む能はざるの過として之を不問に付したことがある。此の如く弱者を困むることは大の嫌で、偶他より情を訴へて泣付かるゝ時は、我衣を脱いで之に與へ、又苟も強者の權力を以て壓せらるゝ時は、死を賭して之を争ふと云ふのだから、随つて敵もあるが腹心の乾兒もある。

◎曾て京大の運動會に時間勵行を標榜し、且つ代人の出席者は之を式場に列せしめずして別室に控へしむると云ふ案内状を出した而して開會と共にドシ／＼之を實行した偶時の滋賀縣知事河島醇がやつて來たが五分間遅れたと云ふので門を閉して入れなかつた、音に聞えし剛情一轍の醇も之には閉口して退却した。

◎此の如く一旦やり出したら、是が非でもやり貫くのだから、随分毀譽褒貶も多いが、彼は那麼なことには一切頓着しない。石川縣出身で、亦た教育界の一珍だ。

◎彼の玄關番より成上りたるものに、京大教授醫博中西龜太郎、工博日比忠彦、醫博平井航太郎、理學士比企忠などがゐる。妻の楠緒子と共に書生好で、今猶續いて其養成をやつてゐる相だ。

剛情即ち克己 洋書家 中村不折

◎日本第一流の洋書家中村不折は、幼より非常な刻苦勉勵して、其業を成せるもので、其行逕は青年の龜鑑とするに足るのだ。

◎信州の田舎もので、家貧しかりしたため、獨學で文字を覺へ、聽て學校教師となり、數年にして三十餘圓を貯へ、之を携へ飄然東上し、先づ小山正太郎の門に入り、常人の企及ばざる節儉勉勵をなし、其技大に進んで來た。

◎正岡子規其凡骨ならざるを知り、之を日本新聞に侷めたが、其挿畫の奇拔高

逸なるため忽ち名を博し、日清戦争には筆を載せて従軍し、歸來佛國に留學すること滿四年半、何人とも交はらず、一意其道を研究し、遂に巴里の競技で金牌一等賞を得た。

◎彼は此他墨畫をも、六朝式の書をも善くし、今や儼然たる大家となり、容易に他の揮毫の求にも應せぬ迄になつた。

◎殆ど豊で類のない剛情ものだ、故に一旦斯と決心したる以上、山岳崩るゝも、動かぬと云ふ風だから、随つて克己心も非常に強く、遂に藝術の大家となつたので、彼の行逕は頗る面白いが、茲に其大略を録するに止む。

### 發明の偉勳 工學博士 下瀬雅允

◎日露戰役に我陸海軍の大捷は、種々の素因もあらうが、就中其砲彈爆發力の偉大なりしは、天下の認むる所で、同時に其爆發發明の下瀬雅允の功績は、優に一城を拔き一艦を覆すもの以上に値する。

◎彼は廣島市の産だが、幼より嬉戲するに群童と異なり、常に一室に籠つて小

細工などに耽けつたものだ。

◎明治十七年工學士となり、初め印刷局の技師となり、一種のインキを發明し、容易に紙幣の眞贋を見分くるを得、多大の便利を與へた。次で海軍省技師となり、我火藥の不完全なるを慨して、潜心研究し、遂に一種強烈なるものを發明した。下瀬火藥は即ち是である。

◎彼は温良恭謙の君子で、決して自家の發明を誇らず、之を以て研究工夫の初步とし、猶屹々として倦まないのである。

◎其實際の功績よりせば、賞するに男爵を與ふるも可なりだが、當路者の偏屈なる、ソも行り切れなかつたが、彼とても恩賞に野心もなかつたらうと思はるゝ、又其でなくては偉い發明家にはなれない。

### 語學成金 正則英語學校長 齋藤秀三郎

◎英語學に老熟して、英語教育に功勞多きこと、神田乃武と伯仲の間にある。而して彼は最も文典に精しく、一時彼の文典といへば、海内の青年を風靡したも

のだ。

◎彼は語學の天才を有し、加之に可驚精力を以て學校の經營より教授其他語學書類の編纂等に盡くし、今では立派な成功者の一に居る。

◎然れども彼は人格下劣で、唯金を作り金を積むことにのみ齷齪して、人材の育成、家庭の清穆を期せず、屢々柳暗花明の巷に醜塊を擁し、醜聲を洩すのである。

◎彼れ富既に巨萬を重ねるも、紳士たるの資格を缺き、單頭腦冷明、乾燥の理窟を伸ぶるに適し、人を以て云へば猶太か支那人か、能力を以てすれば、蓄音機以上に出でない。語學界に於ける一代の耆宿が、然りと雖亦た情ない話じやないか。

◎聞く彼曾て大學講師たりしも、其人格の餘りに冷酷下劣なりしたため、大に學生の批難を受け、遂に一人の聽者なく、自然退職の止むなきに至つたと、麴町五番町には宏壯なる住宅を有し、出入驪馬に鞭うつと云ふ勢だが、其が學生の懷を絞つて出來上つたのだから、心細いテ。

### 義太夫の大關

竹本越路太夫事 攝津大津

◎大阪名物の俳優と義太夫では、東京も敵はぬ程だが、就中越路即ち攝津大津の義太とよきは、眞に天下一品の妙を極めてゐる。

◎然れば曾て故小松大宮殿下も、彼が妙技を太く感じ給ひて、特に攝津大津の名と、素袍及烏帽子を賜はつた程である。

◎此名人の生立を討ぬるに、本名を二見金助といひ、天保七年の大阪生で、五歳の時、大工の棟梁二見伊八に養はれしが、養父が頗る義太夫好なるため、彼も幼少より之を習ひしに、天成の美音に加ふるに、音曲の鬼才あり、ズン／＼上達して、大工の本職は、其處除となつた。

◎應て三代目野澤吉兵衛、五代目春太夫等の門に學び、師をして舌を巻かしめ、其より南部太夫、越路太夫、住太夫、春太夫等の名を襲ぎ、東京は勿論諸國の名邑、大市を廻り、遂に日本第一の名聲を博したものだ。

◎彼の義太夫に於けるは、天賦の優越なること云ふ迄もないが、其習練に熱心

で品行方正且つ温良寡慾にして、深く先師を敬ひ門生を感む等名人として、藝道の儀表たる資質を備へてゐる。

### 乞食藝の革命 軍談師美當一調

◎熊本の美當一調と云へば、最新派の軍談師として有名なものだ。特に其家柄が、五百石頂戴せる細川藩士尾藤家の嫡々といふので、一入注目を惹いたものだ。

◎一體才子肌の男で、弓馬刀槍一通の武技にも通じ、四角な文字も讀めるから、維新滄桑の風雲に、旨く乗つてゐたらば、官吏としても相當な地歩を占めてゐるだらうが、生得音曲が好で、少時より三絃に堪能であつたので、維新の際常備隊員として東京にあり、偶武張つたる同士間の宴席などで、其習熟せる秘技を演じて、並居る藝妓等をして驚嘆せしめたことがある。

◎西南の役には、西郷黨に關係でもしてゐたと見へて、長崎の獄裡に數年繋がれたが、出獄後彼が處世の方針として、新機軸を出して世道人心に裨益し様と

決心した。茲に於て彼が天稟の美音と得意の三絃を利用して、浪花節に軍談を加味し、更に新奇の曲調を付して、習練幾年遂に一種絶妙の技として、大に世上に歡迎さるゝ様になつた。

◎彼が演藝師として世に立つや、頑固一點張の郷里の丁髷連は大に憤慨して、彼を座敷牢に入れるだの、一家一門の義絶をするだの、随分騒いだものだが、彼は毫も意に留めず、ドシ／＼其目的に向つて、猛進し遂に之を以て成功し、今では十數萬の財を作りて、堂々と郷里に構へ時々上京して錦輝館などで聴衆を唸らせ、又某々貴顯の館へ出入して得意の舌を弄してゐる。

◎彼がこの新藝で最も克く喝采を博したのは、日清戦争の事實談を、其當時に奏演したのである。實際其頃彼の評判は非常なもので、八方より引張風となり、而も何處に往つても、人の山を以て迎へられたものだ。彼に次で桃中軒雲右衛門だの、奈良丸だの新派の人氣ものも出て來たが、兎も角も、彼は乞食藝をして、座敷藝に位を上げしめた、藝道の恩人である。

◎彼は一時筑前の川上薩摩の治助琵琶と共に、九州藝人の三幅對であつた。

### 武士道鼓吹

浪花節革新の祖 桃中軒雲右衛門

◎岡本峰吉の雲右衛門其前半は言ふに忍びざる醜行漢だが曾て久しく蔑視されたる浪花節をして紳士の前で唸れる様にしたのは彼である。

◎否な彼を奨励し鞭撻して武士道鼓吹をやつたのは頭山満と警保局長の古賀廉造である彼れ何程藝才あり美音を有するも兩者の援護なくんば矢張りデロレン祭文に葬られてゐたらう。

◎頃者奈良丸其他大分新派が輩出して種々の節廻を工夫して來たが莊重豪快の點に於て彼に及ぶものは一人もない彼が威儀を繕ひ内藏の助の義を語り義央の醜を罵る時は幾千の聽衆を一枚の舌に捲き恍惚として我を忘れしむるの妙がある。

◎近來蓄音器の流行と共に各種の音曲を譜にするに方り大抵の藝人が端た金にて吹込をなすに獨り彼は容易に應せざりしも數度の懇談黙し難く遂に一萬五千圓の報酬にて例の義士傳を吹込んだ相だが之にて彼が自重の點も

知らるゝ。

### 學海の舵手

(一)

◎山路愛山は舊幕臣の家に生れ天文數學を以て世々仕官したものだ。家計不如意にして少時碌々學校教育をも受けることが出来なかつた然れど天性篤學の質で天才特に秀で成年の頃には既に立派なる文士となり先づ國民の友にて初陣の名を成し次で維新史を編纂し又信濃毎日に主筆となり或は獨立評論を出し或は大坂日報に入り其傍主として歴史人物に關する著作を發表し今や専ら國民雜誌の編纂に當つてゐるが猶餘力を以て時々雄篇大著を試みてゐる其文章極めて平易にして學力識見亦た優に現今の天ぶら博士を凌駕し既に嚴然たる文壇の老將である。

◎辻新次は帝國教育會長として學問元老の一人だが其性格は鄙吝迎合で常に文部のご用を力め一方に貨殖に汲々とし現に仁壽生命保險の社長伊那電鐵の重役たり其富は實に學界の雄である彼の面は痘痕で掩はれ知らぬ小供



は泣出し相だが其心状もドーヤラ一致して居る様だ。  
◎久保田讓は但馬の産で一度文相となりしが戸水事件で法科教授團の攻撃に耐へずして辭職し爾來上院議員として屢々氣焰を揚げてゐるが今や閣外の教育ゴロとして敬遠されて居る方だ。

◎加藤弘之は大學を根據とし常に非常識の議論を捏廻し時々揚足を取らるることもあるが山縣に姻戚關係あり案外我儘が利ける左れども元來學者肌で經營も事務も不適任だ矢張天則博士として横紙破が最も似合つてゐる。

◎濱尾新は一度文相となつたが伴食たること僅に一年で何の見るべきものはなかつた然れ共大學總長としては能く校務を整理し教授學生を悦服せしめ容易に得難い器である彼は但馬豊岡の藩士で明治初年に山川等と米國に留學し歸來四十年間常に文部と大學に奉職してゐたのだから其元老たるは當然の事だ且つ要領は得難いが寛厚の長者で衆に長たるの人物である。

◎上田萬年は文科大學教授だが曾て文相樺山時代に澤柳と共に抜かれて文部の學務局長となつたことがある學問上の彼の眞價は怪しいものだが中々俗

才に長けて世渡は上手だ其局長たり又外國語學校長たる時も何時も大學教授の地は離れない何れ一度は文科の長となるだらう彼は又案外の風流兒で時々隠れて解語の花も手折るらしいが容易に尻ツ尾は出さないテ。

(三)

◎澤柳政太郎は信州の男だ第一高等學校長となり文部次官となり又無能なる博士松崎藏之助の後を襲て高等商業の長たり以て騷動の跡始末をなし現に東北大學總長だが其手腕識見侮る可らざる者あり中元老株は確なものだ  
◎岡田良平は弟の一木喜徳郎と共に理窟一點張の男だが一木は眞の學究的で罪のない處がある左れども彼は寧ろ冷酷にして人情を解せず爲に小松原文相の下に次官として毎時も頓珍漢な事のみ紛起さして惡罵嘲笑の裡に葬られて了つた。

◎現文部次官福原鏡二郎は磊落粗放邊幅を修めず障壁を設けず何となく豪傑の風があるが其實頗る神經過敏で足の爪先より頭のギリ／＼までお氣が付くと云ふ風だ即ち虎頭猫肉位なもので彼の同期の赤門卒業生の山座など

に能く肖てゐる。で長谷場の女房役としては最も適任だらう。

◎佐藤昌介は、札幌農學校即今の東北大學農科大學に校長たること三十餘年だ。常に全校の信服を得、其下に幾多の俊才を輩出せしめた彼は米國仕込で、ドクトル、オブ、フィロソフイーの肩書を有してゐる。其温厚で沈着なる點の濱尾型なるだけ羨切らないことも夥しい。

◎新渡戸稻造は第一高等學校長として、生徒間の人氣は中々盛だが、教授間に大分不平の向もある。演説も座談も巧なものだが文章は拙い。英文武士道は、馬鹿げた者だ。先般より餘り外遊が長過るので、學校に不親切の評が高い。蓋し彼は一種の才物には相違ないが、其徳操の點に於ては猶疑問たるを免れない。

(三)

◎嘉納治五郎は高等師範學校長として三たび其任にあり、曾て文部の幹部に列したこともあるが一向に上達しない。唯柔道に於ては革命の祖にして之を一般體操の代用たるに至らしめ、且つ遠く歐米にも其妙技を傳ふる迄に發達せしめた。此點は慥に成功者で、彼御影の酒屋の息子としては妙な方面に向上したものだ。

◎湯原元一は東京音樂學校長だが、音樂の素養はない。以前に中學校長や視學官などをしたことがある。但智術に富みて統一し難き此學校を巧に切廻してゐる處が彼の値だ。特に彼が先年幸田延子を放逐したのは、乃木大將の下田征伐と相對して頗る痛快だ。而して前者は智を以てし、後者は威を用ゐたるの差あるのみだ。

◎正木直彦は東京美術學校長だが、美術に關する知識は頗る深い。が學校經營の才や事務整理の能力は乏しいものだ。彼が今の位置は學友福原次官の推輓に依るとの事だ。

◎中川謙二郎は丹波出身で、元西園寺公望の家臣だ。教育に従事すること三十餘年。高嶺秀夫の後を承けて女子高等師範學校長となつたものだ。資性嚴正にして亦た公平だから、式部連のお守役には最も適任だ。

◎野尻精一は教育には頗る精通し、學校の經營振も立派である。奈良師範に赴

任し既に四五年を閲するも寂として聲なしたが彼は若溪派の一勢力である。○醫者の耆宿には青山胤通北里柴三郎佐藤三吉菅芳之小金井良精緒方正規濱田玄達中濱東一郎等があるが就中技量識見の共に秀でたるは青山胤通である。今の若手博士連は彼の前に羅拜するを以て榮としてゐる位なものだ。○手島精一は高等工業學校校長として始終一貫し多大の貢獻をしたもので經營の手腕包容の量も亦た群を抜いてゐる。

(四)

○玉利喜造は鹿兒島高等農林學校校長で海軍中將玉利親賢の兄だ。頑迷不靈だが教育界に於ける歴史が古いだけに相當な勢力がある。○高田早苗坪内雄藏天野爲之は早稻田大學の三枚看板にして學校創立の當初より參加して多大の苦勞をなせるものなれば總理大隈と共に學校のあらゆる限りは傳ふべき人物である。特に學長の高田は曾て埼玉より代議士として出馬せしこともあり學校經營上の手腕も可なりに冴へてゐる様だ。○鎌田榮吉は三田塾長で曾て福澤を佐け義塾と運命を共にせるもので胸襟

洒落且つ直覺的な男である。和歌山出身で曾て地方の中學や師範の校長となり、又代議士ともなつた。

○幸田靈伴は獨學で文學博士迄成上げた位な篤學者だが特に徳川文學に精通してゐる。其人温厚玉の如く同胞に郡司成忠延子成友がある皆才物である。

○坪井正五郎は人類學の博士で此風變りの學問は他に類がないので、八方から引張風のご繁昌だが本人も亦た夢中で土偶の掘出しなどには、何時も百里を遠しとせずして出掛ける。

○水島鐵也は神戸高等商業學校校長で銀行に關する學識經驗は頗る豊富で且神戸高商に關する十餘年の歴史を有し、大に内外の信頼する所となつてゐる。

○柴崎雪次郎は長崎高等商業學校校長で二十八歳で新潟商業に長となつた位だから、彼が學校經營の技量も察せらるゝ。東京高商出身で曾て歐洲に留學し、海運に關する研究をやつたものだ。而して今校長仲間では彼れ最も年少で随つて其前途も亦た頗る有望だ。

※ ※ ※ ※ ※

# 十大風呂敷

是を疊めば懐に藏る、之を展ればヤクザモクザ一切合切包まれて背に負はるゝ誠に調法至極なものだ。昔者蘇秦張儀は、此一枚の風呂敷で六國の王を包んだものだが、今其亞流を汲むものは、何をか包まんとする。

## 百二十五歳翁 大隈重信

早稻田大學 總長 伯爵

◎政界に於ける彼の壽命は既に其進歩黨の總理を辭せし時に葬式を了せり其後は單に批評家として大向の觀客となり頻に舞臺面の演技の巧拙を、我物顔に評議してゐるが是は的なることもあり、外れることもある。  
◎一日三四十の客を相手に、胸中の有耶無耶を吐き出さなければ癢が起ると云ふ質で、何を擔ぎ出しても、相當の意見を有し決して時勢に後れぬ所は豪いものだ。  
◎彼が十四年に野に下りて以來隨分閥族連の壓迫を受けたが容易に兜を抜

かず、何處迄も大隈一流で押通したのは、一に彼が理財に腐心し其爲には婿をも追出し、相場もやれば、商賣もすると云ふ風で、黄金の力は、何物より貴しとし、獨立濶歩の基礎を築いてゐるからだ。  
◎故伊藤の乾兒を有せざる、板垣の窮して振はざるは、皆財力を缺くが爲だ之に反し大隈の老いて益々壯なるは、蓄財のお蔭である。  
◎畢竟彼は如何に壯語するも、徳の人でない彼の爲に死を遺るゝが如きもの果して之ありや否や。  
◎併し彼は儘に學校と放言では成功の方だらうが、唯其至誠感神の點を見出す能はざるは遺憾だ。

## 獨居六十餘年の一禪僧 前大藏大臣 爵 渡邊國武

◎無邊俠禪渡邊國武は、元諏訪因幡守居城信州諏訪郡高島三萬石の藩士で、現宮内大臣渡邊千秋の實弟である。兄千秋は俗才に長け權勢に執念深き男だが、弟國武は宛然たる禪僧で、磊々落落、不離不着の裡に、一片の機略を備へてゐる。

◎ 一俗吏より成上りて大藏大臣となり、兎も角も一時は天下の耳目を聳動せしめたものだ。當年六十五の老域に入れども、體量二十三貫を算し、頑健依然猶藏相時代の無邊其儘である。

◎ 巨鼻巨口巨眼、其跪踞して冥想に耽つてる鹽梅は、什麼見ても蝦蟇の出來損と云ふ風で、怪中の怪であるが、ドウシテご當人は存外大なる常識を有し、中々世情政態に透徹したものである。

◎ 彼が西南役後高知福岡の如き、殺氣滿々の地に知事として特命を含んで選任せられ、克く暴れ浪入を制し、克く洶湧せる民心を鎮めて、聖澤に浴せしむるに至れる。其度胸と手腕は、到底へボク知事連の企て及ぶ所でない。

◎ 麻布本村町に庭樹翁爵として晝猶暗く古池寂々として、鬼氣漂へる間に、禪房めける居屋がある。曾て化物屋敷として、住む人のなかりしを、彼は其價の廉なるを奇貨とし、之を買取つて、浮世の假の住屋とし、爾來風雨二十幾年、家づきの化物も、此大怪物の勢に懼れけるにや、一向に影だも見せぬ様になつた。

◎ 彼れ昔男盛の折柄、今の鳩山未亡人春子女史の艷容に、憧憬れて屢々結婚を

挑みしに、偶洋行歸りの和夫博士より下りし眼尼を一層下げて、懇望されし爲に、赤繩は其方に定りて、彼は遂に體よく謝絶さるゝことゝなつたので、其より太く失望して、到頭孤獨生涯を送る様になつたと、京童は噂してゐるが、俠禪とも云はるゝもの、マサカ一婦人の爲に、左様な悲觀もせまい。又此頃春子夫人の自白に依れば、其は夫人の近親の人に、那麽な話があつた相で、夫人には全然關係のないとのことだが、何れが事實やら。

◎ 彼は讀書が好で、又時々結伽跳坐して三昧に入る。自身では餘程大悟徹底の積だらうが、世は彼を目するに野狐禪を以てし、大石入道と併せ稱してゐる様である。大石と彼とは、其行逕も性格も一致してはゐないが、唯其輪廓の不鮮明で、時々心機一轉を演る處は、兩者共に酷似してゐる。心機一轉は、彼が藏相時代に特に造出せる新熟語である。

◎ 時代の運命業に既に彼の頭上を通過し去つて了つたが、腐つても鯛だ、マダ中々味がある。而して老いて益々盛な方である。

◎ 漢詩は彼の誇とする所で、奇古鐵宕、猶俠禪其人を見る様だ。

### 變 隼 入 道 大石正己

前農商務大臣  
代議士

◎大石正己は後藤象次郎の稍型の小さい男だ。同じ土州出身で又後藤の尻馬に乗り大同團結などで騒いだ處は誠に克く似てゐる。

◎彼は既に世に定評のある通不透明不得要領の標本と云ふべき程である。毎年一度は缺さぬ様に議會で外交質問演説をやる幅もあれば實もあり一寸傾聴するに足るが如何に人形箱の三百頭顱も同じ様なこと計り毎年繰返されては溜つたものでない。今では彼の長講談が始ると大抵鬨を排して食堂などに難を避けるものが多い。

◎彼は克く飲み克く女中征伐などもやつたものだが近年は大徹和尚に隨つて禪を學び大典居士の稱號を受け天晴の野狐禪となつたので世は之に奉るに變隼入道の尊號を以てしてゐる。

◎時として議場に怒號し時として政界に黒雲を翻さんす勢あるかと思へば忽ち閑然として形を収め影を藏くして有耶無耶の人となる而して此時彼は

禪室に入り無念無想の境に逍遙するのだ相だが彼の禪も亦た調法なものじやないか。

◎曾て國民黨中の官僚派(穢多村と稱するもの)たる木ノ謙等が犬養の首を切りかけた時に彼は推されて其介錯の任に當らんとしたが形勢急轉して反對に木ノ謙等の首が飛ばんとするや彼亦た其介錯人となつた是等反覆表裏の藝當は彼でなくては出来ない處だ。彼が禪の妙諦は什麼生こゝら邊にあるかも知れぬ。

◎其容貌の怪心理状態の怪行徑の怪何れも現政黨員中其右に出づるものはなからう彼の怪も亦た大に珍重するに足るぢやないか。

### 英 雄 が 大 の 好 き 豐 川 良 平

三菱合資會社  
管 事

◎岩崎彌太郎の母は彼の叔母で彼の風采性格共に能く彌太郎に似てゐる彼の三菱に入つたのは明治二十二年だが爾來常に大局を看守し頻に其隆盛を計つてゐる。

◎ 壯時英雄を慕ひ豊臣徳川張良陳平の一字を取つて豊川良平と稱し天晴四海を席捲する積りだつたらうがソも參らず岩崎一家の一番々頭とは豊川良平のお名前が聴いて呆れるだらう。

◎ 人を観るの識見あり先づ故吉川泰次郎を郵船會社に入れ莊田平五郎を抜いて三菱の重鎮とし或は加藤高明を佳婿に推選し或は大石正己増島六一郎山本達雄木村清四郎馬場辰猪等に資力を供して學ばしめ其他育英の爲に盡くせることは多大なもので以て他年三菱家輔翼の材を養ふことを怠らない。

◎ 時々請はれて演説をやるが何を喋べつてるか一向に要領を得ず文章も不分明で書は最も拙劣だ蓋し英雄は萬人の敵を服するを知るのみで筆舌の技は一切お構ひなしの方だ。

法螺と廣告の當屋 (一) 天狗煙草の元祖 岩谷松平

◎ 天狗の岩谷松平と云へば一時海内の耳目を驚かしたものだ彼が銀座街頭の赤ペンキ塗の大伽藍に大小各天狗の面を掲げ轡の紋章を表出し且つ廣告して曰く驚くなかれ資本金たつた百萬圓職工十萬人而して其店內を窺けば二三十の婀娜もの十分に艶飾して客の應接と事務の取扱をする近來は鐵道銀行其他の店舗に女事務員を置く様になつたが其頃では恐く彼が皮切で而も思切つて濫皮の剥けたのを揃へて夫の天狗店の内に蓄へ奇を喜ぶ江戸ッ兒の目玉を廻はさせし計畫が圖に中りて大繁昌を來したる彼亦た尋常一様の木葉天狗でない。

◎ 彼れ生來頑強驚く計りで兎も角も成金屋の一に數へらるゝに至つたのは其頑強が唯一資本で突飛なる天狗行爲が其に色彩を加へた迄である曾て彼の天狗煙草屋に蓄へし婀娜ものは皆其妾にして夜毎に交代して彼の枕席に侍せしと云ふ而して彼は其等幾多の妾を満足せしめたといふからには其頑強さも大概知らるゝではないか又聞く彼に十餘名の異腹の子女ありと是等は特に彼が頑強の餘慶なるを證するに足るものである。

◎彼は薩摩出身で、少時より利に志し、之が爲に夙くより他郷の人となり、随分辛苦の數々を嘗めたものだ。而して銀座に店を開き、先づ薩摩飛白と薩摩煙草を賣始めたのは、明治十三年であつた。其れから同郷の先輩川村純義、黒田清隆等に引立てられて、意外の儲をなし、煙草の製造販賣亦た益々擴張し、遂に村井吉兵衛、千葉松兵衛等と相對して、一時海内を煙にしたものだ。

◎彼は天狗時代には、常に緋羅紗の服を纏ひて、赤馬車に乗り、日々帝都を縦横に奔馳し、臆面もなく自家と煙草とを併せ廣告したものである。彼は黄金の力で衆議院議員となり、東京商業會議所會員ともなつたが、之に出席するにも、常に一抱の廣告ピラを携へ行き、機を見て盛に詩き散した。彼の目には、是等の公席も、淺草雷門前位に見しなるべく、議員等は觀音參と擇ぶ所はなかつたらう。

(二)

◎轡の紋章は、藩主島津公の定紋だが、彼亦た薩摩の出身で、お國産物の飛白と煙草を賣れるを以て、特に藩主と同紋を用ゐて、俗眼を驚かした。廣告には、其も多少の効目はあつたらうが、利用された藩主の方では、甚だ迷惑を感じて、其紋

章撤廢を促した。處が頑強の彼れだ、ドーして理窟責では、容易に兜を抜いて降散しない。到頭先輩某々等の仲介にて、ヤット紋章の轡の中の十字の上下を、外輪より少し離して區別を付くることゝした。

◎煙草製造業が國有となるに及び、彼は多大の賠償金を得て、市外澁谷村に退隠して、豚飼爺となり、曾て愛玩せる群妾を解放して、新に正妻を迎へ、清らかなる家庭を作つてゐる相だ。

◎彼の事業として、今猶關係せるものは、略下記の通だから、隠居と云つても決して他の耄碌爺等の夢にも見る克はぬ所である。

日本家畜市場株式會社社長、美濃炭坑株式會社博多灣鐵道株式會社各取締役、東亞煙草株式會社監査役。

◎彼は文字のない男だが、能く機先を制し、大膽に計畫を遂行するの勇猛心がある。蓋し是等は彼に文字なかりしが爲に却て、其長所を存分に發揮し得たもので、若し然らずして、多少の文字あらば、其が制裁を受けて、天狗の面だも冠も能はずして休んだかも知れぬ。



◎彼も既に六十四五の老爺となり、過去帳に埋られたも同様だが、過般安田善次郎に書を送り、銀行を起したいから一寸来て呉れるとのことだから、安田は早速往訪て曰く「銀行業は君の様な尻の括りのない男には賛成は出来ない。」スルト彼曰く「否己が行るのでない、頃者外國歸りの伴に行らせるのだと、安田も、其ならば考へて見よう」として別れた相だが、雀百まで踊は止まぬとは、這の老爺のことだらう。

### 長廣舌 殖民地荒し 峯岸繁太郎

(一)

◎日露戦後、韓國京城に一の邦字新聞を起し、或は統監府を、或は東洋拓殖會社等を盛に攻撃し、屢々發行停止の厄に逢つたが、毫も其主張を枉げずして突進し、日韓合邦が行はれ、總督寺内が大に新聞壓伏策を行ひ、僅に自家の御用紙を除くの外は、一切有力なるもの、買収を實行するに方り、彼は大に悟る所あつて、斷然之を手放して、同地に於ける實業界の人として立つことゝなつた。

◎冒險突飛誇大我慢は彼が天稟の特有物である。今の彼は、甚麼な事を經營しつゝあるかを知らぬが、過般朝鮮銀行總會の東京に開かるゝや、彼は之に蒞み、經濟問題を提げて、獨特の長廣舌を揮つたとの新聞記事があつた。又一昨年頃彼は一株所有者の權利として、東洋拓殖會社を對手として起訴し、大に是非を法廷に争つたこともあつた。

◎經濟問題には彼は常に没頭して研究を怠らず、之が爲には突撃をもやれば、冒險的行爲にも出る。近く朝鮮に於ける彼は其であるが、更に遡つて二十幾年來の彼を瞥見する時は、成程と首肯さるゝだらう。彼は儘に奇怪の二字を冠するに足るの男兒である。

◎彼は水戸在の湊村の産とか聞いてゐる。彼地方はアイヌ種の骨相を存し、且つ潮風強く、九十九里の濱傳に寄せ來るので、住民多く赭黒色を帯びてゐる様だ、而して彼は其著しき代表者とも云つて可なりだ。一體に骨格逞しく、肥勝で就中其腹部は、サツポロピールの廣告に用ゐられたるものゝ様だ。丸盆の様な顔の中に、扁平な鼻と巨口とが特に目に付き、且つ無髯、有つても無きが如しにして

緒黒色と云へば彼には色男の資格なきことは、言新しく説く迄もあるまい。

(三)

◎親しく彼に聞く所によるに彼は十八歳にして數輩の同志と小笠原島に航し(明治十九年)時の島司小野田元熙の斡旋に由り某米國船に便乗することを得近海旅行の名の下に南島探検を行つた而して彼は其後三四年間、ラトランド、カロリン諸島の間を放浪して竊に秘鑰を探つてゐた。

◎故田口鼎軒の猛氣猶勃々たりし頃だ田口は南島貿易の有利なるを唱道して南島商會を創立し群島の主權を西國より購ひて茲に東京府士族を移住せしめ先づ珈琲砂糖の栽培業を起し併せて土人との貿易を企て自から天祐丸に乗じて群島間を巡航してゐた。

◎放浪中の彼れ峰岸は之を聞いて直に田口に會談したが兩者の意圖相投じたものと見え彼は忽ち南島商會員となりて多年の夢想を實行せんとするの折柄時機未だ熟せず鼎軒の計畫は畫餅に歸することゝなつた。

◎彼は再び放浪生活に入り土會の家に客となつてゐる中に土人は反旗を翻

して西國の支配から脱せんとしたので西國は討伐軍を差向けて土軍と戦つたが一勝一敗容易に決しない彼も之を黙視せんにも腕が迂鳴つて耐えきれないで屢々陣頭に立ち或は帷幄にあつて大に策戦をやつたが熟ら熟ら考ふれば彼が郷國を飛出せる目的は那麼な事をやる爲に來たのでないから偶米國船の某島に寄港せるに便乗を請ふて布哇に落延びた。

◎彼には此間に艶話がある彼が宿せし土會の家には芳齡二八の美人がゐた美人とても土人式の其にて日本人の吾々から見れば人三化七位なものだが什麼いふものか彼はこの美人に魅入れて遂に感懃を通する様になつた故に野心一天張で行ば王の聲様ともなり面白い狂言も演じられたらうちや無か。

◎彼が布哇に着したのは明治二十五年頃であつた先づ彼地での奇物岡部次郎と昵近になり岡部を助けて同胞移住者に移住上の福音を傳へてゐたが彼れ元來學問らしい學問をしたことがないので遂に對岸のカリフォルニアに航して同地の大學に入り經濟學を専攻した。

◎再び布哇に歸り其より甘蔗或は珈琲の栽培をやつたが思ふ様に行かなか

つた。次で歸朝し、其三寸不爛の長廣舌をたゝいて、移住植民の急務を説き、遂に有力者の賛助を得て、東洋殖民合名會社を設立し、彼は其業務執行員として大に奮闘したが、時利あらずして失敗に了つた。

◎其後彼は農商務省か何處かの囑託の下に、歐米視察と洒落れて大分見聞を廣くした。彼は寧ろ實行の方よりも議論に長じ、又其が三度の飯よりも好である。曾て饒舌家の大隈伯と、經濟協會で長時間の掛合演説をやり、其後彼は屢々伯の邸に押掛けて議論の花を咲せ、流石の伯をして避易せしめたことがある。兎も角も彼の如きは今の朝鮮などでは、無類飛切の名物男たるの資格がある。

### 易斷天狗 從五位 高島嘉右衛門

(一)

◎孔夫子は純金塊で、我は石塊だ。然るに相摩擦することの久しきに及び、石塊は満面に金化して、今や何れが眞の金塊なるやを辨する能はぬ程になつた。

◎這は吞象博士の嘉右衛門が、常に衆人調座の前で高言する所で、其意は久し

く聖人の學を修め、既に圓熟して彼亦た聖域に入り、殆んど孔子と同様になつたとのことだ。法螺も此處迄吹貫けば罪がなくて宜い。

◎天保生の老爺だが、軀幹高く、眼底光あり、未だ頑丈なもので、若い妾の一人や二人決して寂しがらせる様なことはあるまい。

◎彼の易斷は、彼が昔賈札事件か何かで入牢してゐた時の暇潰に、吞象一流の研究をしたもので、サテ娑婆に出て見ると、皆名利を逐ふに忙はしく、易學などの沙汰でない。其處で彼れ得意満幅で吹立てたが、其言ふ所が中々能く適中すると云ふので、大評判となつた。盲千人の世の中の難有い處は、其處だ。

◎然るに彼の狡獪なる豫め事件の真相を研究して、而る後之を易の各爻に當儀め、其得意の快舌を揮ふとの事だから、大概の連中が煙に巻かれつゝも、事實の適中せるに驚く相だ。

◎易斷は彼が浮世を渡る假面で、彼は矢張權勢に溺るゝ、餓鬼たるを免ない。明治桑滄の際に、彼が京濱間に出没して、獲取せる利潤は莫大なる物だらうが、其方略は毎時も羊頭狗肉的で、巧に俗眼を眩殺し、且當世の英雄を生擒にあつた。

◎一例を擧ぐれば、故副島伯の外務卿時代、伯は其頃獨身であつたのを、彼は奇貨措くべしとし、豫て求め置ける番町の閑邸に書畫會を催ほし、伯を始め當時の名流を招請した。廳で逸興盡き客散するを待ち、彼は切に伯を留めて、更に一幅の揮毫を別室に求めた。其處には待つてゐましたと云はぬ許りの花耻しき美人が、丁寧に會釋をなし、墨を磨り紙を展べる。木石ならぬ伯も之を見て、恍惚たること半胸計り、電氣に感じた様な風でソワ／＼しながら、ヤット揮毫を終つたものゝ、歸るには惜しき風情なるを、美人は伯を湯に導き、何くれとなく親切に介抱する。續いて膳も運ばれ、酒も出る。同じく美人のお酌と來たので、伯も遂に其夜は此宅に嬉しき夢を結んだ。

(二)

◎誰か知らむ、這は彼が數月前より選りに選つて探し出せる美人を、書畫會に託して伯に接せしめ、遂に伯と徒ならぬ仲としたのだ。爾來彼は大に伯の愛する所となり、其事業上多大の便益を得たとの巷談が残つてゐるが、其遣口は恰も大倉喜八郎が向島の別荘に美人を蓄へ、權勢の餓鬼を生擒して其生血を吸

つたとの噂と同一筆法である。

◎此他彼は一女をして公伊藤博邦に嫁せしめ、又一萬圓を海防費として獻納し、爲に得たる從五位を毎時も振廻はす等、其紛々たる銅臭街臭は眞に鼻持が出来ない。

◎老人の素ッ破抜は、チト氣の毒だが、別段罪のあることでもない様だから、ちつとんべい昔話の節々を披露した譯だが、彼の易の講釋は亦た特別だ。十餘年前迄は根本通明や三島中洲などの私塾に屢々横濱から出陣に及んだものだ。

◎彼の易は神易で、元來易といふ字を分析すれば、日月となり神といふ字は示申すとなる。故に彼の易斷は、日月の如く明に示し申すと云ふ意味だと、彼既に孔子以上の人で、更らに其智を日月に比するに至つては、眞に滑稽至極である。

◎近年高島直傳易斷の看板を掲げてゐるものを、時々見受くる。又高島易斷てふ一書の猶生命あるを見れば、迷信者に餘程崇拜されるものらしい。

◎高島易斷は主として久保檜谷の作で、久保は當時彼の食客で、彼の意見は唯其一部を埋めてるだけだ。相だ彼の行口は萬事略こんなものだ。

# 十一 篋 迷

言ひたいと言ひ、爲たいとする。其が出来ない時は、忽ちヤジウを極めて篋迷と叫ぶ。之を己を屈し人に媚び、歸つて僅に妻妾に誇るものに比すれば、其勝ると萬々だ篋迷の兄弟分に長脇差あり、頃者意氣將に衰へんとす、汝も更に奮發一番せすばなるまいぞ。

## 其新聞は克く其人を寫してゐる

萬朝報社長 黒岩周六

◎萬朝報は一時二六と相對して、帝都に於ける惡徳新聞の一對と云はれる迄に、隱微を許き醜行を懲したもので、同時に黒岩涙香は、蝮の周六として厭はれたものであつた。

◎之に反し今の萬朝報は、毎時も民論に肩を入れ、正義堂々何れにも偏せず、且つ報道も精確で要領を得たもので、四ページ新聞としては、本邦唯一のオーソ

リチーである。

◎曾て涙香の探偵小説なくしては、都下の貸本屋も營業が成立たぬといふ迄に、彼の小説は持囃され、随つて新聞賣行の一半は、其が爲であつた位だが、彼の筆は誠に簡勁明瞭で、且つ如何なる問題も、何人にも解し得る様に、平易に説くの妙を有してゐる。這は年と共に老熟し來り、今や渾然たる大家の域に入つたのである。

◎彼は多趣味で、且つ凝性な男である。曾て狂詩、自轉車、花牌、相撲、玉突、トランプ、五目並等、何でもご座れ、一度は夢中になり、各其堂に上つたものだ。就中五連碁は今猶其大將株として、盛に興味を遣つてゐる。

◎天人論は彼が得意の著だが、之は内村鑑三の在社時代に企てられたもので、其頃は一種の哲學研究に、寢食を忘れた程であつた。

◎新聞の編輯には、獨特の技量を有してゐるが、大體に於て猶彼の文章を讀むがごとく、簡潔明瞭で、中に秋霜の威あり、春花の艶なるあり、趣味頗る豊富である。◎彼は新聞を基礎として、一種の理想を絶へず實現せんとしてゐる。即ち本年

の選挙に社員古島一雄を推選したるが如き或は夙に理想團を作り同志の面を集めて時々意見の交換を行つてゐるが如き何れも其理想の一片である。◎彼は多く交るも特に懇親を求めぬと云ふ方である何となれば懇親なるものには悪事あるも情として十分攻撃の筆が加へ難いからだ這は操觚者としては誠に面白い考の様だ。

◎那の新聞でも各主義あり特色ある中に獨り萬朝の官僚にも政黨にも富豪にも一點の關係なくして多數平民の味方として又代表者として侃々諤々との議を一貫せるは其貴ぶべき所以で同時に其主宰者たる彼の大に敬すべき所以である次の選挙には彼も起たんとするの説がある起たば一種の異彩だ。

痛癢の強きと火の如し 醫海の元老 長谷川泰

(一)

◎長谷川泰は、蠻殼の隊長とも云ふべき男だが、日本醫學の爲には偉大の功勞者である故に穩當にさへしてゐれば早く既に男爵位にはなつてゐるのだが、

其處が即ち變人で疴癢持で負嫌で傲慢と來てるから堪らない折角彼を引上げんとする元老も推出さんとする後輩も手が付けられぬので遂に生涯を不平に送り奇人傳中に收めらるゝ様になつたのである。

◎彼の父は、越後長岡の儒者で醫を兼ねた宗濟てふ人である頗る徳望家で時人其姓を呼ばずして村名福井を以て通じた程である彼は其長子で幼時より剛頑不屈で村の餓鬼大將であつたが父の家業を次ぎて醫となり長じて下總佐倉の佐藤尙中に學んだ今の順天堂病院長の博士佐藤進は同門の人であるが兩者の間に艶聞がある。

◎佐藤尙中に別嬪の愛嬢があつた其に養子をせねばならぬ然るに尙中は長谷川佐藤二者の人物を看取して前者を得たいものたと思つてゐたが當時の長谷川は實に亂暴至極で女郎買はする大酒は飲む時々二階の居室から蒲團を抛出したたり火鉢を投下したりして之を質入し遊興の資としたものだこの亂暴に加ふるに彼は女好きのせぬ醜男であるに反して佐藤は容貌も温雅で品行も方正だから愛嬢は一も二もなく佐藤に首つたけ參つて了ひ長谷川を

毛蟲の様に嫌ふので、嚴父も如何ともする能はず、白羽の箭は、遂に佐藤に中つて、尙中の跡を襲ぐことゝなつた。

◎維新の際、負傷兵を收容する爲に、下谷の藤堂屋敷に大病院を設立して、洋式手術を實施し、其成績が良好であつたので、明治三年彼は尙中等と共に之に鑑みて、謂ゆる大學東校を創めたが、忽ち尙中と意見の衝突を來たし、遂に疎腕を揮つて尙中を除いて了つた。反對側の學生等から、匕首を擬せられんとしたこともある。彼は續いて次長の位置に立つたが、明治九年時の文部大輔田中不二麿と、又もや衝突して職を辭し、其より私立濟生學舎を起し、自から其長となつた。

◎彼が事功の中では、この醫學校が殊勳である。此校に學んだものゝ總數は、非常に夥しいものだらうが、現在全國にて醫を業とするもの三萬八千餘人の中で、其過半数は、彼の門より出たものだから、彼の薫陶の恩も亦推して知るべし。その後、明治三十五年に至り、彼は他の一切の公職を辭して、専ら學校の爲に盡し、且つ之をして私立大學たらしめんとした。が、偶々文部當局の容るゝ所となつた。

らざるを憤慨し、突如して廢校して了つた。彼が疝癪の爆發する所で、什麼にも致方もないが、當時の就學生こそ酷い迷惑なものだつた。

◎彼の官公歴は、東京府衛生課長、警視廳病院長、内務省衛生局長、第一期の代議士、中央衛生會委員等であつたが、何時も衝突より衝突で一貫し、代議士の時なども、數時間に互る、籠迷的文部省顛覆演説をやつて、大に當局を驚かしたことがある。

(三)

◎彼の衛生局長時代に、他の高等官等は、自用車にて意氣揚々と登壇するに引代へて、彼は獨り一日七錢お定りのヨボ／＼車にて、本郷の自邸から役所へ乗付けて來るので、新參の門衛に時々怪まれたものだ。

◎彼の管理せし濟生學舎は、天下獨得の奇觀を呈したもので、其學生の服裝等は、千差萬別で、洋服に高足駄サテは、羽織袴ヌキの兵兒帶姿もある。其等が教場にあるや、醫書のみ見ると思ひの外、女郎の艶文に涎を流すもあり、院本小説に己を忘れてるもあり、小聲で昨夜の憶氣を吐合ふもあり、而して若しも面白

からざる講義の時は靴を鳴らし下駄で踏む音喧しく何時も先生を困らしたものであるが獨り彼れ長谷川の大先生のみは是等の腕白連に喝采を以て迎へられたものだが彼は當世を罵倒し獨天狗の長談議をペランメー式の蠻音で盛に振廻はしたものである。

◎彼會て男石黒忠恵と相携へて柳原河岸を徘徊してると賣卜の一老翁が彼を指して劍難の相ありとして頻に用心を勸むると彼は卒然さう云ふお前こそ水難の相があると云ひも終へぬに忽ち賣卜翁を引擔いで神田川へ投げ込んで了つたことがある。

◎服装を構はぬと彼の如きも少からう彼が濟生學舎を廢したる當時は毎夜湯島切通の夜店を素見し垢染みた着物に冷飯草履を穿き什麼にも物騒な男だから屢々刑事に尾行せられ其邸に入れるを見て刑事は彼の玄關に到り只今是々の怪しき男が貴邸に入つたと注意し其が主人の彼たることを譯り大笑となつたこともある。

◎彼が冷飯草履は左程目にも留らぬが時として例の垢染みたる羽織を裏返し

にして往來を平氣で行くことがある。テ家人や書生に注意されて初めて其を知り獨り興がつたものだ。

(三)

◎醫科大學が醫學校の當時に彼は組長として監督の任にあつたある時一生徒が同寮の時計を盗んだ罪を責めて自分の組下に斯様な破廉耻漢を出したるは宥す可からざる事なりとして懲らしめのため小便を飲ましたことが學校の問題となり彼は教頭に呼ばれて大に叱責されたソコで彼は何を小癩なと怒ること甚だしく遂に校門に上り教頭の過ぐるを待受けて其頭上に小便を亂射して亂暴を極めたことがある。

◎神田猿樂町の小林某の家に次女の柳子が嫁いでゐる。一日彼は例の通無頓着的の風をして之を訪ふたが新參の下女に乞食と間違へられて門前拂を喰はふとしたことがある其から電車の中で陶摸と怪しまれて刑事に追跡されたこともある。

◎彼は這様に無頓着な男だつたが其で中々理財の頭もあれば企業之才もあ



つた。彼が死する時には、三四十萬圓の財産が遺されてゐたことである。  
◎藏書は彼の誇とする所で、無慮六萬巻計のものが、二棟の倉庫に充填され、彼は廣き座敷に會心の書を處狭き迄に取散し、其間に晏座耽讀するのを無上の樂としてゐた。彼が藏書の三分の一は佛書で、彼は其研究には久しく丹誠を單めたものだ。故に彼が行爲の頗る超脱して、寧ろ奇狂に見られしは、其爲でもあつたらう。

◎彼は亦た曾て福澤翁と共に、教育功勞者として、綠授賞を授けられたるも、兩者は何れも固辭して受けなかつた。彼の息保定は、寫眞店の主人で、相當に聞えてるが、奇俠剛健彼の衣鉢を繼ぐもの果して何人だらうか。

### 笹迷の好一對 理學博士長谷芳之助

◎笹迷の兩長谷川と云へば、彼と長谷川泰のことで、剛情で我慢で手がつけられぬ併し、日本帝國てふことは、須臾も其胸臆を離れない。故に彼は帝國の安危に關し、又面目を傷ける様のことあるを見る時は、常に奮然として起ち、慨然として呼號するのである。

して呼號するのである。

◎彼は肥前唐津の出身で、夙に米國に留學し、故侯爵小村壽太郎と同窓であつた。歸朝後工學博士となり、三菱の鑛山部長となり、又は鳥取より代議士として乗出したこともあるが、彼は何よりも鑛山界の元老として重をなして居た。

◎故小村侯とは、在米以來の親友で、氣心も能く合つてゐたが、小村の外交振が、何時も癢に障つてならぬ。特に夫の日米條約の成つた時の如き、彼は之を屈辱條約となし、慨憤措く能はず。直に小村を外務省に訪ふた處が、恰も閣議最中だつたので、面會を謝絶された。が、彼は會へる迄待たうと、其儘大臣室に坐り込んで動かないので、聽て小村が會ひに来ると、彼は卒然大喝して曰く、貴様の外交の態は何だ。當時彼の服裝は、烏打帽に羊羹色の短いマントで、乞食老爺も跣足の姿であつた。

◎曩に平田東助が農相たりし頃、鑛山調査委員幾名かを選定した處が、彼は其選に洩れてゐたので、大に怒り直に電話で大臣を呼付けたので、代りに秘書官が出る。と、秘書官に用はない。是非大臣に出ると云ふので、到頭大臣が出ると、彼

は貴様は怪しからぬ奴だと痰阿を切つたので大臣も何だとシツ篋返しに出ると何だとは何だなせ我輩を調査委員にせぬのだと喰つてかゝる之を聞いて大臣あゝ其事か其なら色々事情があるから後で緩つくり話さう彼はナニ那麼な通口上を使はずに今此處で確な返事をしろと攻立てる。ソコで名代として博士古市公威が彼の宅へ出張すると彼は古市を捉へて貴様は平田の名代がつとまるか。

◎ 昨年大陸會か太平洋會かの席上で彼は例の筆法で大に憤慨演説をなし天下亦一人の愛國の士なしと呼だ偶坐に櫻井熊太郎がゐた彼れ亦た奇俠の男だから腕を扼して起ち大に彼の失言無禮を詰つた。此に於て喧嘩に花が咲き將に鐵拳交々飛んとするに臨み同座の衆に擁せられてヤット事なきを得た。◎ 彼の細君は濱尾新の妹で賢婦人の聞がある彼が屢々演壇に立たんとするや豫め言はんと欲する所を條記するのであるが時々脱線するので綿密細心の細君は一々之を點検して脱線の箇條は常に之を除外することである。◎ 太平洋會は彼の發起だと思ふが彼は曾て米國にあり其事情に通せるだけ

日米問題には最も熱心であつた。◎ 然るに今春泰逝き今夏彼亦た白玉樓中の人となり篋迷の長谷川一對を喪ふた呼復た狂風怒濤の聲を誰の唇頭に思ばむ哉だ。

### 洒落と大酒の名物男 帝國大學教授 和田垣謙三

◎ 和田垣謙三は明治十三年の大學出身で英獨兩國に留學して理財學を修め二十四年に法學博士となつたのだから赤門出の博士としては随分古いものだ但彼の講義にも、モ一徹が生へて來たから大抵な處で足を洗ひ何處かに隠居召さつてお好きな酒でもタント浴びられたが宜んべい。オット皆までの給ふな其處に如才があるものか嘉悦孝子のみ輿に乗つて遠の昔に女子商業學校校長となりお酒の料は、コ、から月々十二分に差上げらるゝのだ。

◎ 彼も大學教授の俸給のみでは物價騰貴の時節柄飲料も怪しいので柄にもない女學校の校長となり又一二私立學校に講義を受持つ其又内職に辭書の編輯もやる學者の世渡も中々六づかしいのではないか。

◎彼の性格の何となく茫乎たる處と、大學の古物で、大飲酒家の點は能く博士寺尾亭に似てゐる。寺尾は頃者支那から歸つて浪人となり、相變らず、氣焰萬丈だが、和田垣は何を感ずつてか、目下歐洲旅行中である。

◎彼の姿を時々牛込邊の一杯酒店に見かくることがあるが、彼も此點は三浦觀樹將軍式で、飲たくなれば何處にでも飛込む、外見も何もあつたものでない。

◎一體駄洒落澤山な男で、曾て同じ法科の博士金井延と某處に遊び、犬に興をやつた揚句に彼曰く、君は到底僕には敵ひ得ん、金井延だと彼の講堂にあるや、滑稽百出して、鼻天狗の圓遊裸足の妙がある。故に那の學校でも拍手喝采を以て彼を迎へ、彼の講義に居睡などをするもの一人もない。此他先年、板垣の自由民權論天下を風靡するに當り、偶彼れ品川の一酒樓に、牡蠣を喰ひつゝありしが、啞嗟咏んで曰く、世の中はカキの味こそ佳りけれ、板カキ伯に和田カキ博士だと。

◎之もズット昔一時男女同權論の盛なりし時、某所で婦人教育會が開かれた、彼亦た演者の一人として天理論てふものを掲げた。待ち設けたる婦人席では、

彼れ定めて女權擴張を説くならむと、片唾を呑みし甲斐もなく、彼れ壇上に現はるゝや、滔々數千言、みな男尊女卑の天理論で、灰殻女流の鼻を挫いて、顔色なからしめた。

◎之は法學院での講義中、生存競争につき、經濟學上の理を説き、且つ曰く、生存益々難を告げて、兒を育つる克はずんば、宜しくルーデサツクを用ゐて、兒の飛出さぬ用心が肝要だと、講堂破れん計の大喝采。

開化せる賭場荒し 代議士 松下軍治

◎彼はやまと新聞社長で、衆議院議員だ、今の世に官僚たらず、富豪たらずして、男一疋切つて、一切りまくるには、絶好無類の武器を有したものである。

◎彼の人物は、世に定評のある通籠迷に、野武士を調合した様な型である。學問識見何等稱すべきものはないが、獨り膽と勇と機才の拔群な處がある。是即ち彼の今日ある所以で、彼の如き男には、學問のない方が却て仕事が出来、由來端た學問は却て人を賊するの基となるものだ。

◎彼れ夙に信州の山奥を出で、東都に來り、諸種の經驗を積みて、心志を鍛ひ、去る三十三年現在のやまと新聞を購ひ、其社長として大に規模を擴張し、今や一日三刊紙數二十萬を出すと豪語せる程に、勢力を植ゑたものだが、當初彼と同郷の富豪色部義太夫など、随分資力を供給したものだ相だ。

◎新聞と代議士は、彼が戰鬪の旗馬印で、其死活を争ふは株式市場である。彼は偶一舉百萬圓を贏ち得ることもあるが、時としては敗亡地に塗れんとすることもある。然れども奇怪老熟の手腕は、能く其を恢復し、纏縫し、容易に尻ツ尾を現はさない。

◎彼の新聞を経営するや、殆んど損得を顧みず、擴張に擴張をつゞけ、専ら中流以下の人氣に投せんとし、一時賣高に於て、覇を稱せる報知の壘を凌ぐ様になつた。而して其社員を御するや、亦猶親方の乾兒に於けるがごとく、意に投ずれば、錢を吝まらずして之を用ゐ、一たび癩に觸るれば直に之を解雇する。故に社員出入の頻繁なること、他に其類を見ない程である。

◎伯田中は、彼が極めて昵近なる人で、京童の傳ふ所に由れば、伯は彼が徳憑に随つて、投機に指を染め、百萬圓以上の損耗をしたと、信偽之を確むるの要なきも、彼がお慰對手として、行り難ねまじき藝當である。

◎本年の總選舉には、新聞社總出にて、且つ少くも三四萬圓の運動費を投じて、鹿を東京に逐ふたが、危機一髪の處で、ヤツト當選した。是に由つて見る時は、單に金錢や筆舌のみで、左右されず、殆んど人格標準となる迄に、東都の選舉理想が、進歩したと云つても宜しからう。況や彼の如きは、議員として議場に立てば、何等抱負主張の見るべきなく、眞に員に備はる迄の男だ。唯其肩書てふものが、何かの役に立つのみだ。

◎賀田金、後藤勝藏等は、彼が投機戰に於ける戰友だが、彼等は單金力萬能で、之を得るを以て、天下無上の快としてゐる。然るに彼は、其に加ふるに、猛烈なる虚名心がある。新聞と代議士は、即ち其れだが、彼は、徒に虚名を悦ぶ計りでなく、之を金力扶植の一段として、巧に驅使するの術を心得てゐる。此邊が彼の尋常成金や、投機連に違つてゐる特徴であらう。

\* \* \* \* \*